

2009年度日本財団助成事業



実践から学ぶ 発達障害支援団体エンパワメントセミナー

「気付き・自覚・改善・波及…繋がりあった発達障害支援団体」
～内なる力を引き出すために～

特定非営利活動法人 みやぎ発達障害サポートネット

はじめに

「発達障害」という、脳の器質的特性に起因する対人関係の構築に困難さを抱え社会関係における様々な生活のし難さを抱えている人たちがいます。

平成17年4月1日「発達障害者支援法」が施行され、国はライフステージに応じた生涯にわたった支援を国や各市町村に義務付けましたが、その具体的運用・活用は各県・市町村に委ねられています。

このため地域による具体的施策の展開には格差が生じ、各地で親の会やNPOなどの活動団体が手探りの状況下大きな苦勞をしながら支援を展開しています。

こうした課題を抱えながら各地で活動している団体が、宿泊型研修を通して交流し、エンパワメントされ、組織マネジメント・発達障害支援の両面で発展することを目的に、平成20年10月10日・11日の両日愛媛・山形・宮城から6団体・10箇所の支援機関が参加して「発達障害支援団体エンパワメントセミナー」開催いたしました。

セミナーの開催に当たっては、日本財団さんからの助成をいただき、1泊2日の宿泊型研修が実現できましたことは、大きな成果を生む原動力となりました。

ここに深く感謝いたします。

また、講師として寝食を共にしながら、持っておられる支援スキルや情報を惜しみなく提供していただき、かつ講義録を開示することにより、6つの団体が共有した学びの裾野を広げることに快くご了解を下さったお二人の加藤先生にも深く感謝申し上げます。

参加団体：

愛媛県 ダンボクラブ

山形県 (特活)発達支援研究センター

宮城県 (特活)くもりのち晴れ

(特活)アフタースクールぱるけ

(特活)みやぎ・せんだい子どもの丘

(特活)みやぎ発達障害サポートネット

助 成：日本財団

主 催(特活)みやぎ発達障害サポートネット

平成22年3月31日

特定非営利活動法人 みやぎ発達障害サポートネット

理事長 大塚 美智子

STAGE1:出会う

日 時:2009年10月10日(土)10:00~10月11日(日)17:00

会 場:宮城県作並温泉「ゆづくしの宿 一の坊」

エンパワメントセミナータイムスケジュール	
10月10日	10月11日
9:00 受付開始	朝食 &朝風呂
10:00 加藤(哲)講義1	10:00 加藤(潔)講義2
12:00 加藤(哲)講義1終了	12:00 加藤(潔)講義2終了
12:15 昼食	12:15 昼食
13:00 加藤(哲)講義2	13:00 加藤(潔)講義3
15:30 加藤(哲)講義2 チェックイン	14:30 加藤(潔)講義3終了
16:00 加藤(潔)講義1	14:45 加藤(潔)ワークショップ
18:00 加藤(潔)講義2	17:00 加藤(潔)ワークショップ終了
18:15 夕食&交流	17:15 全体終了
20:30 お部屋で盛り上がってください	気をつけてお帰り下さい

会場は仙台市近郊の温泉で。「たっぷり学んで疲れた頭と体は温泉で癒しましょう」とお誘いしました。

理事長のご挨拶から「出会い」がスタート。



STAGE2:学ぶ

10月10日 加藤哲夫さん講義録



加藤 哲夫さん

(せんだい・みやぎNPOセンター代表理事)

担当:組織マネジメント力向上・協働・
交流会・ワークショップ

1949年福島県生まれ。1992年より
[独占するより分かち合う]をテーマに
全国的な起業サポートと事業者の異業
種交流ネットワーク「エコロジー事業研
究会」を10年間にわたって主宰。

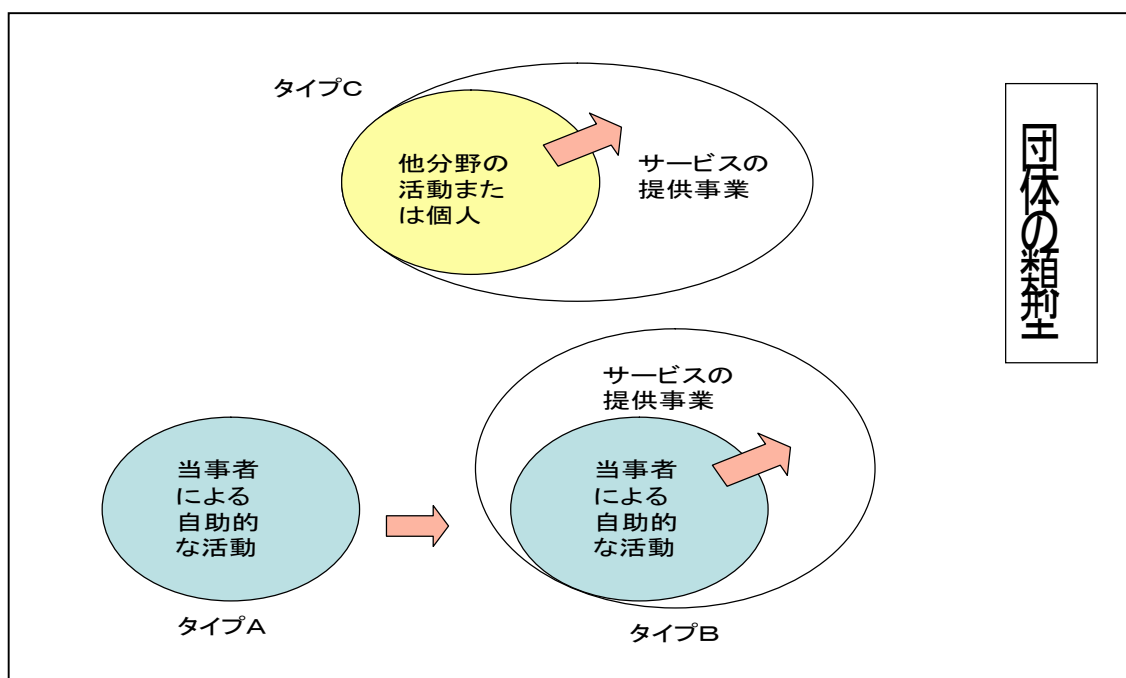
1995年頃から、市民活動／NPO による新しい市民社会のシステムづくりに積極的に取り組んで、1997年11月に民設民営によるNPO 支援センター「せんだい・みやぎNPO センター」を設立、1999年特定非営利活動法人化して、代表理事・常務理事を務めてきた。2000年より企業との協働による、NPO 支援のシステム「サポート資源提供システム」および「地域貢献サポートファンドみんな」を開発・設立・運用し、全国から注目されている。

一方、全国区の活動として、年間130回以上、行政職員研修、NPOマネジメント研修等幅広いテーマの講演・ワークショップを行い、全国を飛び回っている他、多数の著作がある。

○主な役職

- ・特定非営利活動法人 せんだい・みやぎNPOセンター 代表理事 97～
- ・特定非営利活動法人 日本NPOセンター 理事 96～08
- ・日本NPO学会 理事 99-03 06-07
- ・東北公益文科大学大学院非常勤講師「コミュニティビジネス起業論」05～06
- ・宮城大学事業構想学部客員教授 08～「非営利経営論」06～
- ・尚絅学院大学総合人間科学部非常勤講師「共生社会特論」06～
- ・多賀城市「地域経営アドバイザー」就任 07.10～

今日は、いろんな団体さんをご参加されています。宮城県には、『発達支援ひろがりネット』さんといういろんな団体の集まり(ネットワーク団体)があります。10いくつかの親の会や、『サポートネット』さんのような法人格を持っている団体や、福祉系の団体でデイサービスをやっている団体、いろんな団体が集まってネットワークを作っているところです。先日まで、そちらの団体さんの研修もやっていたものですから、これはそのときに作った図なんですね。



タイプ A というのは『サポートネット』さんのスタート時点もそうなんですね。最初に勉強会があって、障害を持たれたお子さんの親御さんが、「7人の侍」ですか、その方たちが集まって団体を作ってスタートしますね。たくさんある日本の障害者の協会とか当事者のグループとかは、実態としては全部これに当てはまるんですね。

つまり、自助的なお互いに助け合う、一緒に集まることで孤立から逃れ、助け合い、そしてやっているうちにいろんな人がやってきたり相談に来たりするというのがタイプ A 型ですね。その中で、ある程度サービスとか事業とか呼ばれる外に向かって行う活動、例えば療育に関するサービスを行うとか、学校帰りの後の児童デイサービスをするとか、いろんな形のサービスを提供する団体になっていくと、タイプ B になっていくんです。

『サポートネット』さんは、今は B の団体となっておられる状態で、そのサービス提供事業の部分があるものにニーズがあるものですから、やりだすとどんどん拡大していく。

『グループゆう』さんという地域福祉の団体は、もともと高齢者へのお弁当の配食サービスをしておられた団体です。中心的なリーダーたちは、別に障害を持ったお子さんの親御さんではない方たちですが、活動していくうちに地域の課題がどんどん見えてくるわけです。やっているうちに障害をもった子供さんの親御さんと知り合いになっていく。そうすると放課後困って

いるんだと言う話になって、「あったらいいね」を自分たちでつくる、というのがポリシーですから、放課後の児童デイサービスを始めるわけです。タイプCはこのように、ご自身や団体の中核メンバーが当事者でなくても、この社会的課題を何とかしたいと思って活動を始めて、障害福祉のサービスの提供者になるというケースです。『みやぎ・せんだい子どもの丘』さんは、今回の研修にたくさん参加されていますがタイプC型ですね。どれも重要です。

今日明日の合宿の中心はAタイプの団体さんだけでなく、BタイプやCタイプの団体さんもいて、それらがより発展していく為の組織運営とか事業をどういう風に按配していったらいいか、そしてその時にいろんな課題があるのでそれを解決する為の方法とヒントを差し上げられればいいかなと思っています。

私個人はこの障害福祉分野に特に詳しいわけではないのですが、皆さんは『青い芝の会』って知ってらっしゃいますか。ああ、少しいらっしゃるんですね。昔の話になると知らない人が多くなりましたね。1970年代の初めのことです。私は、当時福島におりまして、彼らは横浜で中心に活動しておられた方が多かったんですが、脳性まひの方が当事者として社会の中で発言する、もうひとつは施設から出て町で暮らすということが一番初めにやりだした人たちのグループの一つとを考えていただけるといいのです。当時国鉄も車椅子で乗車するには1週間程度前に予約で介助者付でないとダメ。バスは車椅子では乗車拒否された。そういう時代に彼らは、不自由な体でバスの前に座り込みを行い、バスを止めるという抗議行動をやっていたわけです。そういうと過激なと言われてしまうかもしれませんが、その団体の活動に私になるほどと思ったのが、親による障害児殺しのことなんです。今でも悲しいかな年間5、6件はあるといわれていますけれども、当時はだいたい年間5、60件、毎年あったんです。年を取ってきた親が障害のある子供さんの面倒をみられなくなったと、この子は一人では生きていけないからと子供を殺してしまう事件が後を絶たない時代でした。

そういう事件のひとつがあって、地域の人たちが子どもを殺してしまった親の減刑の嘆願書の署名活動をしたということから、青い芝の会の人たちは記者会見をして、声明文を発表します。「障害があるという理由で子どもが殺され、それが減刑されるのなら、われわれ障害者は常に親にいつ殺されるかという恐怖の中で暮らさなければならないということで、それはおかしい。そんな愛ならいらない。」という衝撃的なメッセージを発表するんですね。その人たちのような活動をする仲間が福島にいたものですから、私もほんの少しお手伝いをしていたんですね。以来、なぜか当事者の方が主体となって社会に発言するということをできるだけ応援するという活動をしています。

[ワーク]

最初に白い紙を一枚ずつ取っていただいて、細い方のマジックを使って横長に箇条書きで皆さんが日頃、自分の団体の活動の中で、人の配置やお給料のことなど、運営上の悩みってありますよね、事務的な事が分からないとか、組織的な活動の悩みを箇条書きで三つ書いて頂き、重要な順に番号をつけてください。5分差し上げます。

あんまり単純に金、人、ものとか書かないで、文章で書いて下さいね。代表は大変そうだとか、逆に運営上のことは私は分からない、そこが問題だとかね。じゃあ書きながらで結構ですから、少し読ませてもらいますね。聞いてください。

組織が大きくなってスタッフ間の意志の疎通が困難になってきたかな。

それから、管理する側、される側の割り切りは。

管理職とは何か、

→マネジメントとは何かを学ばないで管理職になっちゃうんだよね、だいたい僕らは。

方向性を決定するのは誰か。

若いスタッフの育成の体制作り、

時間の配分、

仕事の偏り、

意欲の温度差、

情報の共有、

理解の差、

給料の限界。

社会的認知の差がある。

人材の育成、確保。

やりたい事ができない。

精神的疲労がたまりやすい。→これ重要ですよ。

仕事が多い。

何が問題でこうなったか分からない。

そういうのをどうやって解決するかを今日少しお話できたらいいと思います。

財源の確保。

会員が増えて、顔が見えない。→これは大きく質的に変わるわけですね。早めに手を打たないと大きくなならないし、分裂したり、失敗したりすることがしばしば起きるんですね。人数が増えれば、組織はものすごく変わるんですね。リーダーが意識を変えないと、10人の仲良しの集まりを続けようとするとうまくいかないんですね。

これは書いたのをそのまま持っていてください。午後に具体的なヒントを申し上げます。

13:00~

タイプAのような当事者の団体から始めると、行政や社会に「要望する集団」としてスタートすることが多いんですね。タイプBになると要望している集団では済まなくなる。同じような境遇の方たちなんですけど、自分達が責任を持ってサービスを提供する側になる。その結果、意識のギャップが生まれる訳ですね。

先ほど言ったように意識の差をどうするか。

サービスの提供者と受益者になる。これを全部否定することはできません。小さな人数のままにとどまらないと、提供者と受益者に分離することになる。

これを避ける為にコミュニケーションをよくすることは大事なんです、当然提供者側の責任が大きくなる。すると温度差とか意識の差はあるに決まっているんです。

例えば『サポートネット』さんの中心の7人の侍達は、ともに勉強し頑張ってきて意識が揃ってくる。力もついてきます。皆さん自身が自覚しなくても、ほんの数年間一生懸命活動するだけで力がついてきます。知識であったり、判断力であったり、社会的視野であったりね。

ところが、昨日今日訪ねてきた人はそういう視野をほとんど持たないでくるわけです。助けて欲しいと藁にもすがる思いですね。その差をどのように丁寧に順番に勉強して、同じような方向に歩んでもらうかというためには、そこに研修のプロセスとプログラムが必要になります。

俺の背中を見ろ、ではダメなんです。

初めてきた人が次に一歩でも成長して、皆から良かったねと祝福され、さらに成長したいと思うような仕組みを団体内部に自覚的に創る必要があるということだろうと思います。

私は、たくさんの方を見ていますが百人、二百人になっても、その団体に人を入れるときに、レクチャーとか説明のパンフレットや活動のやり方をきちんと説明する習慣をもっている団体はほとんどないですよ。なんとなく入れちゃうんですよ。会費を払ったら会員だというふう。

そして会議を開いてみたら意見がめちゃくちゃ違ってたりするんですよ。

初めから意見が違うんなら入らない(入れない)ほうがいいですね。

例えば環境問題であることをやろうというのに、正反対のことをやろうという人を入れたら揉めるに決まっていますよ。だけど、誰もそれを点検しないでやっているんですよ。市民団体というのは何でも市民を入れなきゃいけないと思っているみたいなんですけど、そうではない。「趣旨に賛同する」「ミッションに共感する」という人を入れるというのが、ポイントです。

もうひとつは、理事など意思決定や方向性を決める人を入れるときに、会のルールと方針を見せていくということが出来ていない。日常活動に人を巻き込んでいく場合、きちんとした入り口で、目的と仕事の仕方、ルール、どこが最高の意思決定をするのかをはっきりさせる。それができるかできないかでも、実際には随分違うんです。

そんなことをできるようになる事が一番大事だと思うんですが、そのためにも市民活動団体の社会における位置を自覚していただく。

釈迦に説法にならないように進めさせていただきますが、ひとつは当事者中心として始まった活動以外の場合は、世の中のたいていの方は、実際にはお給料が出ている規模の仕事でも福祉や障害者のことをやっているという、大体の人が「ボランティアご苦労さん」と言うわけですね。しかも、金にならないことをなぜ一生懸命やっているのかって必ず聞くわけです。し

かも、ボランティアって言ってる割に「金をくれっ」てよく言うよねって思われている。お金が動いていること自体が怪しいとなっている。

例えば、サポートを受ける親御さんや、学校の先生も思っているかもしれない。

公務員研修でも皆さんこう思っている。

皆さんの団体が社会に真に信用される為には、実はお金がどうなっているかということ徹底してオープンにすることです。逆に言ったら、それが問題に気づいていただいて味方になっていただけることにもつながってるんですね。

世の中の人には、「ボランティアとは、無報酬で社会や他人に奉仕したがつている」と思っています。でも、皆さんの活動は違いますよね。それは市民による自発的な問題解決行動なんです。それが、そうは伝わらない。「ボランティアご苦労さん」ですよ。世の中の人にはそう思っているということ。これを覆さないと我々のやっている仕事が世の中に伝わらない。「一生懸命やっています」、「頑張っています」と、「何とかしてください」と言っても、「あんたが好きでやってるんでしょ」と大概の人は思っています。

わたしはそれを下のように思いましようという風にいつも申し上げている。

市民自ら自分自身と自分を含むみんなが被っている不利益や困難を、課題を解決する為に我々は行動している。

決してボランティアしたいわけじゃない。

良いことなんで道徳的にボランティアしようという動きが一方ではあるんですよ。申し訳ないけれど僕はあれが邪魔だと思っている。あれではボランティアの本質が間違っって世の中に伝わっていく場合がある。それだけが市民活動だと伝わっている場合があるので、僕はどちらかというとボランティア推進派じゃない。懐疑派ですね。

要は、目の前にたくさん問題があるものを、なぜ避けて通るのかということ、社会に提起していかないといけないということなんですよ。

HIVの活動をしている時に、よくボランティアといわれましたが、「ボランティアをしていたのは患者さんです」と僕は言い続けた。患者さん自身が医療機関と戦い、政府と戦い、製薬会社と戦い権利を確立し、そしてまともな医療を受けられるようにしろということ。命をかけて訴えて、その結果たくさんの方が死んだ。だけど、今、HIVに感染したとしてもプライバシーが守られ、きちんとした医療を受けられるようになった。

受益者は我々ですよ。ボランティアは彼らのほうです。命を削り。新薬テストなんてみんなボランティアですよ。効かないどころか毒かもしれない。それを飲んで、そして自分の体を人体実験にしたボランティアです。社会はそういう少数派に支えられている。

そういうことを僕は言い続けてきた。

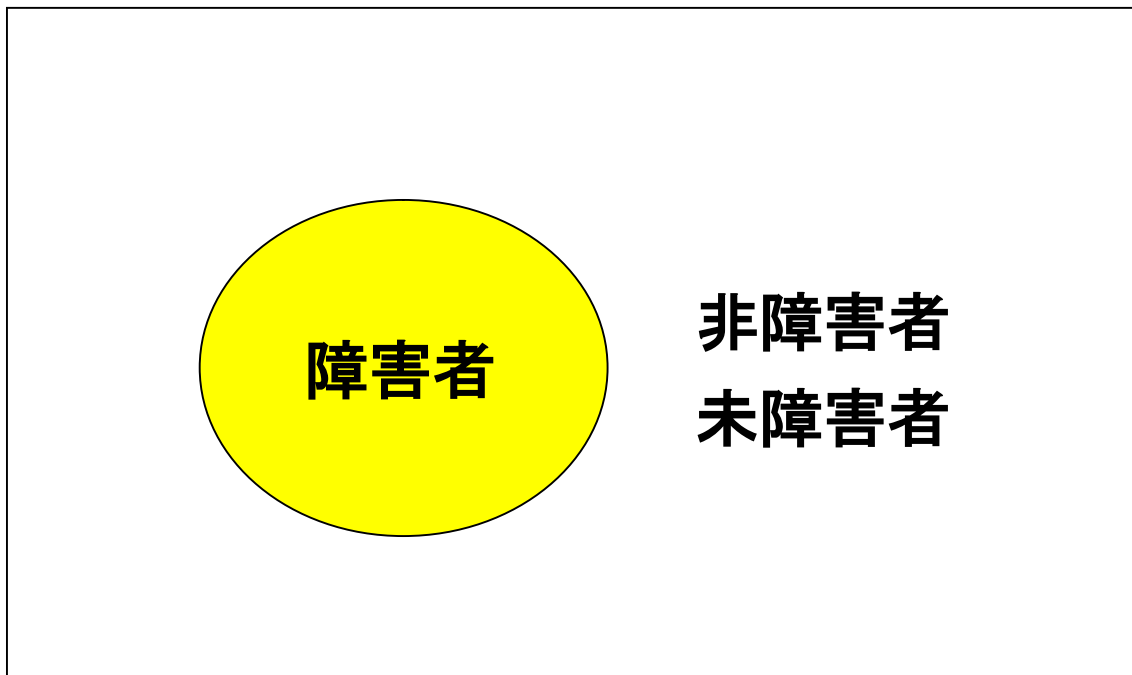
我々が受けているこの恩恵は、そういう方々の、ある意味犠牲によって成り立っている。

そういう立場でものを考えていくっていうことをすると、ボランティアを中心にものを考えるんでなく、問題がそこにあるということを中心に考える。

問題を解決をしましようという事が一番大事なポイントになってくる。

障害の問題を考えましょう。障害者の逆は何ですかと聞かれたら、一応疑いをもちながらも健常者と答えますよね。

集合の図でやったら分かると思うのですが、障害者の反対は非障害者または未障害者ですね。カテゴライズするわけですよね。残りは非障害者、あるいは未障害者。赤ん坊って、ほぼ障害者ですよね。自分で何かするってことが出来ない。



我々は障害者で生まれて、お年寄りになって障害者の範疇に戻ってくるというそういう人生でもあるっていうことでもあるし、交通事故ではたくさんの方が障害者になる。

健常者と障害者っていう風に、二項対立で考えると、ほとんど多くの方が、学生さんなんかもそうですが、自分と関係ないと感じるわけですね。家族に障害のある方を抱えている学生さんがいると、そういうことについてわかるとか考えるわけです。この二つの違った概念で考えると関係性=つながりを否定してしまうんですね。「未」で考えるとつながりますね。

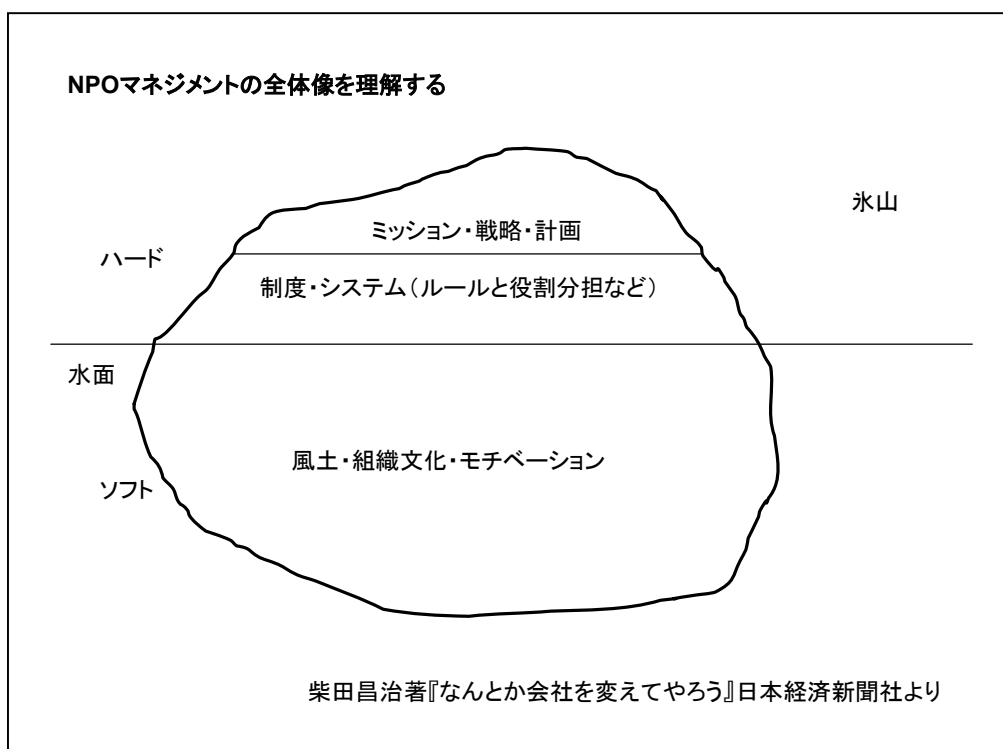
私は「市民活動というのは、問題を抱えそれを仲間と共に解決しようとする人々の集まりである、そしてその問題は複数の人々に関わる問題ですから社会的なもので、個人的なものではないんですよ」ということを常に言っている。

これで初めて行政の方が、みなさんのやっている活動の意味について理解する。当事者が要望するような団体の場合は施策の対象となりやすいのですが、一般的な活動の場合は理解され難いのはこういう理由なんですね。

ここからがマネジメントの話になるんですが、ポイントは“何とかしたい現状からこうなったら良いなという状態を設定して、それに対してどうやって取り組みを作っていくか。取り組みや事

業というのは、基本的には持続可能な仕組みをつくること”という風に考えてください。

もうひとつ、組織のことを人によってはあまり考えていない方もいらっしゃるんですけど、組織を水の上に浮かんだ冰山だと考えると、見えない下の部分が多い。だけど、一番上に旗を立て方向性を決めるのが組織野骨格ですね。ミッションとか計画をつくるのがそういう仕事です。



仲間からグループを作ったときって実はどっちに向かって進んでいくかを決めていないんですよ。だから最初のまんまで、組織が大きくなると必ず揉めますね。そのときには、もう一度ミッションや例えば3年以内にどういうことをやるのかということ、中心的人間が話し合わなければならぬということなんです。これが意外とできていないところが多い。

『ひろがりネット』さんも、丁度そういう時期になったので、研修をやっておられる。ミッションと計画を再度定義し直す必要があるということです。

できていないところは始めから作るということですが、市民活動というのは無我夢中で現場の困りごとを解決することから始まるので、最初はできません。数年経つと伸びる時期に来るので、そのときに方向性をまとめ直すとかぐんぐんと伸びるわけです。その時に方向性を決められないと天井にぶつかって落ちてしまうんですね。

二番目にそれを支えるのが、団体の中でのシステム化です。今日の受付のシステムは素晴らしい。仕組みができていないと活動が嫌になる人が出てくる。

一番大事なのは事務能力なんです。

最後に風土や組織文化とか、モチベーションの話になる。

柴田昌治さんというコンサルタントの方ね2時間喋って50万円とか100万円っていうコンサルタントの方がおられますが、この図のようなことを話されます。

彼がやっているのは、「会社っていうのは制度や仕組みは完璧に揃っているところなので、社員同士の話し合いとかを大事にしようという、真面目な雑談、つまりインフォーマルなミーティングを増やすことによって会社の取り組みをちゃんとしよう。」ということですね。

NPOの場合はなんとなく意思の疎通が悪くなったと、情報の共有ができなくなったと不平不満が出てくるわけです。

あの人がいつも遅れてくるとか、会議に来ないとかね。

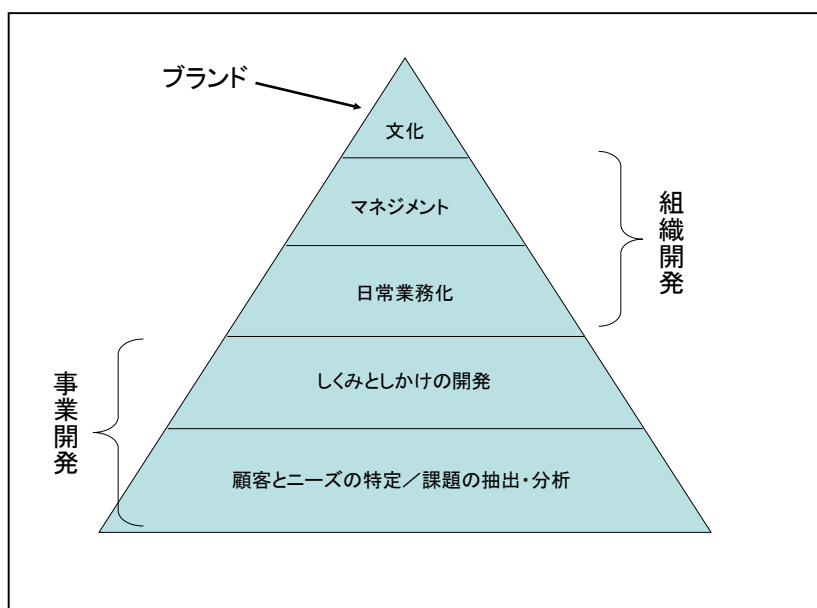
それは一見すると全部人間や組織文化の話になっているんですけど、そうではなくシステムや制度のところをちゃんと作っていないからなんです。だから日常的にコミュニケーションのトラブルが増え続けるんですね。

「よく話し合いましょう」ではなく、「仕組みを導入して、誰が行ってもできるようにする。」例えば受付なら受付キットをつくっておくわけです。そういう誰もが使えるものがセットであるという事が仕組みなんです。

コミュニケーションで解決しない方がいい。

どういう風に情報を記録するか、伝達するか仕組み作り方がいい加減だということの方が、活動が上手くいかない大きな理由です。だから事務で解決すると考える。

これはおそらく企業コンサルとの大きな違いですね。企業の場合は、だいたい仕組みが、ガチガチになっているので、話し合いができないので小さいミーティングをしましょうっていう話になる。



ここまでが駆け足で経営的な話で、午後の詳しい話の入り口になるんですが、この図のよう

に一番上に団体のブランドとありますが、最初からこのようにはならないんですね。

一番下のニーズとか課題の特定。どんな人のニーズに応えるかということをもまず特定する。

皆さんでいえば、発達障害を抱えた方々が社会的に不利益を受け、生きていくのが困難であるという現実があるわけですね。それが解決しなければならない課題なんです。

そして家族も困難を抱えていますねということがあると、家族も顧客になる。

その時に二番目に、解決のための仕組みとしかけを開発する。

『ひろがりネット』さんだと年に1回大きな情報交換会というのをやられていて、素晴らしいと思うんですが、ああいう形で多くの人が情報を持ち寄って市場のようにして情報を交換するというのも、一つの仕組みと仕掛けです。

療育やデイサービス、電話相談も、どんな手を打つかというのは、全ての問題の解決ではないけれど、集まった人間がやれることや能力を測りながら、やれることを増やしていく。

ここまではちょっと頭と能力があればできるんですが、走り出したら止まらないんですと、さっき申し上げたのは、この二段をやり切ってしまうとサービスは日常化するわけですね。それが年に1度や2度集まる団体とは違って来る。

活動自体が日常業務化してくるので、ここに仕組みがいるんです。

日常的に運営していく為のワークシートとか、日報とか、記録用紙とか、色んなものを開発しないとイケなくなる。それが仕組みを作っていくということです。

例えば、交替で業務をするなら、メーリングリストを使って日報を必ずあげると決める。

そこで伝言でも何でも一律にできる。

それを個別にやると疲労困憊するので、メーリングリストというツールを作り、担当者でなくても読む仕組みを作れば日常的に情報を共有できる。読んだ人がアドバイスを入れることもできるし、次の人が引き継ぐこともできるというのが仕組み。

たったこれだけのことも、実はほとんどなされていない団体が多いんですね。

企業だとひとつの会社が集まって仕事をしているんですが、NPOや市民団体は、逆にひとつの場所にみんなが集まって仕事をする事がないと考えてくださいね。ソーホーとか在宅ワークの集まりに似ていますね。そういう人がいっぱい活躍していないと、戦力不足なんですよ。

ホームページ作りを出勤してやってくれるっていう人はいないけれども、会社から帰った後、夜中ならやってくれるっていう人はいるでしょ。そういう人がたくさん巻き込まれていて、初めて活動というのは上手いくようになるわけで、やっぱり情報というのを共有する仕組みを作る。これが日常業務の中のマネジメントの中心です。あまり難しく考えないでいいんです。

昔のことなんですが、福祉の在宅の助け合いサービスですね。これを介護保険導入前に有償ボランティアでやっているグループがありました。

やっているうちに、車は自家用車で老人ホームから外出したい人の移送サービスをボラン

ティアでやってしまったんですね。

「時給600円位でやってもらうと、団体のことを理解しないで、パートのつもりで来る人がいるから困る」って代表の方が言うんですね。でも、「困るって言っても来るよね」、というのが悩みひとつ。もうひとつは「サンダル履きで来て、車を運転してお年寄りを運んでるんですが、注意しても良いものでしょうか」って言うんですね。要するに田舎のことなので、あとの人間関係が怖いって話があるんですね。

こういう話ってよくあるんですね。マネージャーになった時に注意しなきゃならないって、辛いじゃないですか。人のあらを探して攻撃するような気がするし、相手が攻撃されたと受け止めるかもしれない。わが国では、そういう場合、攻撃されたと感じることは非常に多い。これは日本の特性というか、人と事を分けられないってことなんですね。

コトについて言っているのに、ヒトが攻撃されたって思うような文化なんですよ。

だから、何か注意する時は、「あなたの人格を言いませんからね」、「やってる事についての話ですからね」と、ものすごく長い前置きをしないといけない人がたくさんいるんです。私も常にそれを意識して、必ず克明にくり返し言うんですね。そうして初めてホッとして話を聞いてくれるんです。そのくらい注意するって難しいですよ。

で、マネジメントってのは注意することではない、注意しなくていいようにすることなんです。分かりますか。

例えば、移送サービスや家事援助のサービスに行くという時は、どういう服装で行くかということを入れた規定を作ればいいんですよ。文章で書くと分からないから、イラストにして壁に貼っておけばいいんですね。

要はこのスタイルでやるということ合意してからやるということですね。これがマネジメントです。当たり前の事を可視化する。

それが代表の頭の中にしかないからダメなんです。共有できていない。

一番大事なのは、可視化することです。

発達障害の療育の世界でも、「言葉ではなく文字で示しましょう」とありますが、一般人でも一緒です。口で伝えると忘れるし、情報が落ちるから。

それがやれるようになった上で、人材の育成と人の手配ですね。

長期的に考えて、3年先にうちの人材をどうするか、だから今どうするかということを考えないといけない。

これはなかなかそういかない。『サポートネット』さんの幸せなところは、最初の7人の方が中心でずっと引っ張っていくところ、ある程度いるわけですね。それが人数が多いことが素晴らしい。一人でやってたらとても難しいし、一人に癖がある。その癖だけでやられると、たまたま合う人だけしか残らない。複数の方がいる事がクッションになる。

マネジメントのポイントは、意思決定と人材なんです。

ところが多くの団体では代表に聞かないと分からない。

意思決定にも水準があるから、その決定の範囲を明解に決める。

ほとんどの団体さんが組織図を書けないんですね。

マネジメントの文化ができてくると、課題に対して提案を上げてということが自然にできる組織になってくる。うちは十年かかってできるようになってきた。任せるにしても、できない人に任せてはダメですよ。でも、できるのに任せないのもダメです。難しいんですね。

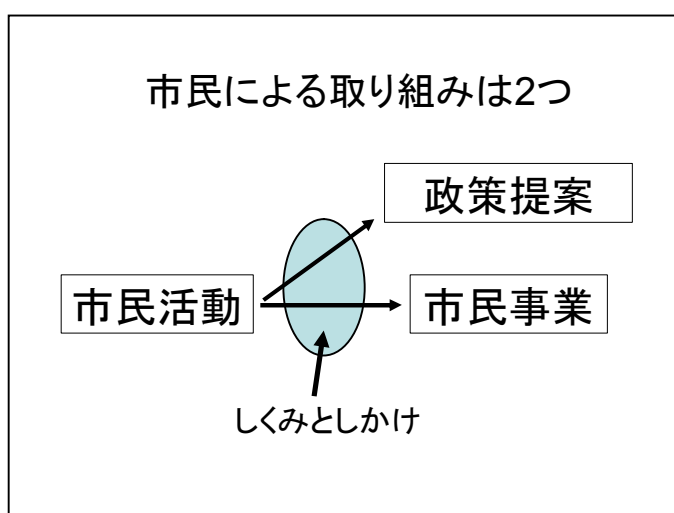
この図はぜひ頭に入れておいていただくと、常に何かを開発する時は、下から上にいくということになるんだということを覚えておいてください。

みなさんの取り組みも、市民による自発的な問題解決行動だと僕は定義するので、市民活動というのは問題を抱えた人と共感者が集まってくるということですね。

集まってできることは、学習、悩みを打ち明けたり、仲間作り、啓発活動をするくらいですか。こういう事ができる。でも、それをやっているだけだと問題はいつまでも解決しない。

いつも例に出すのは不登校の子と親の会っていうんですけど、代表をやっている人はボランティアをやらざるを得ない。学校で先生が殴ってるって分かったら、それを先生のところに行って文句言うんじゃないんですか。校長先生に何とかして下さいって言うんです。それを政策提案、アドボカシーって言うんですね。要望でなくて、代わりにこうしませんかって言える位になると政策提案って言えるんですね。

政権変わりましたでしょう。歴史始まって以来ですよ。今ガタガタに変わっている。新聞はそれについてこれていない。民主党が正しいかどうかではなく、政権交代すると、どうなるかということが大切なこと。例えばNPO、古いタイプの障害者団体は自民党の票田だったでしょう。何でそうなるかという、一党独裁で、選択肢がなかったからですね。政権が変わりうるということになると、色んな障害者団体が、自分達が政策を提案して、やるといった方に投票すれば良いという風になるんですね。



要望陳情じゃない時代が来た。要求、提案できる時代に入った。

もうひとつは市民事業ですね。

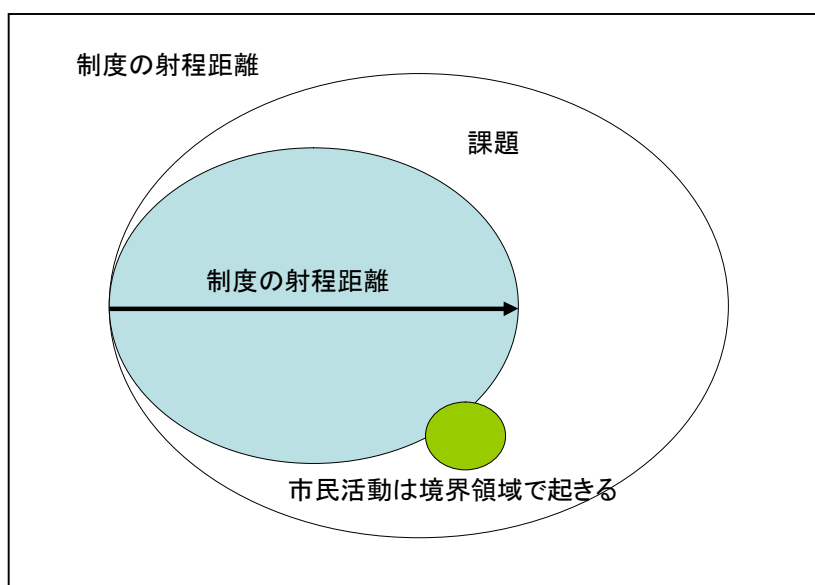
サービスを提供しだすと、人を雇用し、対価が発生することで事業になる。

昔は「ボランティアが商売してっ」て怒られたんですね。だけど基本的には、活動してて、問題を解決しようとして仕組みを作ったら事業になるんですよ。堂々と「市民事業だ」と言ってください。

経産省はソーシャルビジネスと呼んで国が旗を振っています。

イギリスでもソーシャルビジネスとかコミュニティビジネスと呼んで政府資金が投入されている。だけれど、実際には収支のところ、国のお金だけでないお金が大きく動くという世界がこれから必要になってくる。これはこれまでのボランティア論ではこの事業は絶対に生まれないんですね。

もうひとつは、取り組みをする時にいっぺんにできませんから、目標までの過程を分割したり、役割の分担、あるいは複数の団体に役割分担するということが必要になってくるんですね。



もうひとつポイントは、制度には射程距離がある。

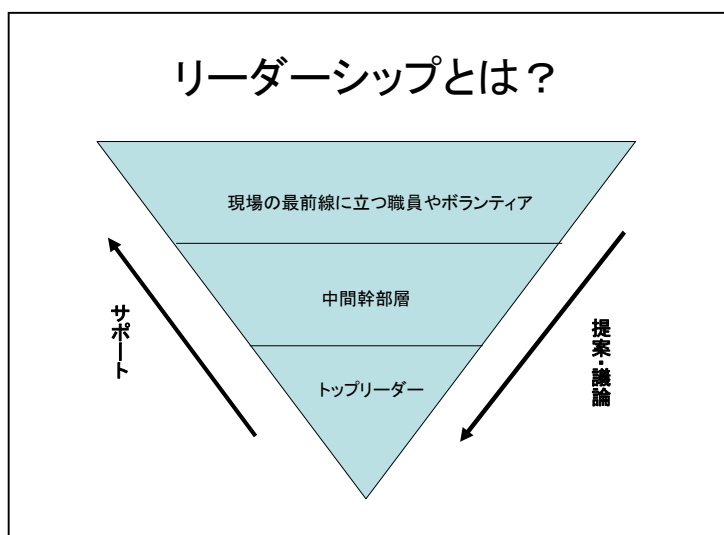
例えば生活保護。ある条件が満たされた人にお金が出るという制度です。その制度だけだと、貧困社会の問題は解決しない。社会の課題の方が大きいんですね。制度を大きくしようという話と、そんなに金は出せないという話がいつもせめぎ合うんですね。

市民活動は境界領域で起きる。なんでこれはあの制度がこないのってなるので、新しいものを考えようとなる。

例えば生活保護の問題にしても、大山典宏さんという方の書いた良い本があるのですが、一人の受給者がいろいろな課題を抱えている。それを地域のサポートのネットワークで解決し

ようという働きが埼玉県ではあり、生活保護110番というホームページがあり、300人位の専門家や、NPOや、行政担当者がネットワークされていて、相談にネットに対応している。そういう方を地域でサポートする体制もできている。

おそらく発達障害の世界は、今はまだこうなってはいないんですけども、将来的にこのような形になっていく事が求められていると思います。



もうひとつですね、運営をしていくで、ピラミッドって三角形ですが、これはそれを逆さまにした図です。トップリーダーが全体を支えている図です。できるだけこういう風に考えましょうという風に申し上げています。

もうひとつ、「運動は事務である」という市川房枝さんの有名な言葉があります。ここに書いてある物をあとで差しあげますが、これを普通にできているか、共有できているかで組織力があがります。

世の中に団体の理解を得て成長していく時には、世の中の人にはNPOがどんな価値を作っているかって事がよくわからないし、一緒に支援しようと思っても信用できるかどうか不安、関わろうと思ってもコストがかかるから、という三つが企業側の課題なんですね。行政側も協働を進めるといっても、すぐに潰れてしまうとか、連絡が取れないという。連絡が取れないというのが一番のネックです。

で、我々、このような仕組みを作っているのですが、日本財団さんの情報ライブラリーを運営させていただいています。

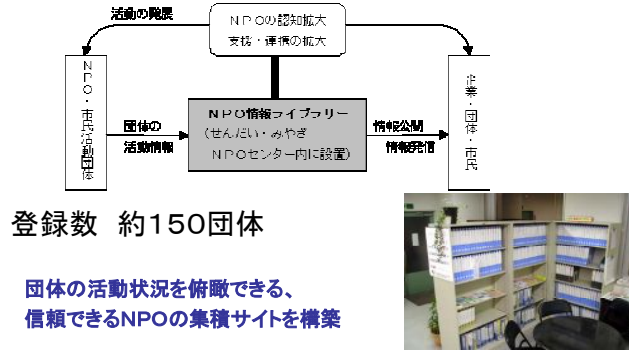
団体の情報を集めてウェブで公開しています。

団体基本情報もこのように公開させていただいています。

みなさんの団体さんはインターネットで会計報告していますか。していないですね。だいたいこうなんです、寄付を受けられるようになるには、基本的な事を開示しているかどうか大きい。ちゃんと開示する事が非営利組織では非常に大切。

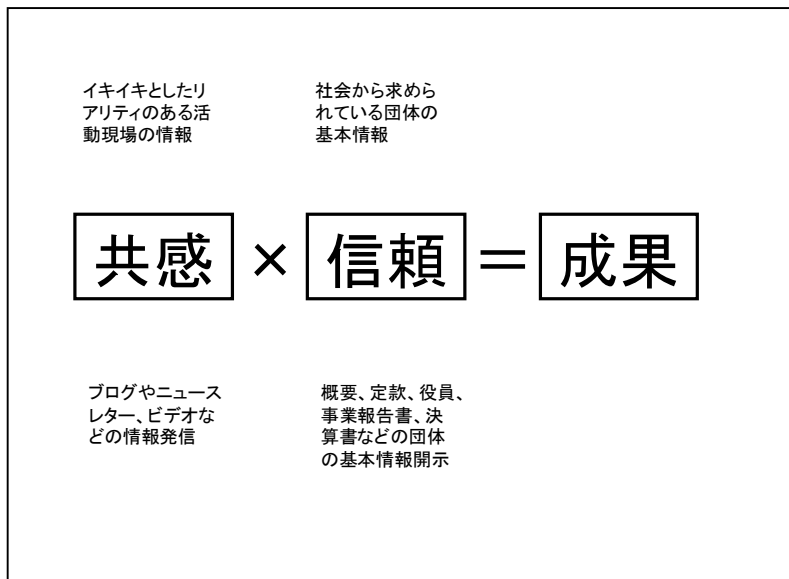
団体情報と助成実績の公開

- NPO情報ライブラリーによる情報公開



そのために、うちではこれをやっているんですね。皆さんの活動が成果に結びつく為のポイントはこれなんですね。

共感かける信頼イコール成果。



共感はみなさん普段やっているんですが、その情報を届ける範囲が狭すぎる。

ホームページもイベントの予告が出るんですが、結果が出ていない。

イキイキとした現場の情報の出し方。

そのことに値打ちがあるという出し方をしないとだめなんです。

一番いいのがブログなんですね。

複数の人が書ける。サポートネットさんと7人の人が交代で書いている。

信頼情報が社会から求められている団体の基本情報。これがちゃんとしていないと信用されない。

これは掛け算なんで、片方がゼロだとゼロになります。

片方が欠けていると相当なマイナスになりますね。

なんでこんなことを考えたかという、みなさんが県庁に出しているNPO事業報告書がだいたい1枚だけで、非常なマイナスなんです。それを考えないで報告書の薄いのを出していると、かなり損ですよ。総会で出しているような事業報告書を出すだけで相当違いますよということです。

ちょっと駆け足だったんで、午後もうちょっとですね、どうやって社会にインパクトを与えるかということと事務の話と実務の話をしたと思います。

団体のホームページになっているのがブログですね。これだけで、だいたいホームページの役割りを果たせています。ブログの方からリンクを貼っておくと基本情報がここから読める。一番のポイントは、基本情報の項目に意味があるんです。助成金の申請の基本情報を書く時に、9割合致するように作っています。サポートネットさんは、今の項目を常時更新して出すというやり方をやっていたらいいですね。これが非常に良いんですね。ちょっと伊藤さんにご紹介をさせていただきましょう。

(伊藤)元々は団体基本情報というデータベースがあって、最初のところを入れるのは手間がかかるのですが、後は1行2行加えていけば最新のものができていきます。担当者が決まっていると、常に最新のものができると良いかなあとと思っています。私どもに言って頂ければ空のデータをお渡しできると思いますので、仰っていただければと思います。別紙で、ブログのアクセス数とか、事業参加数等を載せておりますが、それも担当者が決まっているんですね。名簿も私が一人でやっていたときには、二重三重になっていたのですが、スタッフがまとめてくれたり、その後情報処理の資格をもっている常勤者を雇用することができたので、さらに事務作業が円滑にいくようになりました。ここまでいくようになるまで5年、4年かかりましたが、このような仕組みを日本財団さんに教えていただいたり、せんだい・みやぎのいろんなセミナーで学んできましたので、私にできることは皆さんにもできることなので、手前味噌ではありますがご紹介させていただきました。

はい、ありがとうございます。いま、仰ったデータをもらったり、初めから日本財団さんのこのサイトに基本情報を入れてしまって、これが基本情報ですと決めて、それをプリントして出すとか、コピーペーストして作るかですね。つまりどれを基本にするかを決めて、継続管理することですね。今やっている事を将来人に見せるっていうことを、ぜひ考えていただくと良いかなという風に思います。

これは、せんだい・みやぎのブログですが、ここに右側にクレジットカードの正会員とかありますね。これだけで、申し込みができるんですね。細かい住所とかはあとで連絡を頂くんですが、お金を払うことは、これでできるんです。まだ、あんまり宣伝していないからあれですけども、銀行に行かなくていいし、楽ちんです。

今の段階では、まだ当たり前ではないと思っているんですけども、会員さんが会費を払わないっていう事がおきるんですね。請求事務がなかなか大変です。で、自動振り替えていうのができるようになると、楽になるんですね。

イギリスの児童虐待防止の活動をやっている団体があるんですが、年間予算が300億円。3億円じゃないですよ。専従有給職員が2000人、そのうち400人がファンドレイジング専門担当なんですよ。要はどうやって寄付を集めているかなんですが、ちょうど7割は寄付で、そのうちのさらに7割、だから5割は個人寄付です。150億円です。どうやっているのですか？と訊きました。要はただの自動振り替えなんです。会費なの。要するに何ポンドという会費の自動振り替えの契約書をひたすら取ってくるだけなんですよ。で、やめないんだそうですよ。自動振り替えにしちゃうと。それだけ広まっちゃうと、何万、何十万っていう人が会員になるわけじゃないですか。

請求書なんか出してた日には、こっちがつぶれちゃうわけですよ。皆さんもそういうのをやってませんか。年会費1000円とか2000円で、郵便代にもならない金額で会員募集していませんか。それで、NPOって基盤がなくて金がないんですっていうんですけども、その基盤を自分たちで潰しているわけですよ。

払える程度って、小遣い程度でやっている組織って成り立たない。

最低限、事務局を維持して、通信費を維持して、給料は1円も払えなくても、人が動ける体制を作るっていうところは、集まった人が持ちよりにするっていうのを土台にしないと、いつまで経ってもただのお客様とか、ぶら下がる人だけしか周りにできないってわけですね。

本当なら5000円とか10000円とかっていう年会費を払うっていう位にならないと、組織っていうのは維持できないってわけですよ。

数が増えれば増えるほど、皆さんの場合、苦しくなるようにできているんですから。設計が。年間2000円位の会費でやっているところが多いんですが、会員が5000人位になったら、確実にそういうところは潰れちゃいますよね。事務量のほうが増えちゃうから。郵便代のほうが増えるから。だから、ネットを使わなければならぬって、これから出てくるわけですね。

実際に宮城県で環境系の団体で、『蕪栗ぬまっくらぶ』って団体があるんですね。専従職員が、バイトしながらなんとか頑張っているんですけども、そこは150人から200人位の会員さんが全員自動振り替え。自動振り替えじゃない人は会員にしないと、はっきりしている。毎年99パーセント更新してくれるっていうんですね。

やめる手続きをしないでいたら続くって訳ですよ。何にもしないで150万円位のお金が手付かずで毎年入るみたいですよ。これが、会の基礎。

それで自主事業をしたり、事務局を維持するお金はこれで賄うって言うてるんですよ。

そこから先に助成金とか、委託の仕事を上に乗せるって言っている。

そういうことを考えると、要するに、1000円とか3000円くらいのお金を払える時に払うというような我儘を許しあっているというやり方をしているっていう事が、事務局の人にどれほど多くの負担を与えているかっていう事を会員の人に分からせるっていうことが僕は必要だと思う。

要するに会員になったんだから、1000円も会費を払ったんだから「なんかしてけろ」って人を山のように作っているんでしょ。

日本の会員制度は、金を払ったんだからメリットをくれって言う人たちの集まりなんですよ。

だけれど、本当のNPOの会員っていうのは、お金を出してその団体を通して、社会を変えたり、何か貢献するために会員になりますというサポーターであるということが本当は大事なんですね。

で、サービスの受益者になるという人ばかりを集めてしまうと話が難しくなってしまうわけです。

会としてはただの受益者としてではなくて、さっきもそちらで自分が支援者なのか当事者なのか悩むって、お話してましたよね。どっちかって心も揺れるってお話をされてたんですけれども、やっぱり会の中枢の人や、意思決定をする人は単純に受益者じゃダメなんですよ。ぶれるから。受益者の声を反映するのは良いんです。

だけれど、この組織を通じて社会に何かをもたらそうと、問題を解決しようと強い意志を持った人が意思決定をしないとダメなんです。

一見みんな会員で混じってますけれども、そののこころを分けろとは言わないんですけれども、そういうことを会のサポーターになるということは、そういうことをするんですよ。

あるいは意思決定に関与するっていうことは、そういうつもりなんですよっていうことをどちらかという強調する。

で、さらに受益者としては、普通の市民の人が会員になることを否定するのではなく、見守っていただいて、我々のやっていることは、特定個人の利益や間違った方向では無いということを経験の場や、あるいはニュースレターを読んでいただいて、見ていただき確認をしていただく市民、ユーザーの代表として、会員としているんですね。

総会を開いて説明をするっていう事をしますよね。説明責任を果たす行為なんです。

執行部がより多くの市民から指示されているかを点検する作業なんです。

手間はかかるけれども、我々の組織が市民の組織だということを担保し続けるということ、民主主義ってそういうことですよ。

株式会社や有限会社を作って事業だけやってるんだしたら、そんな大きな事を株式を公開しないでということになるんですよ。その違いを我々の方から強調していくということが、やはり必要だなと感じます。そんなことをぜひ、データベースによる基本情報の公開というあたりで覚えておいていただくと良いかなと思います。

それでは、資料の説明をして作業に入ってもらおうと思います。

この紙はですね、特に内側になっている、始めようとしているあなたにもNPOのマネジメントと書いてあるところ、これは後でゆっくりお読みいただいて、要はなんでマネジメント、運営とか経営と日本語で訳されるんですが、経営と言うと会社みたいで嫌だという人もいて、日本ではNPOは運営と言うところが多いんですが、僕はやはり経営という風に言った方が良さだろうと、総合的な概念だという風に考えていただければ良いと思います。

なんで必要かという、社会的な責任が問われるとか、品質を一定に保たなきゃいけないとか、そういうことが起きた時にマネジメントが必要になってきますよね。

夫婦でも二人一組で人間が仕事をする時にも、役割分担や誰が意思決定をするかという事が必ず問われますよね。同じことが組織っていうのは起きるんだって思っていたくといいいのかなと。

誰がマネジメントするのか、何をマネジメントするのかということを下の方に書いてありますが、そういう事を丁寧に考える事が大事だと思います。

次に、1番から9番まで、最低限、組織を運営するということは、これくらいの事が起きますよってということが例として出てると思います。

1番目には、目的や方向性をみんなで確認する。

2番目は実現のために必要な事業活動のアイデアを考える。これさっきの仕組み作りですね。

3番目には、実現の為の計画を作る。

4番目に、そのために必要な組織の形を決める。これが一番難しいですね。組織の形ってというのは意思決定のシステムなので、ここが実は上手く設計できない事が多いです。

5番目に特に経営に責任を持つ人を決定し、活動を進めるための、みんなで決める力。

6番、コミュニケーションの方法とルールを作る。

その次に活動続ける為の資源調達力。：日本の団体はこの分野が、残念ながら規模が小さいこともあって非常に弱い。この活動をやっているよりは現場の活動の方が忙しいという事に必ずなるので、我々のような中間支援組織と組んでいただいて、やはり資源調達は単独でやらずに、地域の、例えば『ひろがりネット』のような発達支援にかかわる団体全体でやるとかですね、そういうことを考えていって事が必要かなと。

特に世の中に打って出る時には、単独では難しいかなと思います。

活動を広く社会に伝える力をつける。広報ですね。

振り返る力をつける。

これがわかりやすく書いてあるマネジメントの基本です。

自分の団体はどうかなという自己点検を1から5で点数を付けてみるとかですね、これだけでも、何割くらいできているかなって風にするだけでも結構値打ちがあるのではないのでしょうか。そうすると、そういえば広報って何にもやってないなとか、そういうことに気づけるのではないかと、欠けているものに気づくというのは非常に大事だと思います。

広報の話ですが、効果的な広報って書いてあるように、団体の基本情報とか成果物を正しく出す事が必要ですよということを中心に昔書いた文章ですので、基本的なことはわかるかなと思います。

もうひとつですね、情報共有には技術が必要であると書いてある紙ですね。これは、会議の仕方ですね。グループワークや会議の仕方についての基本が書いてあります。

1番は、ホワイトボードとか、模造紙に大きく書きながら進める方法、ファシリティグラフィックっていうんですね。この方法を身につけていただくと、会議や事務が楽になります。意外と世の中で使われていないのですが、普通の人には3分前に誰が何を喋ったかって覚えていないので、間違っただけを受け止めて反論したりするんですよ。永遠に泥仕合になるような会議になる事を回避し、この方法を身につけると会議が本当に楽になります。

裏の新聞記事、平成15年ですから大分前の記事ですが、カナダの精神障害者の会社ってなっていますが、実態としては経営者を募集となっていて、理事がみんなで選んだとなっているので、これはNPOです。

いわゆる精神の障害、特に統合失調症にかかわるような方が、当事者でその団体に集まって、就労している会社。お掃除会社ですね。何十人の方が働いていますとなっています。理事会があって、それも当事者の方で、そこが意思決定をする。

で、社長さんというのは、理事長さんが空席になったので、経営手腕のある統合失調症の方を望むという、凄いですよね、新聞広告を出して、元会社の経営者で統合失調症になったという方が社長さんになったという記事なんですよ。

なかなか凄いです。そこまではそういう事をやっているのかと読めるんですが、私が特に着目して、特に行政の職員の研修の時に話をするんですが、ここのところをちょっと読んでください。

福祉国家のカナダでも精神障害者の就労は困難である。多くは月額8万円の障害者手当で暮らしている。日本とあんまり変わらないんですね。制度的にはね。

80年代の後半に障害者自らが働く場をどう確保するかを模索する中で、配送会社、移送サービス、食堂、掃除会社などサバイバービジネスって言い方をするんですね。サバイバーというのは、DVなんかの被害者の方が、被害者、被害者と言われる事で、自分の力を奪われていく。障害者もそうですね。外からのレッテル貼りとかカテゴリズはその人をデスパワーする場合があって、それを逆にエンパワーするためにサバイバーと呼ぶ習慣があるんですけど、サバイバービジネスと呼ぶところが面白いですね。

日本ではソーシャルビジネスとかコミュニティビジネスと呼び始めていますが、約70人が働く成功例のひとつ。

州政府から受ける年約3000万円の資金が常勤スタッフの給与と固定経費にあてられ、年間売り上げ5000万円の約8割は清掃員の取り分となる。時給は約850円。

働くことによって生まれる社会との関係、自尊心の回復が個人と社会に好影響を与えている。

この次が凄いです。

最後の4行が着目なのですが、働く人の平均入院日数は年45日から5日に激減。

普通カナダでは自宅療養していれば75人かける45日かける1日当たり1万数千円の高額医療費が政府負担。行政が負担していた入院費は年約1億数千万円削減されたって事は、年間入院費の差額がまさに1億数千万円ということは、政府は3000万円の補助金で1億5千万円位の利益を生んでいるわけです。補助金のおそらく5倍くらいの収益なんです。一番注目したところですよ。

日本でも障害者の就労問題は社会的コストを下げる事があるんです。

福祉というのは、みんなの足手まといなんですという声が今大きいけれど、本当は違うんですということを立て証して欲しいと学者に言ってるんですね。

出すべきところにお金を出さないと後で大変なことになる。日本は実際にそうなっているんです。

障害者や福祉分野にお金をきちんと出していないために、例えば刑務所が一杯になってしまってます。

刑務所の運営コストって物凄くかかっているんです。それを数値化して測っている人が少ないんで、こういうことが分からない。僕はこういう記事を利用するわけです。

行政の福祉の担当者にもこれを見ていただきたいと申し上げている。本当に困って生活保護の受給に来た人を追い返したりしている。借金まみれになって病気になって結果、一生活保護の受給者になってしまう。それよりは、一時期きちんとお金を出して、いずれ納税者に戻ってもらう。

30歳くらいの方に5年間生活保護を出して社会復帰を助けるか、出さないで潰してしまうかの差額は、一人当たり5千万円だそうです。10人で5億円。100人で50億円。1000人で500億円です。国庫負担でずっと残っていくわけですね。目の前の財政難だけで考えてはダメなんです。そういうことを考えることは、ヒントになるかなと思っていつも使っています。

それから、欠点は先に長所は後にという記事がありますが、後から読んでいただければ良いんですが、人を使う人はぜひ心得としてお読みいただくと凄く良いと思うんですね。

欠点を指摘することは言わなければならないですね。

でも、後から必ず褒めろと言っていることです。

順番が大事なんです。

たったこれだけなんです、私は、大事だなと思って、こういう記事を見つけるとすぐ切り抜いて持って歩いているんですね。

それから、事業報告書の作り方って紙が入っていますが、当センターがお役立ち情報っていうのを書いて提供しているものです。ネット上でも手に入ります。特に事業報告書というのは、こういう内容が網羅されている物ですということです。お使いいただければと思っています。

さて、ちょっと今から皆さんに自分の団体の事を整理をしていただきながら、課題をあぶりだして、何を改善したらいいかに気づいて、ヒントを持って帰ってもらうという風にしたいと思います。

お手元のA4の紙を一人2枚取って下さい。あとマジックを持って下さい。さっきも運動とか活動っていうのは事務ですって申し上げて、事務は大事なんですけれども、団体の組織図とか規約とか定款とか活動メニューとかっていうものが、紙になっているかっていう事を紙を縦に使っていただいて、横半分に線を引くという状態ですね。2枚並べて。

皆さんの団体のお名前、ご自身のお名前、地域、団体のミッションステイトメント、わが団体はこういう問題をこう解決して、こんな社会を作りますとか、こんな状態を作りますということを文章で書いて下さい。

それに対してですね、ここはどんな方を対象に我々の仕事をするのかということですね。これは、複数ある場合がありますね。

活動自体が目的を達成する為に、ひとつの顧客だけでなく、大きく分けると受益者の顧客と支援者の顧客。

支援者を組織しないとイケないって事があると、支援者も顧客と考える。

その中身をできるだけ簡単に書かないで文章で、あるいは具体的に。

最後は事業、取り組み、今やっている具体的なサービスとか、取り組み事業のメニューをだいたい大きく整理をして10個あるとしたら、統合されて枠組みとしては3つなんですというんだったら、3つ書いて、括弧してその後に書いていただく。団体がやっている数だけまとめて下さい。

これを10分で書いてみましょう。あとで同じ団体の人と照らし合わせてみてもらうと、結構違うところがあったりしてね。

では、ここで10分位お時間を取って、グループの中で一人1分位でぱっと説明してですね、他の人からここはどうなってるんですか、これはどういう風になってるんですか、など、少しやり取りをするのをやってもらって、1回3分位ずつやると5人で15分ですね。

3分ずつタイムキープしてやり取りをして下さい。実践から学ぶっていうテーマなので、後で大発表はあるんですが、ちょっと突つき合うという事を夜の分の練習と思ってやって下さい。時間オーバーにならないようにね。

良いですか。今は具体的な内容とか事業とか、限りなく聞きたい事があると思うんですが、ここは夜にやっていただいて。このシートを使ったのは、皆さん自分がやっている事を分けて説明できるようになって欲しいですね。

ごじゃごじゃで、なんとなくこういうことやってますっていう風に、だいたいお話になる方が非常に多いんですが、NPOの場合にね。

大目的を達成し、その対象となる方のために、こういう事が必要ですねと言って事業を起こすのですから、事業自体は選択可能でなけりゃいけなんですね。

時と場合と時代によって変わっていく。

最初にやったのがこれだからって、ずっとやっていけば良いかというとなんかそんなことはなくて、意味がなくなってくることもあるし、役割が小さくなることもあるんです。

その時に事業を取り替えていって、より効果的で、より役に立つことをやるといったことを考えなきゃいけない。

金が取れるか取れないかだけで、事業を選択しても良くないわけですね。

何が本当に必要かって事を考えて、そこにお金を作るって事がある意味ではNPOの仕事なんです。順番としてはそうですね。

何が必要かを先に考えるってことをして、そこにお金を持つてくるという努力をするのであって、お金がついてる方に行くっていったんでは、違うものになるって可能性があるんですね。制度のお金は活用した方がいいし、正しく制度のお金を使って有償とするのは大事なので、社会と制度が整えば整うほど、制度の担い手であるというだけでも非営利組織というのは一定の役割を果たせるようになるんですが、みなさんのこの分野は、まだ制度が整っていない。全体での社会の支援が少ないという状態で、理論的にもまだ困難がたくさんあるような時代だと思うので、逆に言うと制度とお金を活用するだけけれども、何が本当に必要かということをも自分から定義して社会に言っていく側にならないといけないので、顧客と使命のために何をなすべきかを考えて、事業は次々と考えて、変えていく事が、おそらくこの10年くらいの間に特に必要であると思います。

今すぐ全部が決まる分野ではない。

この分野の活動自体が、ちょうど今テイクオフ、離陸期で、これから急激に事業と仕事は伸びると思います。そこへ社会の資源も一定程度投入されるようになり、注目も集まる。皆さんの団体にお仕事も問い合わせも来るし、大変になるんですね。

やり出したらすぐそういう感じになっていませんか。まさにこうぐうっと伸びて、これから事業が急成長せざるを得ないんですね。

ニーズもあるって事が証明された時代なんですね。

一定程度過ぎると制度化とか何か過ぎて横ばいになるんですね。

おそらくこの5年から10年は急成長期、今している自分の範疇とか、サービスレベルや量とかをあまりに自明のものとしなない。

変わる。

もっと大きくなるとか、組織的に繋がるとか、相当変わると思ってやっていただくと良いかなと思います。

長期にわたって、何を実現するかを組織として議論することをどこかでやり、しかもそれは単一の組織で議論するだけでなく、こういう場でみんなで議論する必要がある。

まさに業界ですね。

市民の団体の集まりの側で、将来を議論しておかないとそっちに向かえない。

我々政治家をよんでNPOと話をする場を設けるんですが、代表の方が社会と制度の全体

の話をしないで、自分の団体の苦労話を始める。話にならなくなっちゃう。国政の話をしているのに仙台市政の話を始めたりしちゃうんですね。それはダメなんですよね。相手にインパクトがない。

議論自体がミッションと顧客の中で、変化するということをおさえておく。

分けて考えるという習慣をつけて欲しいですね。

もうひとつだけ、紙を取っていただいて、5分で一応皆さんの団体の組織図を書いて下さい。

団体ですよ。児童館のでなく。

会員がいるNPOとしての団体の組織図を書いてみて下さい。5分で書けない人は1時間でも書けない。すぐ分かります。

はい、それではこちらを見ていただいて。

すいません。今組織図を書いてもらったんですけど、一番大切なことですが、皆さんの組織は、日本財団さんは違うんですが、他の組織は全部社団なんですね。

社団っていうのは、人の集まりの事を言います。

財団っていうのは財の集まりです。

どこが違うかというと、要はお金があります。

お金って何でも使えます。

にもかかわらず、不思議なのは、ある人がこのお金を拠出するわけですよ。で、犬と猫が大好きなので死んだ後、犬と猫のために寄付をする。このお金に目的をつける。お金に使用制限をかける。死ぬんですから信託するわけです。

ここで役員の会議があり、意思決定する。

この会は自由にものを決めて、例えば焼肉食いに行っちゃいけないんですね。

この寄付をした人のこの行為、目的をつけて人を選んで寄付をする行為自体を約束事の文書にして残す。

なので財団法人の規約や定款の事を「寄付行為」と言う。文書の名前が寄付行為という。

これを覚えておくと意味が分かりますよね。

寄付をする行為自体が財団法人の定款の名前なんです。

社団っていうのは人の集まりです。

組織とは何かというのが日本人は非常に苦手です。

学習を全然していない。

組織とは何か、定義は5つあります。

自立をした個人の集まり。これが最初にある。

2番目に目的がある。

3番目にルールがある。

4番目にロールが生まれる。

で、ここまできると、目的を達成する為に役割の分担がおきてルールがある組織は持続する。

一番のポイントは2と3と4なんです。目的があつてルールとロールがある。

逆に言うとそうでないものは烏合の衆と言う。

もうひとつはこういう組織に対して、共同体っていうもの。コミュニティ。あるいは群集。

よく組織の対立物として個人を考えるっていう習慣があるでしょ。あれ嘘。

真に自立した個人の集まりでないと組織に個人がとけている状態を群集と言う。

目的を失いルール、ロールがない。だからこそ、そこに特定の権力者が間違つた指令を出すとそれに盲従するという組織が恐ろしいのではなく、組織が組織でない為にあれは起きるわけですね。

組織が群集化するという事が今我々の社会で一番の課題なんです、目的とルールとロールを正しく理解しない人の集団だからです。

それが機能するような構造を作る事が苦手なので群集化する。日本の場合はコミュニティ化している。仲良く暮らす事が目的になる。町内会とか何かは問題のない時期の地域の町内会は、存在していることに意義がある。

こっちがbe動詞、こっちがdo。違いは大きいんですよ。

市民活動団体はdoです。

doの一部にbeがあるのはしょうがない。必要だということですね。

当事者が集まって自助グループを作る段階ではbeに近い。だけど、発展してサポートを始めるとdoが生まれる。doの一部にbeがあるのが良いんですが、いつの間にか全部beになりやすいんです。それは、この3つがしっかり理解されていないから。

皆さんの組織図はこの典型みたいなものですね。すみませんが、言葉で言っているうちは、ぼろが出ないんですね。

基本的には人の集まりが社団ですが、社団の規則の作り方ですが、要するに社団の成り立ちが規則、定款の書き方って、最初に目的が書いてあつて、この目的に賛同する人の集まりであるという風に会員っていうものを定義します。

この目的に賛同する者っていう瞬間にアソシエーションになる。

共同体ではなくなるんですね。

大事なものは目的にしたがつて会員が選ばれて存在するっていう事。

会員の中から、執行部や監査をする人を選ぶっていう事になるので、会員の定義の中に役員の定義がでてくる。

そして、単に役員がいるだけの組織図が多かったですね、皆さん。

すいませんけど、会長とか副会長ってポジションで意思決定ができる事があるけれど、そうではないんですよ。

組織の意思決定は会議ですよ。

それを必ずこの後に書くんです。

その後にお金や事務局をどうするか、どういうときに解散するか、財産処分をどうするか、なんかを書くのがその他の定義です。

定款とかの構造は全部こうなっていますから。要するに細かく読むと分からないですけどもね。

執行上の意思決定が、日常業務で非常に大事になってきますね。

権限を持っている人、あるいは会議で決めなければなりませんね。CEO、現場の最高執行責任者である事務局長が決裁をするっていうのは、独りで決めるって事じゃないですよ。

世の中の人、勘違いするんですが、決裁をするって事は、その人が決裁しないと通らないって意味ではあるけれども、みんな決めて悪いってわけじゃない。

その辺が上手くいかない事が多いんだね。

基本的には業務執行上の決裁権限を誰が持つか。

例えば、常務理事が二人いるなら、必ず合議制にするにするとかね。

せんだい・みやぎは常務理事が二人いるので、ほとんどの現場での業務執行上の意思決定は、常務理事がやっている。だけれど、ちょっと大きな人事や大きな新規事業や助成の申請、行政との取引等をやるかやらないかは毎月の理事会で決める。

さらにこの下にいわゆる日常業務。

この意思決定が日々刻々と起きるわけですね。

横に長くしたのが事務量。下の方が圧倒的に多いんですね。電話1本かかってきたのも、どうするのかを決めるのはここですね。

他にもボールペン買ってくるとかね。

それをいちいち常務理事に仰ぐのか、現場で決めていいのかを明確に決めておくと混乱を避けられる。

毎月会議をしているのに、この話を永遠にやっているから疲れるんですよ。

介護系形の団体さんなんか、現場のヘルパーさんなんかは理事になっているところが多いんだけど、そうすると理事会でケース会議のようになってしまう。いろんな役割を一人の人が担っているのと同じですね。

どの役割で参加しているのか、本人が分からなくなってしまう。

わけて考えるといいんです。

そういうことを訓練しないと、会議が耐えられないものになってしまう。

会議がごちゃごちゃだと人が抜けていってしまう。

その場にかかわりのない人を巻き込んではいけない。

なんでも同じように関わらせようとするとうまく失敗してしまう。

関わり方の多様性を認めるっていう事ですね。

障害の問題とかやっているとかね、みんな違ってみんないいって言っている割にね、活動は

みんな一緒にやらなきゃいけないってなるんですよね、NPOって。

人によって違って良いんですよ。

ほんのちょっとみんなが持ち寄ることによって、大きな力になるんですよということです。

意思決定の構造図と組織図が連動するように、組織というのは意思決定の要するに階層構造図なんだということ。

それが正しく設計されていないと上手くいかない。

必ずそこにはルールが必要だということです。

もうひとつ大事なのは会議で決めるか、ポジションで決めるかですね。

一人で決めるか。いつも一人で決めるのは危険なので、上手く会議を組み合わせたり、会議から上がってきたものを使って、最終的な意思決定をするという仕組みにしておくことと民主的な話ができますね。

『せんだい・みやぎ』ですと班がありまして、案件は全部チームで話し合う。それをより上位の会議に上げてきたものを決裁するという二層構造ですね。

全員が参加して意思決定に関わるという形です。

そうでないと人はついてこない。

現場の方が情報があるわけだし、きちんと考えてもらった上で足りないことをやってあげた方がずっと効率的です。

ぜひ組織というものをそんな風に理解してもらおうといいかなと思います。

あと、20分くらいですね。

6ページと7ページを見ていただいて、いろんな図があります。

先にひとつ7ページの図をご覧頂いて、僕ピラミッドの絵を書くのが好きなんです。たまに、逆さの書いたりね。

どうしてそういう事をするかっていうと、物事を分けて考えるという習慣ですね。

考えるというのは、分けるという行為なんですよ。

分ける枠組みにはめ込むと、ものを考えるのが楽になるということですね。

だいたい僕は三つに分割してものを考えるというのを癖にしています。

情勢を分析する時に、三つに分けるっていうのはとってもいいんですよ。

7ページの図はニーズのピラミッドっていうものを書いています。

社会的な問題やニーズには、だいたいこの三層構造になっていますよと。

横幅が数です。縦が重要度っていうか、だいたいひどくなる度合いだっという風に考えていただく。

例えば児童虐待でこの図を考えていただくと分かると思うんですが、緊急の介入が必要な案件というのは、多いといわれているんですが、幅広い不安を抱えたお母さんであるとか、孤立した子育て家庭というのがあって、その中から数が狭まって問題が起きるというわけです。

ね。

100に3くらいずつこういう問題が起きるのですが、幅広い問題があるその中から一部が問題化するという事なので、頂上に重篤で急いだニーズがあると考えます。

一番下には幅広くライトなニーズが、沢山存在している。

皆さんの団体のサービスや事業というのは、この三つのニーズのどこをターゲットにしてAというサービスが行われ、どこをターゲットにしてBというサービスが行われているのかをぜひ分析をしてみてください。

どれをやれというんじゃなく、どこに軸足を置いてやるのかをはっきりと自覚をして、仕事をするのが良いということですね。

一度に何もかもやるというのは小さな団体では無理があるわけですね。

特に緊急介入をやりだすとですね、24時間飛び出さなきゃいけないということになる。

アメリカのDVの団体を訪ねた事がありますが、そこは専従職員100人ですね。ボランティア400人。当事者が作った団体です。日本と違うところは、職員の8割が男性なんです。緊急でシェルターにいる女性を保護しているのは女性ですが、男性は全部カウンセラーで、殴ってる男の方のカウンセラーです。そっちの方をやらないと問題は何も解決しないんですね。

もうひとつは、緊急救援をする仕組みとしては、病院とかですね、あらゆるところで、この人は殴られているんじゃないかと分かると、団体に連絡が行き、ボランティアが駆けつけるんですね。面談をして、サポートが必要ならここへ連絡をして下さいというのを、助けを求められたらシェルターに入れる。

相当な規模があってやれることなんですけど、皆さんの場合には、今日の前にニーズが押し寄せてきて、とにかく目の前で精一杯やるということになってると思うんですけど、段々それを組織化していく。

今の段階から考えていかなければいけないんですね。

準備をする為に、たとえばこの中位のニーズっていうのは、基本的には人材を育成して対応できる人を増やしていくって考え方ですよ。

それをしない限り、絶対に対応力が上がらないんですね。

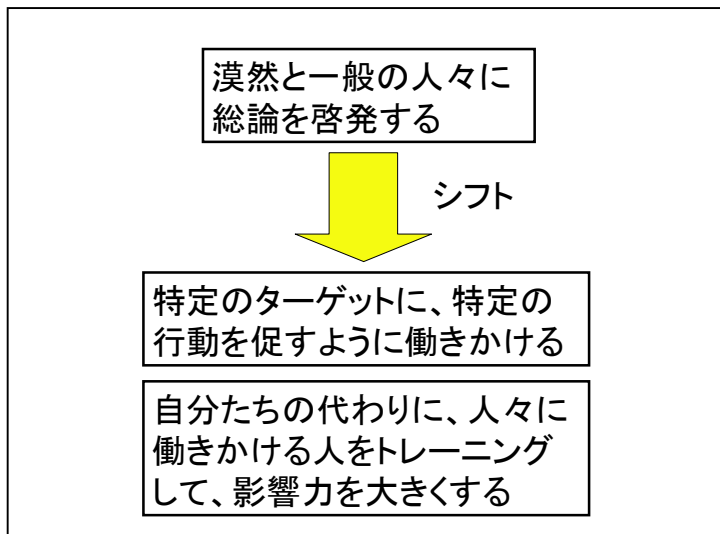
ニーズを分けた上で自分が担っている所は何か、どこの分野に拡張していったらいいかって事を考えていただきたいと思います。

それはこっちに繋がるんですね。地域や社会を変えるっていうことはどういうことか。

本当に大事なポイントは、地域と社会にどんなインパクトを与えるのか。

今までと違う新しい考え方とか価値観をどうやって地域にもたらすかっていうことですね。

衝撃がないといけない。



もうひとつは、どんな人材を輩出するかです。

小さな団体は、自分の目に見えるところでばかりやっているんで、自分の団体の跡継ぎと
かってばかり考えるんですが、だからダメなんですね。

地域社会の中でどんな人材を作れば、問題が解決する方に行くかという風に、基本的には
考えていただきたい。

自分のところから手放しても良いってつもりで育てていただきたい。

そうすると、やがて他で育った奴が来るようになります。

そういうことなんですよ、地域の人材って。

多くの団体が、世の中変えようって時に、特に環境団体に多いんですけど、漠然と啓発しま
すね。買い物袋を持って歩くようにキャンペーンをするので、チラシの印刷代10万円下さいっ
て、助成金の申請はすぐいくわけですよ。でも、あんなものは役所が何億円かけても成功して
ないんですよ。それを小さな団体がチラシ1000枚作ったからって成功せんのですよ。

漠然と漫然とした啓発、総論的な啓発は有効ではない。

障害者を理解しましょうなんて言ったって無駄なんですよ。そんなことは分かってるんです。
差別しちゃいけませんよなんて事は誰も知っていて、自分がやっている事が差別だって分か
らないでやっているんです。

大事なポイントは下です。

特定のターゲットに特定の行動を促すように働きかける。

具体的な相手に対して、具体的な行動変革を要請していくような働きかけ。

漫然と広報しない。

ここを狙う。

非常に狭い範囲とか、特定の職種とか、例えば学校の先生ですね。そういうところで変化
が起きる。

その変化が今度は波及する。

その人たちが沢山の人たちに影響を与える。

例えば、町内会でごみの清掃をやろうという活動で子供が出てこないと嘆く。そういう場合、子供が属する集団のリーダー、例えばスポーツ少年団のコーチとか、お習字の先生とか、その人と一緒に、ごみ拾いだけでなく、一緒にワークショップをしましょうと働きかける。これを小さな団体ほどやらなければならない。

それぞれ、影響力のある人が動くと地域や学校が変わる。

例えば、発達障害にしても、まずは地域の民生委員というように狙いを定めて行動していく事が有効だと考えていただくといいですね。

団体の中でも人手が足りない、リーダーがいけないという話ができるんですけども、団体の中の活動する人も、主に責任者とかリーダーとか意思決定に関与することがありますよね。

それに対して、実務の活動者が、2番目の人ですね。

それに対して呼びかけられれば参加する人たちが参加者とか受益者。

組織ってこの三層構造で成り立っているんですね。

皆さん一番上の層がいけないっていうんですね。担い手活動者もリーダーの不平不満を聞いてると、言われたことはするけどねっていう人ばかりだって言うんですね。

それは、ほとんどの場合やらせ方が悪い。

マネジメントの極意は相手がダメだと思わないことです。

私が部下に仕事をさせるさせ方が悪いので、部下が活躍できないと。

これは、札幌の加藤先生が、発達障害のある方をサポートする基本理念と同じだと思う。その人の能力が発揮されていない。

本人の努力も必要だけれども、サポートする側の仕事の仕方によって、その人は社会の中で生きていけるよねっていう事をやる。

実は、健常者と呼ばれる人同士のマネジメントも全く同じです。

あらを拾うって事をするようになると、自分のあらは見えないので活動すればするほど、後から来る人のあらなんて見えるのは当たり前。

この人にどういう指示、サポートをしたら、良いかを常に考えるということです。

その上で人が足りないなら、拡張しないとイケないんです。

全体のパイが大きくなると、その上にのるリーダー層も大きくなりません。

要するに本当の意味の後継者とか、リーダーとか、意思決定ができて組織の責任を背負える人は1000人に1人か10000人に一人とも言われている。そこら辺にはいないんですね。

基本的なパイを拡げることによって、それに支えられてリーダーが出てくるっていう風に、一気に一番上のリーダーを作るってしないで、先ほどからマネージャーって申し上げてますけれども、中間管理職ですね、部下を一人でも持って、その人たちにより良い仕事をさせる能力のある人をいくつ作る事ができるかって事がカギだってことですね。

そのときどうするかっていうことは、団体の中心的な担い手自体を膨らませなければならな

いってことですよ。

ひとつは集客。

その方法をマーケティングって言う。

相手を良く知り、相手の都合に働きかけて人を集めてくる。

相手のニーズに応える。

参加する人それぞれにニーズがあるんですね。

それとマッチングする構造に基本はなっている。

集客した後が日本の団体は悪い。

担い手を作る構造を継続的に作る。

こういう研修を行うということではなく、月に1度マネージャーが部下と面談をするとかね。

『せんだい・みやぎ』では、年に2回面談があり、ここに担当業務に関する目標を書いてもらう。

半年ごとにチェックをする。

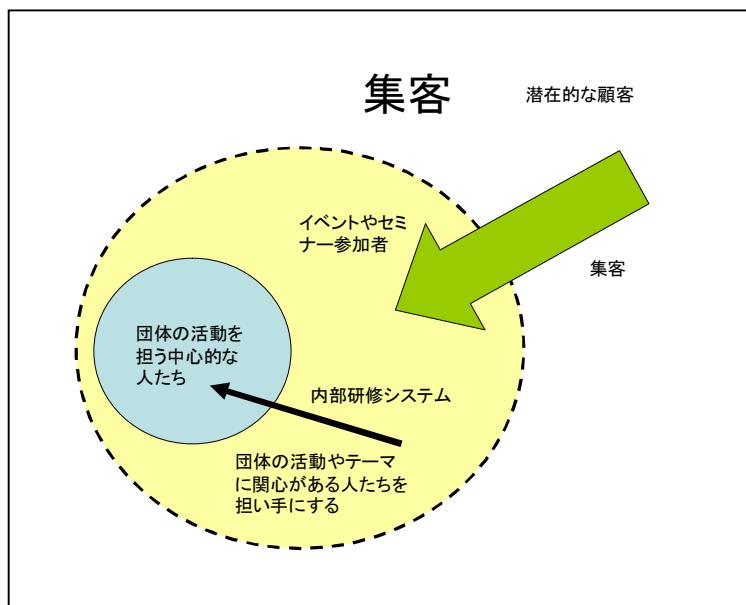
点検して苛める為ではなく、サポートのためです。

組織のニーズに応じてもらうと同時に、本人のニーズにも応える。

人を育てるプロセスを年間を通して組み立てる。

定期的な仕組みにすることですね。

団体の内部に研修を入れる仕組みを頭に入れ直してください。



あと5分ですよ。これはぜひ、聞いておきたいことなどあったら申し上げます。

最初に書いてもらった悩み事を照らし合わせて、ワークをやるというのもやりたかったんですが、時間がないので、いっぺんに喋るという方法にしましたが、何か聞いてみたいことはありますか。

(質問者)ちょっと、頓珍漢かもしれませんが、会員の捕らえ方というところで、趣旨を理解した方たちを会員にするというところで、うちは任意なので、必要に迫られて会員になられる場合もあるんですが、会費を集めるのに苦勞するのではなく、口座振替にするというお話があったんですが、日本の中でできるのかなというところをお聞きしたかったです。

(加藤)はい、上手にやる必要があるのと、自分がサポートを受けたい人を会員にし、議決権を持たせてしまっているんですね。この辺をどう設計するかを団体として考えた方が良いんじゃないかなと思っています。

その人は、意思決定に関与したいとそもそも思っていない場合が多い。

議決権を持つっていうことは、団体を通じて公共的な意思を発露することになるので、無責任な意思決定をするのであれば会員にならない方がいい。無理にしない方がいい。で、外国の団体や先ほどの『蕪栗ぬまっこくらぶ』さんの場合は、サポーターではあるけれども意思決定の議決権をもつ人は一部なんです。会員ということ全体の中に、受益会員と支援会員、うちも実は分けてなくて結構悩んでるんですけど、で、議決権を持つか持たないかということは、これとは別に、別な線を引いて、組織の意思決定に対して、コミットしたいという人と、それはお任せしたいという人、こういう風に考えると、自分の意思で団体に参画したいという、そういう意思を持っている人は正会員におなり下さい。そうでない人は準会員でいいですよ。NPOの正社員という人はこの人たちだけなので、議決権のある人だけを作りなさいというのではなく、団体のミッションのために自分の力を使って下さいという人を正社員にする。

ならなくても、総会の出席権はあるけれども議決権は無しというように。その方が楽ですね。

やる気も無い、お任せっていう人は委任状もこないし。そういう人を正社員になって下さいと言っている方が間違ってるんだと思って下さい。

先ほどの環境団体さんってのは、どういう会員制度になってるかっていうと、まがん会員、たなご会員、まこも会員ってなっていて、会費はまがん会員、これが3000円、月額ですよ。たなご会員が1000円、まこも会員が500円、月額です。

で、この違いは何かっていうと。まこも会員は白黒のニュースレター、たなご会員はカラー印刷のニュースレター、まがん会員になるとその団体が受託したカレンダーなんか全部来ます。年間36000円ですから。

団体に負担は無いんですね。申込書の中に、会員選択のほかに、議決権という項目があって、正会員になるかどうかという意味を確認する項目がある。

それを選択したほかに、サポーターであることを選択した上に、意思決定に参画しますかという二重構造になっている。

こうしないと、ちょっとその議決権はというだけでいなくなる人もいるわけ。一杯いますよ世の中、そんなことに介入したく無いという人。

だけど情報やサポートは欲しいっていう人はいる。

その中の一部の人が担い手になってくるんだと思う方が楽ですね。

基本が非常にハードルが高いところの上において、上って来いといってるわけですね。最初から安い会費で議決権をとってもいいんですけども、基本はこういう風に階層構造になっていた方が参加ってしやすい。

参加の多様性をデザインするっていつも僕は言ってるんですけども、それはこういうことだと考えていただくと良いと思います。

しかも、入ると活動しなけりゃいけないというイメージが強いんですよ。

一緒に活動しない人は、居辛いので去っていくということになる。

団体が共同体化するからなんです。

この二つと戦わないといけないので、制度設計した方がうまくいくということですね。

今、とってもいい質問なんですよ。

日本の団体は会員制度の設計で躓く。

法人の県庁の定款見て作るからそうなる。それでは、ダメなんです。

こういう、サポーターの程度とか議決権の程度を分けて組み合わせて考える。

これだけで大分違うと思います。

やめる人のほとんどは一緒に参加しないのでやめますという。

いいんだよ金だけくれれば、と僕は言うんですけどもね。よろしいでしょうか。



加藤 潔さん

(札幌市自閉症・発達障がい支援センター「おがる」副所長)

担当:発達障害支援力向上・協働・交流会・ワークショップ

『人と違うことは、劣っていることでも恥ずかしいことでもありません。みんな違う人間なのですから、違うのはあたりまえのことです。「自分は自分のままでけっこういける」のです。だ

れかがちゃんとほめてくれていると思うし、だれかがちゃんと認めてくれていると思います。』素敵なメッセージから「ややこしい」わが子と向き合うための勇気と、励ましと、心強さで満たされ、心が揺さぶられます。

今発達障がいのわが子に対して何かで迷ったり、困ったり、立ち行かなくなっているお母さんがいるとすれば、ぜひ出会って欲しい素敵な方です。

また、活動や事業の中で「ややこしい」こどもに振り回されるなど、自分を見失いそうになっている支援者の方がいらしたら、ぜひ出会って下さい。具体的にどう関わっていけば良いかを実感出来たら、「ややこしい」子は「愛おしい」子へと必ず変わっていきます。そんな知恵をたくさんいただけます。

○主な役職

昭和61年3月北海道教育大学函館校(小学校教員養成課程・国語科)卒業

昭和61年4月函館市立深堀小学校着任

平成2年4月戸井町立汐首小学校着任

平成5年4月北海道教育大学附属養護学校着任

(平成9年度鹿児島大学教育大学附属養護学校に人事交流派遣)

平成15年校内に設置された特別支援教育センターコーディネーター

平成17年社会福祉法人北翔会札幌あゆみの園発達支援部長

平成18年社会福祉法人はるにれの里札幌市自閉症・発達障害支援センターおがる相談課長

○所属学会・研究会

・TEACCHプログラム研究会・日本自閉症スペクトラム学会(自閉症スペクトラム支援士EXPERT)

・日本特殊教育学会・日本教育カウンセラー協会(中級教育カウンセラー取得)・北海道特別支援教育学会など

皆さんこんにちは、加藤といいます。よろしくお願いします。

皆さまにお配りした資料にはないスライドがありますが、事情がありますので、携帯などで撮ることはしないでくださいね。

(参加者のアイスブレイク)

ぼくは「札幌市自閉症・発達障がい支援センター おがる」というところで働いています。

地域の支援体制をどう作るかっていうのをぼくの仕事だと思っていますので、もちろん相談もしますけれども、支援者の方をどう支えていけるかがぼくの本業だと思っています。ですから、研修とか機関支援とか直接支援モデルっていう支援を重点的にやっています。

ぼくは根室で生まれました。妻一人です。頭が上がりません。娘一人、息子一人がいます。今日は自閉症の話を中心にしますが、ぼくは好き嫌いが非常に多いんです。さっき、ここは大根が有名だって聞いて、ぼくは煮ている大根が苦手なんです、漬物とか大根おろしは大好きなんです。大きい人参はダメですが、1センチならオッケーです。これはわがままでしょうか、ということです。これをわがままだと感じる人は、残念ながら自閉症、発達障がいの人の世界についていけません。さようならです。自閉症バイバイするとういう感じです。もう近づかないでって感じです。どっちだって同じでしょうってこととか、ほとんど同じでしょうってことは、彼らには通じないんですよ。だから、新しい人が来たら似てるって思わないでください。Sサイズ、Mサイズ、Lサイズ、一応基本の支援はありますが、丈をつめたり、襟口を直したりが必要なんです。

今日は基本的な理解の話をして、明日はですね、集団の中で苦戦する自閉症の方たちというテーマで、だけど集団の中で、できそうな支援はきっとあるんだということをお話したいと思います。

で、療育の方が多いということで、明日の午後は「療育の意味すること」という講座をひとつ入れました。最後にはワークショップのようなことをやらないとまずいんだと思うので、だからといって課題を作ろうとかすると大変なので、手軽にできるワークショップをやります。抱えている課題を書いてもらって、自分のケース以外で人気投票をして、作戦を練ってもらいます。

では、本題です。障がいとはなんだろうということですね。

恒久的に活動への参加に制限が生じている状態を障がいって言うんですね。

これはICF、国際生活機能分類というのがあって、2001年にWHOがいわゆる障がいの定義を改定したわけですが、それによって、今まではハンディキャップ、欠損とか欠落とかがいう部分にターゲットが当てられていました。

しかし今は、活動への参加に制限を生じていることが障がいなのであると概念が変わっています。たいして違わないだろうと言われるとそれまでなんですが、ぼくにとってはけっこう大

きな違いなんです。

つまり、車椅子の方が、足が不自由なことが障がいなんではなくて、そのことによって、段差がある場所には近づけないとか、自力の移動が難しくなるとか、そこが障がいなんだよってことなんですよ。とっても大事な概念ですね。医学レベルで発達障がいや自閉症があるということは、医学レベルのことなんですよ。医学レベルで、こてこての人たくさんいますよ。だけどその方々がちゃんと活躍できる場面がたくさんある、参加の制限がない場面がたくさんあるってなったら、医学的には確かにアスペルガーであっても、生活障がいとして、その方に診断をつけることは全くないってことですよ。

しかし、残念ながら少数派のための文化になっていません。したがって生活の困難が生じやすい状態になっているんですね。

アスペルガーだから大変だと思う必要は全くないんです。さて、アスペルガーだから少数派であるねと、さあどうやって周りの関係を作っていこうかということなんです。

言い換えれば、元々持っている力は皆さんあるんです。だけど、多数派か少数派かによって、本来持っている力を発揮できない状況になりやすいかもしれない。だから、彼らに対して、いわゆる障がいを克服しようとか、改善しようというアプローチではなくて、周りにある環境のバリアをいかに下げようかっていうことがですね、支援の基本スタンスになるんです。バリアを下げて、彼らが力を発揮しやすい状況を作ってあげて、そこで頑張るのは彼らですから。バリアが下がっていないのに頑張れというのは拷問ですから。

できる環境があって、そこで頑張れっていうのはいいですよ。人間頑張るんですから。

ぼくらはどうしてもこちらの文化のまま彼らに接して、さあ頑張れ頑張れってなるんです。おそらく明日のテーマはそこです。

集団の中で、できることはあるですよ。でも、集団だから頑張れというのはおこがましいです。多数派が威張っているだけです。

ですから、発達障がいの場合ですね、何が一番バリアになるかということ、発達障がいのことを正しく理解しない人が世間に沢山います。言葉を知っている人は沢山います。正しく理解しないままで、さあ頑張ってとなる。それが発達障がいの人にとって、参加が制限されている状態じゃないかと思います。

先ほど言ったICFを参考に加藤辞書には書いてあります。加藤辞書は売っていませんからね。障がいというのは本人の問題ではなく、周囲との関係性の中に生じている。本人の中に障がいがあるんじゃないんです。本人と周囲の間に障がいがある。

彼らが持っている力を発揮するためには2つなんです。我々がする仕事はこれです。

力を発揮しやすい状況を作りましょう。その中で新しく学ぶことがあるとすれば、本人に頑張ってもらいましょう。

どこまで本人に頑張ってもらうか。どこまで手を貸すか、ということについては、特性をちゃんと把握しないとラインが見極められない。難しいですが、特性を徹底的に理解しようとする、

こちらの構えがなければならない。

支援は、あくまでもオーダーメイドなんです。A君とB君に同じ支援をするときは、ごめんねと心で言ってください。支援の最後の詰めのところ、違うように支援をしていない自分を恥じてほしい。

本人を変えようと思う前に、自分達を変えようとする、結果本人が変わってくるんだということですね。関係性だからね。ぼくたちが変われば、その子達のカもアップする。そういうことをしないで、頑張れ頑張れってばかり言ってしまうと、二次的な障がいがついてしまう事がある。

行動障がいと呼ばれるもの、反抗挑戦性障がいと呼ばれるもの、行為障がいといわれるもの、精神科様相、鬱がひどくなったりとか、見えないものが見えたりとか、聞こえないものが聞こえたりとか、これが厄介です。発達障がいの支援が届く前に邪魔が入るからです。反抗挑戦性障がいになった方がいるとすると、まず反抗しますね。そこをとかなければならない。

発達障がいの支援には、よく共感的理解をしてから支援に入るっていうけれども、ぼくは逆なんです。いい支援をしていれば、絶対共感されると思っているんですよ。

ところが、反抗挑戦性障がいなんかがあったら、ここをとかなければならないから、ワンアクション増えてしまう。なんとなく仲良くなろうとかなっちゃうと、関係性が逆に上下の関係になって、向こうが上になってしまう。

自閉症の話にこれから入っていきます。

まず特性から整理をしていきますが、診断基準からおさえていきましょう。

その前に、ぼくが自閉症というときには、自閉症を大きくとらえています。いわゆる知的障がいのない方もおられるし、アスペルガー症候群の方もおられるし、いわゆる典型的な自閉症の方もおられるし、広汎性発達障がいというね、俗的に言うとな、若干特性が薄く出られる方もいる。そういうのを全部含めて自閉症スペクトラムと言う。ぼくが自閉症と言うときには、いろんなタイプを包括しています。

さて、診断がつくとはどういうことでしょうか。

定型発達といわれている人たちにも得意と苦手があります。ただ、定型発達といわれている人の得意と苦手には、そんなに幅がないんですよ。

本人の中で、できる事と苦手なことの差がとても大きい人がいる。そこに名前をつけると自閉症とか、ADHDとかLDとなるんですね。発達障がいっていうのはこういうバランス、得意不得意の差の大きい人につけた名前なんです。

逆に素敵なんですよ。

本人告知をするときは良かったねって言います。

あんた、こんなに素敵だねってぼくは言います。

で、このバランスに対して名前をつけるのが診断ということです。

どこに着目するかによって、診断名が変わるかもしれません。

例えば、小さい頃は多動が凄くて、ADHDと言われていた人が、学齢期になったときに、国語と算数の差が凄く開いていると、そうしたら教育センターなんかでLDと言われるかもしれない。コミュニケーションとかが苦手だなとなったら、アスペルガーとか広汎性発達障がいとなるかもしれない。お医者さんによっては三つ付けてくれるかもしれない。そういうことです。

山の形はみんな違いますから。

本来は、アスペルガー加藤潔タイプとか付けてあげればいいんだけど、そんな名前は医学の診断基準にないので、とりあえず同じ診断名を付けるしかないんです。大枠では同じような支援をするかもしれないけれども、細部では違う支援なんですね。

では、診断基準を言いましょう。

ローナ・ウイングさんが三つ組みと言いましたが、ひとつは社会性の困難性、質的な違いがある。劣っているのではないですよ。質的な違いというのは劣っているんじゃないんです。質が違うんです。社会性について理解をする質が違うんです。彼らは少数派としての理解をするんです。

コミュニケーションの困難性があります。これも質的な違いがあります。

想像力の困難性、これも質的な違いがあります。

今のことをちょっと説明しましょう。ある中学生がね、真面目な中学生なんですよ、通常級にいます。

先生の質問に対して手を挙げるんです。定型的な発達をしている中学生は、わかっているも手を挙げません。小学校の先生に教わったんでしょうね。わかった人は手を挙げましょうって。6年生のときもいいクラスで、みんなが手を挙げるクラスだったんですね。で、中学生になっても手を挙げるわけですが、先生も毎回彼にだけ当てるわけにはいかないから、他の子を指名するんですね。彼はわかったと手を挙げていて自分が当てられないのに、手を挙げていない子が当てられるのが、許せないんですね。しかも、手を挙げていないのに答えている。この理不尽さ。幅がないわけですよ。この学校はおかしい。日本の教育はおかしいって彼はいつも怒っていたんですよ。当たり前ですよ、彼の論理からしたら。

で、彼に説明しました。

君が手を挙げていて、先生は君が頑張っていることを知っているので目的は達成しています、と。手を挙げなくていいよと教えるのもあるのかもしれないけれど、ぼく、手を挙げるのは悪いことだとは思ってないんで、一足飛びにそこを否定するのは可哀想ですよ。段階的に納得してもらわないといけないので。実際、ぼくは手を挙げた方がいいと思っているし。これは、社会性の困難性の一例です。

自分の周りに起きていることを瞬時に判断することが難しい。

見えない暗黙の了解やルールが、なかなかわからない。

だから、暗黙のルールがあるよということを教えなければならない。

大学生にもね、いたんですよ。その人は中学も高校も不登校で、高校認定資格で大学生になった。小学生の次にいきなり大学生になっちゃった。彼も手を挙げるんですね。でも、彼は自分が浮いていることに気づいた。

で、作戦を立てるわけです。

『かりそめのぼく作戦。』

本当は手を挙げたいし、わかっているのに反応したいぼくがいるのは悪いと思わない。大学生としてあまり浮かないためには、かりそめのぼく作戦。わかっているけれど、わからない演技をしているぼくでいこう。自分を否定してはいけないので、あくまでもかりそめのぼくでいこう。

頭の中で想像してください。

ミートソースとペペロンチーノが大皿にのって食卓にあります。

当時、自閉症の弟は高校生でした。姉は当時大学生です。

この姉が、ミートソースとペペロンチーノを混ぜると美味しいよって弟に言ったんですね。ぼくにはない発想だけでも、弟は、混ぜたら美味しいのかと言って、こうやったんですね(それぞれの皿のスパゲッティをぐるぐるとかき混ぜるしぐさ)。弟は混ぜたんですちゃんと。

これはコミュニケーションの困難性といってもいいかもしれない。受容の方のね。

字義通りなんですよ。

ぼくは姉にお前が悪いと言ったんですね。ちゃんとやって見せろと。

学習発表会の練習が北海道はこの時期なんですよ。時間割が変わると彼はとても混乱する人なんです。いつも信じていたことが変わってしまう。混乱をするから、自分の中で安定を見つけたくなるんです。

彼のはね、糸くず拾いなんですよ。ものすごく拾いました。

予定の変更とかというのは見えないですよ、実際に。

わかるように見せるというのは支援の工夫なんです、実際には変わるということがイメージできないんですよ。それが想像力の困難性です。

予定変更や新規場面に非常に弱い。興味関心が広がるってことは、変わるってことなんです。新しい情報を入れるってことなんです。

だから、小さい頃にドラえもんの歌に馴染んだ子が年頃になって、もう本当はドラえもん好きじゃないのかもしれない。飽きちゃってるのかもしれない。だけどエグザイル良いよって言われても、聞いたことないし、よくわからないし、だからエグザイルに行けないの。

想像力が膨らむ人は、良いよって言われたら聞いてみようかなと思うかもしれない。

予定変更とか興味関心の広がりとか、その辺に凄く弱さがある。

それが想像力の困難性ですね。

この三つが基本的な診断基準です。

いろいろなタイプの人がありますが、多かれ少なかれ、この基準は満たしています。社会性の困難性と言っても、ヘビーな人もいるし、ちょっとライトな人もいるということです。ストライクゾーンが違うというのは、そういうことです。彼らの本質は情報処理の違いですから。情報の統合とか整理が難しいんですね。同じ情報を我々とは違う理解をする。

診断的にいうとカナータイプというのは知的障がいと合併する自閉症。アスペルガー障がいというのは言語発達はまあまあ良いよと。結果良いよってやつですね。発達の仕組みは違いますよ。3歳ぐらいで喋れない人もいます。最初に喋る単語がママとかパパじゃなくて、いきなりダイエーとかね。発達が違うということです。言葉があんまり上手く表出できないタイプの人を高機能自閉症っていう言い方もある。IQ70超えたからこっちですよとはならない。連続している。三つ組みあるよな、でも、ここまでこてこてじゃないよなっていう場合、ドクターは全体のフォルダ名を告げたりする。それが広汎性発達障がいなんですね。ですから、広汎性発達障がいは自閉症概念の包括的なフォルダ名と覚えてください。ぼくが考える自閉症スペクトラムも包括的な概念なので、広汎性発達障がいも自閉症スペクトラムもだいたい同じ意味なんだよと思っています。

さて、三つ組みがなぜ表面に出てくるか。背景にあるのは、脳の機能の中で不得意な回路があることで、特にはこの三つだと言われている。

それは、他人の考えを理解する力。相手が困ってそうだなとか、悲しそうかなとか、皆さんは多分教えられなくてもわかってきたんです。だいたい1歳ぐらいの発達があれば、その場の相手の思いとかは、瞬時にわかります。1歳だから語彙がないので表現しないけれど、わかります。これがなかなかわからないので、相手が傷つくことを平気で言ってしまう。でもそれは、わからないから言ってるんであって悪意は全くない。

先生太りましたよねと言ってしまふ。ぼくらはそんなこと言ったら、なにされるかわからんと思うから言わないんでしょ。だけど事実だから、見えるから言ってしまう。この回路がなかなか難しいわけですよ。

自分のチャンネルはわかるけれど、相手のチャンネルがなかなかわからない。

だから、誰々君、困っているでしょうとか、誰々君、悲しんでいるでしょうとかいう支援をして、はっきり言って意味がないです。こういう時は、こう振舞いましょう、こう言いましょと教え

ないといけない。

次に、セントラルコーヘレンス。

細部にとらわれ全体を見る力が弱い。木を見て森を見ないんです。

会話をしている、ぼくらは全体のニュアンスで会話をしています。多少の言葉や言い回しが違って大丈夫なんです。だけど、彼らは細部にとらわれますから、言葉に凄くこだわりますよね。さっきと違いますよねと言います。細部が違うので。

三つ目、実行機能。

目標に向かって計画を立てて実行する力を実行機能って言います。

言い換えれば段取り。

段取りを付け難い人が多いので、さあやっごらん、任せるからって言うと、どう情報を整理していいか、わからなくなってしまう。ゴールがわからない試行錯誤って非常にわかりづらいんです。パズルなんかは、やります。ゴールが決まっているから。小学校だと総合的な学習の時間とか、自分で調べて結論出してみようみたいなね。そういうのが難しいですね。ADHD圏の人でも実行機能弱いので、だから片付けができないんですよ。片付けて段取りですからね。

あと、運動面のバランスがアンバランスですね。非常に高いところが平気なのに、躓きやすいとかね。一方通行的な運動は凄くできる。走るとか、水泳とかスキーとか。戻る動きとか状況を判断するとかその辺は難しいですね。

感覚の問題もあります。過敏あるいは鈍磨。

例えば、特定の周波数の音が嫌いな人もいます。泣き声とか。児童館とか児童デイだと、よく泣いている子がいると、その子に常にかん飛ばしているとか、見るだけで押しに行くとかという人もいたりします。

音の話だと取り分けができない人もいます。

会場のファンの音とぼくの声と同じレベルで聞こえる人がいます。

ぼくの情報を取るまでに、めちゃくちゃバリアがあるんですよ。

その人のバリアを下げるためにはどうしますか。

ぼくは、喋りにはいきませんよ。

聞こえていてもいいから、見てくださいと言います。

それを配慮と言うんですよ。当たり前の。

耳が聞こえない人に皆さん喋り続けますか。それは、耳が聞こえないという障がい特性を理解するからでしょう。だから、手話を覚えたり、筆談するんでしょう。

だけど発達障がいこういう特性があるってことを世の中の何人がわかっていますかね。だから彼らは、何かわからない多数派の文化に飲み込まれて、わけわかんなくなって、拳句の果てに病院行って薬をもらわなければならなくなるんですよ。元々は病気じゃないのに。

まず行すべきは、彼らの行動を変えるんじゃなくて、彼らに入ってくる情報をどうやってぼくらが整理できるかってこと。それが我々がする最大限の支援。支援の前提です。

そんなことは当たり前です。

そうして、その方が元々持っている力を発揮さえすれば大丈夫なんです。

環境さえ作れば勝手に伸びていく。ぼくの持論です。

それを構造化と言ってるんですね。

情報をいかに整理するか。

今、診断基準の話をしました。診断基準以外の特性があります。その特性というのは、発達障がいの特性と本人の特性があるんです。

両方を見ないといけない。

自閉症だからこうだとはいけません。

自閉症とこの子の生育環境と興味関心なんか考えたらこうなるのねって考えないとけない。

障がい特性は学んでください。

本当に。

忘れるから。

忘れますよ。ぼくもちゃんと年に数回、基礎基本をちゃんと自分に入れ直します。その話を聞きに行きます。何度も何十回も聞いています。その話を。

でもそれをやらないと自分でぶれるんです。やっぱり。

やっぱりそうだなってなる。

同じ話は聞いたことがあるからもう聞かないっていう人は、残念ながら支援者としてはどうにもならないですね。もういらない。そんな支援者は。基礎基本を疎かにするのはもうだめ。

あのイチローもストレッチは時間かけますよ、誰よりも。同じルーチンで。

特性を学ぶ、そして実際に現場で見つめる。

これです。この二つをやらないとダメです。

見つめているだけの人はダメです。その子達の限界を知らないから。ある時期伸びるからずっといくかもしれないとか。両面を把握してください。

もう少し詳しくいきます。

対人関係を持つことや維持することがなかなか困難です。

人に対する関心が乏しい人もいます。激しい人もいます。自閉症ではなく自開症かって人もいます。聞いてないことまで言うとかね。一方的に話す人。

集団の中での振る舞いに関する困難性。

人ごみに入れられないとか。三人になると、どう会話に入っているかわからないとか。三人ならダメだけれども、40人位なら紛れられるって人もいます。逆にわかりやすいつて。

集団の意思の把握が難しい人がいます。

自分が怒られていないのに、泣き出しちゃう人とかね。

友達がいることと社会性があるかということは全く関係がありません。友達というのはお互いの関係性なので、友達がいるから安心だとか言う人がいるんだけど全然関係ない。本人が友達と思っているだけの場合もあるし。

年齢相応の常識、暗黙の了解がわからない。

空気が読めないことは悪いことでしょうか。空気が読めないのは悪いことじゃないんじゃないかと思うんですけれどもね。空気読んでたら実は何も変わらないんですよ。空気読まないから変革できるんです。だから時代の変革者には、アスペルガータイプが多いかなと思っています。

コミュニケーションの話をしましょう。

表出がアンバランスだったりします。

場面や状況によるアンバランスがあります。

この人にはいいけど、ここでは喋らないとかがありますね。

コミュニケーションを獲得する道筋が違ったりします。

さっきの始語の問題もありますね。

新作言語、隠喩表現、パターン。新作言語というのは、全く日本語でないオリジナル言語を生み出す。ある人は、困った時に「壁の中に入る」って言う。それは、壁の中に入りたいたいという意味じゃなくて、ちょっと嫌なことがあるんですという意味なんです。そこをちゃんととらえないと、「壁の中になんか入れないでしょう、あんた」とか、「壁の中に何かあるのかな、見てみようか」なんて、そんなわけのわからない会話をしてもしようがないんですよ。隠喩表現だと思ったら「困ってるのかい？」と聞かなきゃならない。

想像力の困難性。

この場合、目の前に存在しないものを取り扱うことが想像力です。

ファンタジーとは違います。ファンタジーは彼の目の前にあるので勝手に入ってきます。世界に。戻ってきません。目の前にあるんです。そこが。ファンタジーの人はたくさんいます。作家でもいますよ。たくさんいます。

だから視覚的支援は目の前に存在するから有効なんです。論理なんです。特性からくる論理。だって、確率が高い支援です。だから、「視覚的支援がなくてもできますよ」って言うてるのはどうしようもない支援者です。ぼくから言わせれば。喋るなっていうことじゃないんですよ。ちゃんと視覚的な情報を伝えてくださいと言ってるんです。

目の前に存在しないものを取り扱うことが苦手だってわかってるのに、なんで、目の前に存在しない言葉で責めるのよ。

目の前に存在するものがあって言葉を添えるのは全然オツケーだよ。喋っていいんだよ。

だから、言葉でも、目の前に存在するものがイメージできるんなら言葉も有効だよ。

物と音声言語のマッチングっていうのは悪い支援ではないんだけど、音声言語だけで

は限界があるでしょう。具体名称はオツケーだよ、コップとかは。だから、動作語になると苦しくなるよね。

例えば、イメージしてください。

イメージって皆さんできる？目の前になんか出せる？

イメージって。出せないよね。イメージってことをもっと具体的な言葉にしなきゃなんないかもしれないし、行動で見せなきゃなんないかもしれないし。

予定変更とか新規場面とか、見えなくなるので、予定が変わるってくると見えてたものが見えなくなるから苦しくなるんですよ。結果として、目の前から物が見えなくなるから、見えるものがないと安心しないのね。自分が見えるものはなあにっていったら、決めごとや興味関心の硬いこだわりだったりするの。

だから、自分でこうしてこうしたらこうなるなっていうのも目の前に存在し難いので、段取りを組むとか優先順位をつけるのが苦手になるの。

スケジュールもちゃんと提示してあげないと。スケジュールなんか、だって目の前にはないからね、こうして、こうして、こうしたらこうなるっていうのがわかると安心できるの。

なんとなくとか大体とかって、そんな言葉で言われてもわからない。なんとなくって、どういうイメージ？わからないですよ。

アテンション。

注目とかですね。

他者の感じ方を共有することが苦手な人が多い。

で、持続することが難しい人もいます。

ぱっと見るけれども、見続けることが難しい。

あと、見てるんだけど、一部分に入っちゃう。入ってしまったら、他を見ましようって言っても動けない。

視野の狭さとかね。

見る方向が独特だということもあります。

感覚の問題。

聴覚、視覚、触覚、臭覚、味覚。あと入れるとすれば前庭覚です。

それ以外に第6感。シックスセンスっていうやつですね。

靈感、スピリチュアル、強い人もいます。ぼくは信じてないんですけども靈感とかは。彼らが言う限り、そうだなって思うようになりました。精神科様相に近いものもあるかもしれないけれども、第6感もあるんだなと思う。見えるんなら見えるんだなって思うし。

認知記憶の特性。

視覚的に際立った記憶をする人がいます。

物の配置にこだわる子もいるしね。

フラッシュバックとかもあります。記憶が消えない。

長期の記憶に入るっていうのは、二つなんです。ひとつは興味関心がとっても強いこと。もうひとつはネガティブなことです。

長期の記憶の引き出しに入ったときにぼくらはセピア色になります。彼らは長期の記憶に入ったものはセピア色になり難い、あるいはならない。

ですから、過去のことを凄く再現する人もいます。自分の興味関心が強いことにね。

興味関心が強いのはいいんです。だけど、ネガティブな記憶が入ってしまったら大変でしょう。

もう、支援の基本はわかりましたよね。

最初が肝心だ。最初に失敗させない。

もっと言うと、成功する確信がない限り踏み出さないんです、ぼくなんか。

やってから考えようは無責任です。

多少失敗はありますよ。だけど、“成功が多たって植えつけられるぞ”って、“準備をたくさんしたぞ”って。“大丈夫だぞ。シュミレーションもしたぞ”って、そういうときにぼくらは踏み出すときだって思っています。

我々の札幌では年に1回、三日間自閉症実践セミナーっていうトレーニングセミナーをやっています。本当に本人が来て、準備をして、支援をしてダメだしを食らうみたい。ぼくもトレーナーとして参加しますけれども、ぼくが受講生に言うのはシュミレーションしない限り、やらないうて。だいたい、こんな感じでいいですかって聞かれるとダメって言う。コテンコテンに言う。「帰れっ」って言ったこともある。「本人来てるのに、なんだお前ら」って。「本人が来てるんだぞ。失敗させないように、できるだけ努力をしろ」って。

それが礼儀だと思っている。準備で8割9割支援は決まる。

長期の記憶。

強い人もいますし、全く長期に入らない人もいますから。人によっては。

すっごくいじめられた経験があるとするよ。修学旅行のときも物凄いいじめがある。「修学旅行楽しかったかい？」って聞くでしょう。「はい楽しかったです」って、本当に心から言う人がいる。「窓の風景がね、こうだったんですよ、加藤さん」「JRはね、時刻表通りに動くんですよ」上手い具合に対人の記憶が抜けているの。

“良かったな”って。

生きる術だよ。

それは逆に言うと、神がそういうふうにしたんだね。そこにもし長期の記憶が入ってたら、彼はどうなっていたか。

長期の記憶が強い人でもワーキングメモリが弱い場合がある。

難しいことをたくさん知ってる。だけど、さっきなにやってたかわかんなくなる。そうするとサ

ポってるって風に思われちゃうんですね。かわいそうにね。

ピークスキル。

ピークスキルが他者と比べて抜き出るとサバン症候群みたいになるんだろけれど、サバンっていうのは天才とかじゃなくて、他に繋がる回路が全部そこに行っちゃたんだろねってぼくは思ってるんだけど。

運動の特性。

四肢機能が不器用な人もいますね。アンバランスな人もいる。

こんなふうに彼らの特性をおさえたときに、ちゃんと整理する必要がある。

この子はどんな子ですかと問われたときに皆さんは、「明るくて元気でいつも何か笑顔です」って言うのかな？

特性を語ってください。特性を。

コミュニケーションではこういう受容の力があります。表出はこの程度ですね。社会性は、対人関係は例えば男の人だったらオッケーだけど女の方は難しいですねとか。

ここに書かれていることは全部配慮しなければだめ。

持っている能力を発揮するために、特性に関してはこっちが配慮する。

それ以外のところで君の目標に関しては努力してって。ここはこっちが配慮する。

男の人がオッケーだったら、男の人でも女の人でも大丈夫にするのではなくて、ぼくは、男の人の中で、できる力を伸ばそうって思う。

ここの特性は、結果変わってくるんです。

安心できる世界ができて、ここはできそうかなってなる。

ここを変えようってことは、自閉症を治してやろうってことなんです。傲慢極まりない。

昔日本人が戦争中にやったことですよ。韓国人を日本人にしようってね。満州人を日本人にしようって。満州人が悪かったんですか？韓国人がレベルが低いのか？自閉症がレベルが低いのか？あり得ない、そんなことは。

少数派だからって配慮するんだってことなんです、配慮っていうのは。

ちゃんと特性を書き出してください。これが支援者として、やらなきゃなんないことなんです。

つまり、彼らに対して配慮する支援があるとする。周りの人にそれを説明するときに TEACCH なんです、構造化なんですって、それでは納得してもらえないかも。この人は右側の視野の刺激が満載で、右側に物があるとダメなんです。だから、右側にパーテーションが必要なんですっていうことを、特性が見えなければ支援なんて広がっていくわけがない、絶対。証拠はここにあるんです。ここを語れる支援者は大変優秀です。だけどここを語れない支援者がとっても多いんです。

証拠で、科学で、支援はするものだと思っています。

ぼくらの職場でもここは徹底的にやるしかないので、「その支援をあなたが主張する理由は

何っ？」て聞きます。「理由はなあにっ？て」。

何となくじゃダメなんです。あの子がそうだったからじゃダメなんですよ。この子の特性はどうだったのっていうことですね。

このシートはさっき言った特性の窓をメモすればいいんですね。どこに何を書けばいいかわからなくなるかもしれません。とりあえずどこに書いてもいいです。

だけど、自分がやっている支援を説明するときに、証拠を語れる人であってほしい。それが支援者だとぼくは思っています。

特性は改善することよりも配慮することです。

できる限り配慮されていて、その中で学びが展開されます。配慮することが多かろうがなんだろうが、お互いにすべきことなんだもの。ぼくも頑張るべきだし、彼らも頑張るんだから、お互いに本人のパフォーマンスをあげようとするんだから、総体は変わらないというのがぼくの考え。

本人だけが頑張るんじゃないよって言いましたよね、障がいの定義の中で。

で、配慮することが終わりましたと。

特性は年齢とともにずっと変わっていくんだけどね。だけど、その配慮の中で何が学べるのっていう意味なんです。ニーズから考えるんです。

個別の支援計画を立てるときにね、配慮することと、配慮する中で教えていくことは違いますよ。教えること、学ぶことってというのはニーズからくるんですよ。特性からくるのではないんですよ。特性は配慮するんですよ。

教えることはニーズ。

将来何を覚えないのか、今何ができたら嬉しいのか、それを配慮した中で教えてあげて、“できるぞっ”てことが増えたら、般化されたら、特性として配慮すべきことってというのは、意外と軽減されてきたねって、それがぼくの持論なんです。

さあ、理解が支援を前進させるっていうお話をします。

理解しようとしなないものは去れです。ぼくの前提は。

理解しない奴は去れじゃなくて、理解しようとしなない奴は去れなんです。

理解なんてできません。全部、できませんよ。ずっと理解しようとするんです。ぼくたちは、彼らのことを。こんな特性もあったの、ここは気付かなかったとか、理解する営みって終わらないんです。

すべての人が理解者になるなんて思っていません。無理です。少数派だから彼らは。だけど、そこを理解する感性がある人は、耕して増やしていくんです。そこがぼくの多数派工作。従って皆さんは多数派工作の網の中に入ってしまった。

理解しようと謙虚に彼らに近づこうとしている人に対して、彼らは絶対に嘘をつきません。

支援の基盤にあることは、枠組みを伝えることと意味の関連を伝えることです。

枠組みというのは、君の周りにはね、社会性の困難さがあるんだから、周り見えてないんだよ。周りこんなになってるんだよって。

あの子が泣いているのはこういう理由なんだからって、ちゃんと教えてあげる。

世の中のスケジュール、実はこういうことになってるんだってことをちゃんと教えてあげる。

彼らの枠組みとぼくらの枠組みがずれちゃって、だから、“こういうつもりだったんだけどな、ぼくたち”って思っても、彼らは違うつもりで思ってるから、そこで意思の疎通が合わなくて、どっかんと爆発しちゃうんです。ちゃんと枠組みは説明する。

狭く深くスポットが当たるからね、目の前のことが見えるわけ、今これをやらなきゃとか。だけど、次にこれをやったら良いことあるのかなとか、ワイドに物事を考えられないから、のめりこむわけ。フルマラソンを100メートルで力尽きるかもしれない。そういう方々なんです。これが終わったら良いことがあるっていうことを教えなきゃいけない。

枠組み、見通し、情感、選択肢とか。

選べるのはここからですよって。

今の状況に対して支援をしてください。

支援をしていくと逆に言うと、今までできていたことができなくなるケースもまれにあります。それは、わけもわからずやってたんだけど、周りの状況が見えてくることによって、これはきついよっていうのがあるんですよ。わからないから、仕方がないから拉致状態でやるんですよ。運動会でもよくあるんですよ。幼稚園や低学年の頃は、やっちゃった。3年生くらいになったら、もうできない。うるさいし、待ち時間長いし、“もう俺はやんねえぞ”ってなったときに、真面目な先生ほど苦労するんです。

前にできてたんだから、前に戻さなきゃってなるわけ。

前にできてたけどできなくなることってあるんですよ。

皆さん、逆上がりやれっていったら何人できますかね。昔はできてたんでしょ。「今やれっ」てぼくが言ったらまずいでしょ。体重も同じですよ。二十歳の頃は45キロだったの。今65キロ。「45キロまでダイエットするわっ」て、それは枠組みが違うんですよ。今の枠組みは60キロでいいよって枠を作らなきゃいけない。

今の条件で、今に支援してください。

過去の栄光は捨てましょう。

で、わかってるだろうと思っても失敗させない。

丁寧に支援をすることが大事です。

意味の関連を伝えましょう。

ただ勉強するんじゃないんです。十数えるよ、できたね、凄いつて。それじゃあつまらない。十数えたらどうなるのかってことを教えたい。十数えたら、こういうふういきちっと収まるんだ、

十って良いねって教えたい。

ただ、本当はね、習慣とか手順だけで生活を組み立てられたら、いいかもしれない。大きい変化がないって意味で。ただ同じことやってると飽きるからね、彼らはね。

同じような生活をやって小さな変化があるっていうのが、良いルーティンなのかもしれない。

本当はね、それだけじゃ生活って組み立てられない。変化があるし、色々あるわけですよ。なんか訳のわかんない活動もしなきゃなんないわけ、人間って。

何で俺がこの仕事しなきゃならないのってことがあるんですよ、皆さんもそうでしょう。

そういう時ぼくは自分に言い聞かせています。“この仕事を頑張ったら良いことがあるよ”て。よくわかんないけど頑張ったらいいことがある。ひとつの活動の意味がわかんない、けど次の活動の意味がわかっていれば、意味のない活動も意味を持ってくるんです。

頑張ったらいいことがあるっていう生活が基本です。

どこでも同じです。児童館でも、学校でも、児童デイでも、頑張ったらいいことがあるんです。家帰ったらすぐにおやつは食べられるって、なに言ってんじやってぼくはなるんです。おやつがいいことなら、その前に何かすればいいんです。何か宿題やろうぜって、庭の掃きくらいやらせろよって。児童館に好きな遊びがあるんなら行けば良いじゃないですか。その前に何を頑張らせるかを考える。「頑張ったね、じゃあ遊ぼう」なんですよ。まず遊ぼうは、あり得ません。

それが自然にわかるんだったら苦労しないんです、彼らは。それが自然にわかるんだったら就労支援なくていいんだもの。就労支援は何で教えるかっていうと、頑張ったら金もらえるぞって教えるんですよ。何でそこから教えるのって、誰も彼らに学齢期のときに教えないから。それは暗黙の了解だとみんな思ってるから。

ぼくらはみんな頑張ったらお金もらえるし、お金ないと暮らせないって、教わらなくても知ってるけど、彼らに誰も教えていないから。

国民の義務だから働くっていう人より、DS 欲しいから働くって人の方が絶対働きます。報酬ってすごく大切な支援です。日本の教育の文化って、報酬のために働くんじゃなくて、働くことが尊いって教えるんですよ。美学の問題であって、暗黙の中には働かなきゃ飯食えないってのがあって、それを暗黙の了解でわかる人には、美学で教えるのも良いかもしれないけど、美学だけで教えてはダメなんです。

さあ、鉄則。

見てわかるように支援しましょう。何でも見てわかる支援をする。模範を示してもいいんですけど、模範は見えなくなるんです、すぐに。だから、もう一回見直すことを、ちゃんと手がかりを残さないといけないんですね。

靴を反対に履く人多いでしょ。

勘違いするの支援者は。反対だって意味がわかってるって。

反対で履き替えるって意味はわかってるんだけど、反対がわかってたら、反対に履かないんだって。だから、反対に履かないことを教えるためにどうするか。

中敷にシールを貼るんです。マッチングをしないと。中敷は履けば見えなくなります。絶対に損はしません。

ねじをね、8個入りのねじを袋に入れて商品にする。8個なんてわからない人がいる。わかなくてもいいじゃん、全部埋めろって。埋めたら移せ、それでいい。

こっちが頑張れば彼らのパフォーマンスはあがるってこと。

鉄則2、自分に対する誇りが持てるように支援する。

指示の仕方はやっぱり違うでしょう。

「準備しなければ更衣室は出ちゃいけません」。これじゃ自尊心は下がるでしょう。「準備してから更衣室を出たら偉いです。5分でできたら凄いです。」人間は失敗するんですよ、失敗はスルーしてください。上手くいくことが凄いです。これでいくしかないんですよ。肯定的な表現。

ゲームに負けると怒り出す人がいる。

「積み木を倒したっ」て言ったら、「励まそう」って肯定的な行動を指示してあげなきゃいけない。儀礼的にやるかもしれないですよ。「どんまい」って。でも、「よく言えたな」って。言わないよりは、嫌われないんです。

はっきり言います。好かれる人間にするんじゃないんです。嫌われない人間にするんです。嫌われないや何とかなるんです。

ぼく、全員に好かれていないけれども、刺されるまでには嫌われていないからそれでいいの。だから、ぼくらだってそうなんだから、彼らにそれを教えるってだけ。

勘違いするの支援者は。好かれる人間になるようにって。“甘いぜ、自分ができないくせに。”

鉄則3、一人でできるように支援しよう。

一人でできるって大事なことです。一人でできると周りに左右されないの、かえって状況が良くなるんです。依存すると波に飲まれます。

“自分はこれしてりゃ安心だな”となると、周りがどんなに変わっても人に迷惑掛けません。嫌われません。

一人でできる場所を作ってあげることも大事です。あなたの場所はここですって、場所を作ってあげることも大事。

この仕切りがなかったら、「お前の仕事何?」「材料貸せっ」てなって揉めごとになったりする。これはまずいです。だから、図書館の揉めごとないんですよ、ブースがはっきりしているから。ブースがなくても、話しかけるなよっていうオーラがあるから、見えないブースがあるんですね。

高機能の療育のモデルです。

“いいから一人で過そうぜ。”

みんなと一緒に、誰かが介在すればいつでもできますから。一人で過ごすことって教えな
いとできないんですよ。それは保険です。

一人で判断をしていいよ。

指示されて一人でできる力も大事です。でも誰かに指示されなくても自分で判断できる力は
もっと大事です。だからスケジュールが大事だということです。

材料がなくなると固まってしまう人がいる。誰かが近づくと喋れる。「困ったら呼べっ」て言う
んだけれども、困って呼べないから困ってるんです。

そういう特性に配慮するんです。呼ばないように呼べばいいんだって考えるわけ。押せばピ
ンポンってなるんです、これ。日本人の文化にこれはピッタリくるんですよ。押せば来るんです。
居酒屋もピンポンでしょ。気楽でいいですよ。

これが彼らに対する配慮。

自閉症の人たちへの支援は目に見てわかるのが基本です。

いつ、どこで、何を、どのように、どのくらい、次は。これをちゃんと伝えることがポイントです。
このどっかがうまく伝わらないと、彼らは停滞するか勝手なことを始める。

視覚的な支援が有効だってことをずっと言ってます。何か聞いたこともあるし、わかっている
はずですよ。

なぜ、視覚支援か。

強みを生かしていく支援を考えてください。強みに向かって支援をするんです。それが鉄則
なんです。弱みに向かって支援しなくていいんです。弱みを補って人間的魅力が増すことはあ
りません。強みが生かされるから人間として魅力があるんです。だから視覚的支援なんです。
当たり前なんです、人間として。だって、こんなに得意と不得意の差があるんだもの。だから
強みで引っ張りましょうよ。自信を持って視覚的支援をしましょう。ぼくはそう思っていますね。

全部わからなくていいですよ。

そんなに人間は単純じゃないし、わかるわけがない。

彼らだってすべては表現できてないんですよ。

安っぽいカウンセラーはこう言うの。「なんでも話してください」って。何でも話せるかって。だ
からぼくらがやることは近づくことだけなんです。謙虚にいきましょう。近づくんです。理解する
営みを続けなければいけないんです。

ただそれだけです。

そのことが今日伝えられればいいなって思っていました。

ご質問はありますか。ないですね。

では、懇親会でお会いしましょう。どうもありがとうございました。

10月11日 10:00～

おはようございます。

二時間午前の枠でお話をします。

集団の中でどうやって彼らを支えていくかってこととお話したいと思います。

視覚的支援ってね、視覚的支援をすればできるって思ってる人がいるんだけど、大間違いなんです。

一生懸命カードを作ってみた、本人が見ない。何が悪いか。

視覚的支援が悪いんじゃないんです。

教えてないんです。

では、今日は集団に対する考え方を話します。

まず、充実感から。

我々は、なぜ支援をするのか。

ご本人が豊かで充実した生活を送ってほしいから支援をするんです。それが支援の目的です。いい人生を送ってほしいと思うから。療育も同じですね。

だけど、昨日も言ったんですが、支援は今の生活に対して行われるんです。

将来は、今の生活と連続した向こうにあります。支援者は、将来像はもちろん思い浮かべます。将来像があって、今何を教えるかってことをトップダウンしないと支援できないんです。でもその子に、将来これがあるから頑張ろうって、違うんですよ。「今、これを頑張ったら、いいことがあるよ」って落とすのが個別の支援計画。

想像力の困難性がある彼らが将来を想像できますかね、できないんですよ。ぼくらはなんとなく将来は想像しているかもしれない。20年後何をしているかなとか。

ぼくは、仕事がなくなったら多分ボケます。自信があります。そのことに気づいてから、奥さんに優しくなりました。「捨てないでください」と言っています。

だけど、彼らは想像することができないんです。目の前にないので、想像できません。

そうすると、「将来これができたら良いことがあるよ」っていう支援は、ほとんど意味がない。「今これができたら良いことがあるよ」っていうのが支援なんです。

そこをどういうふうに落としていくかっていうのがぼくらのセンスだと思います。

今が充実して初めて、明日も良いことがあるなって、今が楽しいから十年後も楽しいことがあるなっていうのが、彼らなんです。

今がいかにか彼らにとってハッピーになるかってこと。

ハッピーって何って話です。

ハッピーってのんべんだらりとした生活じゃありません。

自立ってというのはね、自分の力で判断している場面があるか、自分の力で選んでる場面が

あるか、自分の力で活動に取り組んでいるか、これが自立です。

けっして、ゲームをしているからハッピーではありません。おやつ食ってるからハッピーではないんです。楽しい余暇をしているからハッピーではないんです。それも大切ですけれども、ずっと日曜日だとぼけます。間違いなくぼけます、人間は。たまの休みで頑張ったら温泉に入れる、たまの休みで頑張ったからこの宿に来られる、ありがとう日本財団さんって思ったんでしょ。そうですよね。それが大事なんですよ。

たまの休みでなけりゃダメなんです。ずっと日曜日じゃ人間だめにします。だから彼らが、自分の力で判断して、選んで、取り組む場面をちゃんと設定しなければ、支援にならないと思います。

じゃあ自分の力自分の力って書いてるけれども、全部自分でやるのかというとそうではなくて、昨日もちょっと言いましたよね、ぼくらの歩み寄りと彼らの頑張りでトータルでこなせばいいので、彼らは支援付き自立でいいですよ。

皆さんも支援付き自立ですよ。

自立してますか？ してないでしょう。

誰かが支えているんです。

彼らも同じです。

できる部分、わかる部分は彼らもあるし、できない部分もあるし、みんなが支援付き自立なんですよ。もっと言うと、介助しなければならないところは徹底的に介助してください、きれいに。そこは絶対きれいにやれって言う。

だから、「できるところは絶対お前がやれ」って言う。泣いてもわめいても「ふざけんなお前やれ」って、それがぼくの自立感ですね。

それが明白になれば彼らは実にきれいに動いてきますが、今日は特別だよなんてやるじゃないですか。自閉症の方は、特別が毎日になってしまうので、スペシャルイズエブリデイですから、彼らは。だから、一時泣いても知らないって感じ。そこは勝負。そうしないと結局、「それは前にやっただろうお前が」って、なる。やっちゃったんだから、こっちが。責任問題になっちゃう。

彼らに、もう自分が自立してるんだってことを教えていかなきゃならない。伝えていかなきゃいけない。

どうやって自立を考えるんでしょうか。

ひとつはプラスの視点で考えてください。

できない部分で評価をしないで、できる部分で評価をしてください。

「食事が上手くできないんですよ」って言うお母さんがいたんですよ。ぼくは必ず言うのは、「できないの？ 食べないの？」って聞くと、「こぼしながら一人で食べてるんです」。

手づかみで食べててもいいじゃないですか。おにぎりは箸で食べるのは無礼なんですよ。

手づかみできるように支援すればいいんでしょ。小さいおにぎりにすればいいんでしょ。

完全自立ですよ。人間として劣っている部分じゃないんですね。

評価するところはいっぱいあるんですよ。そこに気が付かないと支援はできません。

“できないな”とか、“困ったな”と思った瞬間に発想を変えましょう。リフレーミングしてください。‘何ができてんだ’、‘どこまでできてんだ’。そうするとできない部分だけが鮮明になります。それを課題分析といいます。全部できないんじゃない、これだけができないんだと。

もうひとつは、組み合わせと補填の発想から自立を考えます。

小さいできるを組み合わせましょう。小さいできるを組み合わせれば、けっこういいできるになるんですよ。昨日皆さんに写真を見せましたが、8個のねじを袋に入れる写真を見せました。8個なんかわからない、1も2もわからない、けれども、小さいできるがあれば、全部埋めろってできるがあって、移しかえるっていうスキルがあって、それができれば仕事ができるっていうスライドでしたね。彼らができることをちゃんと見つけてあげてください。

不適応行動がある人も、けっこうできることあるんですよ。365日暴れてないんですよ、実は。暴れてる瞬間はね、本当に何分かなんですよ。何分か以外は上手くやってるんです。だから、上手くやってるのはどこなのかってことを考えてほしいですね。だって、上手いかわないところって誰がやってもそう簡単に上手いかわないもの、実は。

あとは、自立は関係性からも考えられます。

少なくとも人の助けがなくてもできるのが自立です。補助するグッズがあって、それを活用できれば自立です。

皆さんは携帯電話を買い換えるってときに全部自分で設定しますか？

説明書見ながらするでしょう普通はね。それ自立でしょう。

「説明書見ないでやれ」って言われないでしょう。それも立派な自立なんです。

さあ、人に助けてもらおうとしても、自立があります。

人が変わってもできるのであれば、それは立派な自立です。

お母さんお父さんには言うんです。「お母さんにだけできることがお父さんにもできたらそれは自立だよ。うんと褒めてあげなさい」って、子どもを。だから、自分だけができてって支援は、自立感としては良くないんですよ。

“私が明日休んでもそんなにこの子変わらないだろう”って、それが大事です。

小学校のクラスで良くないクラスのポイントはたった一つです。自習できないクラスはダメです。先生がいなくても、変わりの先生が来てもやるのが立派なクラスです。先生がいなくてもそこそこやるというクラスが一番いい。

そのために同じような支援感がなければならぬんですね。

人の影響を受けないってことが自立なんですね。

人の影響を受けない人は人が変わってもできるんですね。

担任の先生が変わっても、スタッフが辞めたとしても通い続けるわけ。

人の影響をモロに受けていると、人が変わったら来なくなっちゃう。

それは、自立をさせていなかったってことです。

もちろん好き嫌いがありますよ。ぼくだって若い女性から支援を受けた方がいい。呑みにいくなら女性の方がいいし。男だけだったら飲みたくありませんよ。だけど男だけの飲み会でもぼくは行きます。人の影響を受けなくて自立してるから。補助するグッズはアルコールってね。自立してるんですよ。

感情から考えます。

本人達は一人でできたら気持ちがいいんですよ、やっぱり。自信が高まるんです。煩わしくないんです。

特別支援学校のお子さん達なんか、親御さんが送ってくるケースがあるわけよ、学校までね。送るのは良いんですよ、安全確保だから。全ての基準は安全第一だからね。校門まで送るのは構わないよ。でも、学校の中は安全でしょ。そこからは「一人で行けるなら行かせなさい」って言うの。それをやるとね、やっぱり子ども達変わってきます。自分が判断するから。

あるお母さんは「先生と話したいから」って言う。「子供が行ってから話せばいい」ってぼくは言ったんですけども。

一人でできるっていうのはすごい気持ちいいんです。

最後まで完結するっていうのはそれだけで十分褒めたことになります。

仕事をするときにやる気が起きる上司の言葉は何でしょう。「任せるよ」なんですよ。「任せよ」って言われて、「嫌だ」っていう人はお仕事辞めてください。残念ですが、働くこと自体が無理です。

彼らに任せてあげてほしいんです、できているところを。かかわって、その子が高まる部分もありますが、かかわらないで高まる部分もあるんです。集団を考える構図です、ここは。全部かかわらなきゃないかっていったらそうではなくて、放っておく、あえて任せる、あえて自立させるってことをです。ぜひ考えていただきたいなと思いますね。

難しいことをです。誰かと一緒にやるってことよりも、簡単なことを一人でやるってことの方がずっと人生にとって価値があるんですよ。

つまり、集団を考える行為っていうのがいくつかあるんですけども、一つ目。集団の中であつても本人が自立できている場面があれば、オッケーだということです。逆にそれがなければ、まさに集団の罠に陥っているってことなんです。

集団の中でもちゃんと本人が自立している場面があれば、それは立派な集団構成なんです。みんな一緒に「何とかちゃん大丈夫、大丈夫」って、それはダメなんですよ。

これ(このセミナーの場)集団ですけどね、ちゃんと自立してるでしょ皆さん。座っているし、眠気をこらえて頑張っている。自立していますよね。寝ても怒りませんからね、ぼくね。声は大きくなりますけれど。

今度は集団について考えて見ましょう。

集団を考えるときには、社会性を考えなければなりません。社会性には、三つの定義があります。対人関係と集団行動とルールとの理解があります。

対人関係は、自閉症の人には、距離感が近い人もいますし、遠い人もいます。相手の立場に思いがめぐらない人もいます。めぐりすぎちゃう人もいます。両極端なんですね、やっぱり。めぐらない人は‘忙しい’とか、‘つまんなさそう’とかいうことが全くわからないので一方通行になっちゃう。逆に、褒めてのお礼とかの事も気が回らなかったりするんだけれども、この二つが気が回りすぎちゃったりする人もいます。

集団行動です。

人混みを嫌がる人もいます。

札幌は、地下鉄があるんですけど、ある人が、「地下鉄ダメだ」っていうんですね。「地下鉄乗ってる人って湧いてくるんです」って、人が。バスを待ってる人は整然と列になってるんですけどわかりやすいんですけど、「地下鉄はすいてるなって思っても人が湧いてくる」んだそうです。

あとは、「他の人と同じような行動を取れない。取らない。意味がわからない」っていう人もいます。集団全体の意思をとらなきゃいけない。“「エイエイオー」って何のためにするの？”って。

暗黙のルールがわからない。

恥ずかしいとか、TPO がわからない。恥ずかしいっていうのは難しいですよけっこう。恥ずかしいっていうのはチャンネル的には、人との関係とか集団の関係とか、社会的な関係の中でチャンネルは三つなければダメなんです。

自分のチャンネル。自分がこうしたいとかこう思うとか。

相手のチャンネル。あなたはこう思ってますね、今大丈夫なんですよって相手がどう思っているかを映すチャンネル。

もうひとつは俯瞰のチャンネル。“この光景は格好悪いな”。“これは良くないぞっ”という俯瞰のチャンネルなんです。

この三つのチャンネルを上手く切り替えられる人。テレビ番組でいうディレクターが、はいこのカメラ、このカメラ、っていう風に切り替えられる人は社会性において見事に立ち回れます。営業マンって優秀な人は切り替えが上手な人。

彼らは基本的にですね、相手のチャンネルと俯瞰のチャンネルの映りが悪いんですよ。だから、思ったことをズバツといつちゃうんですよ。

だから、「恥ずかしいとか TPO がわからない」っていう人に「恥ずかしいでしょう」という支援じゃなくて、何をどうしたらいいのかって教えてあげなきゃいけない。

自分の思いを他の人に押し付ける人もいます。

昨日も話しましたが、“自分の好きなものは相手も好きだ”と思っちゃうんですね。バスマニ

アの人がいて、「中央バスのあの路線の運転手が変わったんですよ」、みたいなね。

白か黒かで考える。本当に百かゼロ。95点でも崩れちゃう人がいるしね。「60点でもけっこういい人生だよ」って教えてあげなきゃいけない。

勝負に負けてくやしがる人にもこれがわからない。ぼくらは教えられなくても、負けたときにどう振舞うかがチャンスだと知っているの。だから、負けてもさわやかに握手をするときに、好感度アップっていう俯瞰のチャンネルが入るわけ。オリンピック選手でも、四位だった人が負けてくやしけど、ちゃんとインタビュー受けている人は好感度上がるでしょ。くやしいのは皆あたりまえなもの。嘘に決まってるんだよ。「精一杯頑張りました」なんて。メダル獲れると思って四位だったら、“くやしい”に決まってるでしょ。だけど、俯瞰チャンネルの映りがいいから、“切れたり不機嫌な顔をしたら損をする”ってわかってるから、社会性がオッケーなんですね。

社会性という軸とです、知能という軸で分けたときに、社会性が高い低い。知能が高い低いって分けた。一般的には。(図を示しながら)このレベルの人も、このレベルの人もいますよ。知的障がいの方はね。社会性高い人もいますし、そうじゃない人もいます。社会性高い人いますからね

じゃあ、自閉症群はどこにいる？って、ここにいるんですよ。社会性の面ではやっぱりハンディがあるっていうか、困難性があるので、人と上手いくことを望むんじゃなくて、そこそこ人と揉めないで、淡々と暮らせるようにっていうのが目標になる。

つまり、好かれなくて良いです。嫌われなきゃ良いです。人との距離感が少し取れれば嫌われないです。だから集団の中で嫌われないような距離感をちゃんと保証してあげれば上手くやっていきます。

別メニューとか、別スペースの方が断然いいってこと。

好かれなくてですよ。でも嫌われないでしょう。

休み時間に図書館行くからって、好かれなくても嫌われないよね。

二次会行かないと好かれなくても、絡んで嫌われることはないよね。

そこに相談役が身近にいれば絶対に嫌われる状況を作らない。「あいつはこう言っているけれどもこういう意味なんだぞ」って。それは学校であれば先生だし、児童館であればスタッフだし、児童デイでは職員さんだし、職場であれば上司だし、そういう人がいれば大丈夫ですね。彼らに教えるのは好かれるスキルではなく、嫌われないスキルです。

ぼくは人から好かれてはいないけれど、嫌われてはいないだろうって、嫌われてるかな…

社会性を考えるときの基盤ですが、集団に入っていれば社会性が高まるというのは大間違いです。いろんなところで言ってひんしゆくかかっていますが絶対自信を持っています。集団に入っているから社会性が高まるなんてあり得ません。自分ができることがあって高まっていくんです。ただいるだけで社会性が高まるなんて絶対にあり得ない。それは逆に言うと失礼なんです、いるだけでいいよなんて。何をやるからいるんだっていうのがなければ集団参加なん

てできないし、できる活動がたくさんあれば集団適応が増す。

だから、この論理がぼくの中であるので、「通常級が良いんですか？特別級が良いんですか？」ってお母さん方からの相談があったときにこう答えます。

そのときにこの子にお母さん方の願いは“集団に入れば社会性が高まる”と思っているから、大人数の方が刺激があって良いと思っているんですよ。だから、「活躍できるのかい？」って聞くと、「できないかもしれない」という訳。「だったら、小さい人数の方が良いよね」って。ぼくははっきり言います。

そして、常識は多数派の論理であるということをぼくらは忘れてはいけません。

障がいの方は少数派であって、少数派は決して悪ではないということです。別に政権とらないう政党たくさんありますよね。言ってることは確かに偏屈な部分はあるかもしれないけれど間違ってるわけじゃないよね。少数派って偏屈に思われるし、頑固に思われるし、“融通きかねえなお前”って思われちゃうんです。間違ってるわけじゃない。少数派であるということを認識したら、それもいる集団だっていうことを認識しなきゃいけない。

個人の集合体が集団なので、集団のルール設定は、そこに合わせる。みんなができるところがルールであって、もっとできる人だったらそこは褒めればいいんだから。

でも、彼らには、「あなた方少数派なので多数派の考え方を学びなさいよ」ってぼく言います。「少数派だからできなくなるんじゃないで、少数派があえて多数派はこう考えてるんだって勉強しよう」って、それがソーシャルストーリーだったりするんだよね。

集団って一体なんでしょう？

個人が重視されない集団は絶対衰退します。

良い集団っていうのはやっぱり、個人が“ぼくはここで活躍できるんだ”っていうのを持っているんだらうなって思うんですね。そうすると、一人一人をちゃんと見ることで集団を動かすポイントが見えてくるんだと思うんですね。

なかなか動きを切り替えるのができない人がいるとします。

廊下に並ばなきゃいけないときに、「さあ、みんな並ぶよ」って言って、残った子に「並ぶよ」って言うのは誰でもできる支援です。しかし、その子に対して、「もう並ぶ気になってんの？」って切り替えを先にしてあげて、「じゃあみんな行くか」ってなったら、そんなに遅れないかもしれない。どうぞ一人一人をちゃんと見てあげてほしいなって思います。

集団参加です。

集団の参加っていうのは二つの視点があって、活動の共有と場の共有っていうのがあるんです。どうしても集団参加って活動の共有だけを考えてしまうのですが、場の共有でも立派な集団参加です。

皆さん今日の午後にグループセッションをしてもらうつもりですが、今は話し合いをしていな

いので場の共有ですから、活動を共有していません。

場の共有でけっこういいですよ。活動を共有しなくても立派に集団参加していますよ、皆さん、よかったですよね。宴会だってみんながいつも活動を共有していないよね。話をしている人たちは活動を共有しているけれど、ひたすら食ってる奴もいるでしょう？でも、集団参加して

るじゃない？

二人でも集団です。

二人は立派な集団です。

三人いたら自治体です。

四人は国家レベルです。

五人いたら国際レベルです。

二人は決して個別ではなく立派な集団です。

部分参加も集団参加です。部分参加で良いですよ、別に。だから昨日ぼくは皆さんの宴席が始まっているときでも平気で先に風呂に入れるわけです。部分参加でいいと思っているから。「遅れました」って言いながら入っていけばいいわけでしょう？

一人で役割を果たすことが大切なんですよ、社会では実際は。一人で役割を果たせないと働けないんですよ、実は。チームで仕事をしてるっていう意識はあるけれども、一人一人が担当をちゃんとやっているからチームになるんであって、その一人一人が「やってください、お願いします」って言ってたらチームにならないです、絶対に。

ちょっと集団に対する見方を変えていただきたいなと思いますね。

集団参加できなくても場の共有ができれば良いから。

よりよく参加する。

参加する場面が多いというのが集団適応なので、集団適応は能力ですから、社交性です。場の共有は社会性、適応していくのは社交性のレベルになっちゃう。

集団適応の目標は一人一人違います。得意な人は高い目標を作ってリーダーとしてぜひ頑張ってください、そうでない人はどうぞ紛れてください。

場面でも違います。

好きな活動のときは適応が増します。

好きでない活動は適応が減ります。

したがって、目標が場面で違います。

いろんな活動があるでしょうけれども、活動ごとにその人に何を求めるのかってことをきちんと分けてほしいと思います。

‘ここでできたからこれも頑張ろう’じゃなくて、‘苦手だなと思ったら、5分でいいからね’とかっていう目標をちゃんと作ってやる。

「友達がいらない」という悩みを打ちあける人もいます。

そのときにぼくが言うのは、「ぼくもないよ」って。

ぼくも友達いません、一人だけ。ぼく、友達の定義がはっきりしていますので、理由を聞かずに十万円貸すっていう、それができるのは一人だけ。どんな理由でも返すあてがなくても貸すのを友達って言います。それができるのはたった一人だけ、ぼくの大学時代の友達ですがね。友達って少ない数なんです。百人友達がいるなんて変だよ。

彼らに言うのは、「友達とクラスメートは違うよ」って言います。

「みんな仲よし」って言うけれど、嫌われなきやいいんだから。

クラスメートと友達は違うよ。

一人でいればけっこう格好いいじゃないか。

そして彼らに言うのは、友達がいないって嘆いている本人達に言うのは、「大人になって、いずれ大人になるのに、もう大人のぼくと話してるじゃない。大人と付き合える技術が君にはあるんだから心配いらないよ」って。

同年代の子と付き合うのってめちゃくちゃ難しいんです。関係性がころころ変わるから。だけど、はっきりしている関係性は楽なんですよ。

お母さん方にも言います。

三年生の子であればね、「クラスで上手くいってないんです」と。三年生の子と上手く付き合う技術をね、仮に二十年かかって覚えたとして。二十年経ったら三年生と遊べないですよ。だったら「先物買った方が良い」って。大人と付き合えた方が良いいってことを教えていかなきゃいけない。友達がいないことが問題でなくて、友達がいないと悩むことが問題なんです。上手くいってない人に対して、「大丈夫だよ、私と上手くいってるじゃん」って言ってほしい。“大人と上手くやってるじゃん。大丈夫だよ”と思わせてあげてほしいなと思いますね。だいたい今の友達はさ、一生の友達じゃないものね、きっと。“そんなに頑張らなくても良いんじゃないか”って思っていて、友達だと思える人が一人できたら良い人生じゃない。“友達できなくなると良い旦那、良い奥さん見つかったら全然オツケーじゃない”って思うんですぼく。

本能なんです、だれからも好かれたって思うのは。

親もそう思うし。

本人もそう思うんですよ、やっぱり。

その度に本人はぶれるよね。

当たり前だよ。

「加藤さんそう言ったけど、ぼくやっぱり寂しいから」って言うのね。

で、ぼく、いつも同じこと言うの。

「はい繰り返すよ。同じこと言います。友達はいなくても良いです」って言います。

ぶれないために彼らは来るんですよ。

同じこと言ってほしいから。

これはある高校生ですが、友達がいないんですよ、彼ね。“友達がいると良いな”って思う。でも、「友達の基準がわからない」って言うんです。彼に教えました。「友達がいて、仲間がい

て、単なるクラスメートがいて、特に関係ない人がいて、知り合いじゃない人がいて、友達ってこのくらい狭いエリアの人なんだよ」って。「だからここから先の方は嫌われない程度にいきなさいよ」って、図にしたりします。

コミュニケーション。

みなさんが担当するステージ、いろんなステージがありますが、幼児期、学齢期、成人期。

幼児期は吸収する時期です。

学齢期はつなげる時期。

成人期は生かす時期っていうふうに考えています。

幼児期の支援で配慮すべきことは…。幼児は可愛いです。本当に思う。伸びるし、吸収する時期だから。そのときに気をつけることは、可愛いから許されることは可愛くなくなったら許されません。“今がよければとかそのうち何とかなる”っていう発想は実は危険なんです、幼児期は。幼児の方が改善しやすいんです。将来これはダメだなとなる事はなるべく早めに改善する。小さいうちに変えられるんだったら変えた方がいい。

小さいうちこそ一人でできた事をちゃんと褒めてほしい。

そして、幼児期の支援で一番大事にしているのが表出コミュニケーションです。

相手に伝える。

伝えたらいいことがある。

それがとっても大事です。

彼らは支援を受けながら生きていくんです。

支援付き自立でいいので。

そうすると『人が停止をすとか、禁止をすんだと教えるのではなくて、人は何か伝えたら味方になってくれる』んだってことをちゃんと伝えてあげてほしい。

その後の人生に大きく影響します。

そういう支援を受けてこられなかった人達ってというのは、成人期になって受容コミュニケーションから作っていきなさいいけない。

世の中こうなっていますよ。

あなたはここにいるんですよって。

表出がちゃんとできる。“困ってる”ってことが伝えられる人は、パニックになりにくい。伝えたら何とかなると思っている人は、少なくとも伝えるまではパニックにならない。これ人間の本能なの。

小さい子どもってさ、道路で転んで怪我をするよね。怪我をしてすぐに泣く子ってあんまりいないの。で、家に帰ってお母さんが「どうしたの？」って言った瞬間に泣くの、子どもって。だから、伝えられる喜びをわかっている子は道路でパニックにならないの。伝えてから泣くの。そうするといくらでも支えられるの。道路で泣いてたらだれかにしかられるかもしれないけれども、密閉した関係の中で泣くんなら良いじゃない。

コミュニケーションは関係性で存在します。

一方だけじゃないんです。

歩み寄って丸をつくれればいいんです。

赤ちゃんはコミュニケーションの能力は高くはないです。

赤ちゃん見てぼくたちは、「赤ちゃんまだ喋ってないですね」とか、「お母さん赤ちゃんコミュニケーション心配じゃないですか？」って言わないでしょう。それは、赤ちゃんは泣くだけでいいですよ。泣けばお母さんが意味を考えるから。“おなか为空いたのかな？”とか“オムツかな？”とか、二人で丸を作るから良いんです。コミュニケーションは本当に関係性なんです。喋れないからコミュニケーションダメじゃなくて、喋れないことでわかる相手がいないからダメなんです。

コミュニケーションは楽に理解できないとダメです。

面倒くさいと伸びません。

だから、居酒屋ピンポンの話をしたんです。

居酒屋ピンポンは皆さんにコミュニケーションの力を育てます。楽だからです。

言葉を育てるんじゃないんですよ。コミュニケーションを育ててくださいね。言葉が出るからいいってもんじゃないんですよ、言葉が出なくても大丈夫です。

表出のコミュニケーションを教えるときは、まず交換を重視します。

訴えてきたら交換。だからおやつや遊びの場面で教えることが多いんです、すぐ交換できるから。

受容コミュニケーションでは枠組みがあるってことを教えます。

‘世の中こうなってますけどご理解くださいね’って。

集団の中であってもコミュニケーション手段が確保されていれば良いわけですよ。

報酬

学齢期はね、もっと一人でできることを重視したいんです。

学齢期は支援者が変わるんです。どんな良い先生でも、どんな長くもってくれる先生でも頑張って6年間ですよ、もってくれたとして。

だから人が変わるんですけれども、人が変わるときに一人でできることがあれば適応が良くなるんですよ。あんまり影響されないから。

学齢期終わったらすぐに社会人なので、学齢期は、報酬のために頑張る力を育てることはとっても大事です。

で、学校卒業後の生活をイメージしなきゃなんない。

支援者が変わるから、一貫継続した支援が大事。

関係者ミーティングが凄く大事。

当たり前やってほしいことには報酬は必要ないです、当たり前だから。でも頑張ってほしいことには報酬があっても良いですよ。それを教えなきゃなんないですね。だから報酬をや

るってなると枠組みが絶対必要なんですよ。これには報酬をつける、こっちはお前勝手にやれって。だから着替えたくらいで報酬なんかいららないんですよ、当たり前だから。だけど、家のために何か仕事をした、みんなのために仕事をした、それに関しては報酬があって良いわけ。枠組みがちゃんしないと「頑張ったから金くれ」になっちゃう。それは違う。「頑張ったことは偉いけれど、報酬の対象じゃないよ」ってことは伝えないといけない。

“報酬で釣るなんて”って、意見も確かにあります。

しかし、給料ってなんだろうって考えたら、皆さんは仕事を愛して生きがいにしてやっておられるかもしれないけれど、少ない給料かもしれないけれど給料があるから働いているんです。「その給料がないよ」「ないけど頑張って」って言われたらやりますか？ぼくやりません。ぼく、この仕事は嫌いじゃないし、ぼくにとっては合ってるのかなと思います、「お前合ってるから給料やらないけどやれ」って言われたらすぐ辞めます。とっても大事なんですね。

小さい頃に肩を叩いて十円貰ったことがぼくはあります、じいちゃんにね。高校生くらいになってね、友達と遊びたいとか、デートをしたいとかね、お金が欲しいわけですよ。親に金くれなんて言えないからじいちゃんが頼りですよ。だけどぼくはじいちゃんに「金くれ」なんて一回も言ったことがない。「じいちゃん肩凝ってないか？」って言ったんです。「凝ってない」って最初言ってたんだけど、雰囲気わかったんだね。「凝ってる」って言うの。じいちゃんに頑張ったらお金をくれるってことを教わったんですよ。ぼくにジャイアンツファンの何たるかを教えてくれたじいちゃんでした。負けてるときの応援するのがファンだってね。負けてる試合の最後までラジオを聞いていましたね、じいちゃん。それがぼくのファン論理なんですね。で、あるコラムに書いたんですよ、その話をね。発達障がいの方は苦しむから、のた打ち回るときもあるよね。パニック起こしたりね。“そういうときに応援するのがファンなんだ”って書いたの。知る人ぞ知る名コラム。全然反響ないんだけどね。

つまり“何か報酬のために頑張る場面があっても良いかな”って思ってるんです。お仕事だったり、ね。

成人期いきます。

休憩は基本的に個別で取るものです。

成人期に大事なものは休憩です。

凄い大事なんです、休憩が。

行事とかイベントは実は休憩ではないし、余暇ではないと思っています。

“個人が楽しむことが休憩とか余暇だ”とっていて、集合体だから、楽しい人が3人いたらイベントになる。

成人期はね、仕事のスキルは休憩できるかどうかです。

休憩できない人いるからね。

上等な暇つぶしって言うんですけれども、全部が楽しいことじゃないの余暇なんて。暇つぶすってこともあるわけね。

成人期は実年齢を意識してほしいなと思います。

福祉系の職員なんかには、「自分より年齢が上の人にはそれなりの言葉遣いをするように」って言います。「何とかちゃんとかって馬鹿にするな」って。「知的障がいがどんなにであろうが年齢が上なんだぞ」って。それは口をすっぱくして言います。

余暇を整理しましょう。

スタンダードな余暇と、セレブな余暇と、ゴージャスな余暇と、これは加藤が使ってるんです、余暇には3種類あるんですよ。

ゴージャスな余暇しかない辛いですよ、やっぱり。いつもいつも外出できません。そして、ゴージャスな余暇ばかりだと人間だめになります。

スタンダードな余暇があつて。まあ、タバコ吸うとか深呼吸するとか。まあ、“一日の終わりに乾杯しようか”ってセレブな余暇があつて、“たまに頑張ったから温泉来ようか”ってゴージャスな余暇があつて。このバランスがとれてると良い。

“こういう余暇をちゃんと教えてあげたいな”って思うんです。集団の中でも余暇が確保されていることが大事なんですね。

今のを踏まえて何ができるだろうかってことを話します。

自立できている場面があれば良い。

“どうやって自立させるんだろう”って。

一人でやれる場面をどう作るか。

例えばこういう課題を作ります。

今から写真をたくさん出します。一人でやる時間があれば良いわけですよ。

知的にハンディがあつてもね、入れるだけならできるんですよ。「一人でやっててね」。「お勉強コーナーでやっててね」って。乗っけるでも良いですよ。

じゃあちょっと色でも分けてみる。

実は大きい小さいって凄く難しい概念なんですけれども、比較したらわかるんです。「こっちを大きいって言うんだよ」とか、今度は言葉で示してあげる。

これは形が強い人ね。「形で考えてごらん」って。これも難しい人は実は色の方が強いので、手がかりはいろいろなんですね。

これはバツを教える。バツには入れないってことを教える。一人でできるので楽しいんですよ、やはり本人達が。

合わせていく。完成させる。このスタッフはね、凄く良いなと思ったのは、どうせ課題とかやるなら、「こういうパッチンするやつを作ってみようね」って言ったら、作ってきたのがオシャレでしょう、もの凄く。パチンってやったら、ひまわりができるとかさ、バナナができるとか、この発想ぼくになかったので、凄いですね。

やりながら楽しくなってくる。しかも一人でできて、みんなの中で疲れたお子さんが“じゃあち

よっと勉強しようか”ってそのコーナーに行って一人できて、あとは戻ってくれば良い。

これ、食い物好きな人ね。勉強としては良いことですよ。文字と名称がマッチングできる。ぼくの基本はですね、プリンにはひらがなで書く必要ないって言うんです。プリンにはプリンだから、最初からカタカナで良いよって。ドーナツなんかね、ひらがなで書くと、‘どおなっつ’なのか‘どうなっつ’なのかって聞かれたりしてね、混乱するし。

今度は文字が入るやつね。

これは、概念を教えるためですね、犬とか猫。自分の家で犬飼ってる人がいるでしょう？自分の家のは犬だってわかるんだけど、他の家のは犬ってわからない人がいる。犬はこれだけだと思っていて。一対一ならできるんだけど。だから分類で教えてあげる。これも犬、あれも犬、これも猫、あれも猫。だから、お父さん男だって知ってるけど、ぼくも男だってわかるかどうかは別問題ですよ。

こんなふうには課題とか上手く使って、場の共有をしながら、ちょっと離れる場面、全部一緒でなくても良い場面があるかもしれない。そうすると子ども達のトラブルを未然に防げるかもしれない。トラブルになってから、動かすんじゃなくて、なる前に「ちょっとあんた一回勉強しようね」とか、「終わったら戻っておいでねっ」てことがあるかもしれない。

コミュニケーション手段を確保しましょう。ちょっと会食パーティーをしようっていうときに、自分のせりふをこういうふうに見てもらって、「こういうことを言うんだよ」って。勝手に言っただけで喋るかわからないからね。ちゃんとせりふを決めてあげて。自分で書けることもありまじすけれども、おやつ場面でコミュニケーションをしようとした一コマです。

欲しい場面で手渡すということをする。この子はね、非常に横着タイプなんです。でも、ぼくらは手渡しを重視する。スタッフが、カードを受け取ったら、カードと同じものを交換します。

この子にはパソコンを教えました。パワーポイントを使ってプレゼンテーションも教えました。パソコン画面で、会話をしたりもしました。そういう方法を確保してあげてほしいなと思います。

報酬

ある児童デイの話です。幼児から高校生まで受け入れています。中・高生くらいになったら、アルバイト感覚で来させようと言っています。‘お預かりじゃなくて働かせようぜ’って。働いた分だけ、親から預かったお金を渡しています。働きにきてると思っている人たくさんいます。働くよね、見事な場の共有。こんなふうにはですね、シールを切るとか、ペットボトルを分類するとかね。単価が決まっています、お金を渡していくんです。彼らは、療育の一時間半は働いているんです。

さあ、今度は集団の中での余暇が確保されていればいいという話。

最初オセロをしていて、できるようになって、挟み将棋を図解して教えました。勝った人はこうやって、負けた人はこうやってって、セッションを二段階でやってるんですが、スタッフがオセロで負けるようになったので、挟み将棋になったんですね。彼が負けたときにどうするかもセッションの中に入る。

これは、一人で感覚を抑えるっていうんでしょうかね。グターっとするスペースですね。こんなふうに市販されているものもあります。けっこう癒されますよ。みんな一緒になくても、このスペースで寛いでおいでなんてことがある。テンション下げる活動っていうかね、こういう余暇もとっても大事です。余暇って楽しいことだけでなく、どう潰すかっていうのも凄く大事な発想です。時間の概念がなかなか取れない方々だから、上手くそこを潰してあげるっていうのも我々の支援なんですね。

いろんなことを5つのポイントから例を出したんだけど、事業所のスペースとかいろいろな問題でなかなかできないということもあるかもしれません。

例えば、みんなと一緒に過ごすんだとしても、さっきまで紹介したことができないとしても、このくらいのことはできるかもしれない。

「さあ、みんな頑張るよ」じゃなくて、名前を呼んであげる。

「はい、潔君よく聞いているね。」

そこに一对一の関係ができるので、かなり違うんですね。

で、近くで合図をしてあげる。合図も褒め言葉の合図もありますよ。グッジョブとかね。

みんな一斉に活動をするにしても掲示物や目に入るものを少し整理してあげればこっちを向いてくれるから。

二人でも集団だという意識変革はしてください。ちょっとのコーナー、ちょっとの隠れ家っていうのは大事なんですよ。

あと、あまり共用しないほうが良いね。誰が入ってくるかわからないと居場所にならないから。誰も入ってこないから居場所になるんであって。

時間差を活用することもありますよ。人によるからね。先に入ると安心だという人もいるし、それじゃ嫌だという人もいるし。

別メニューをちょっと用意してあげることができると良いですね。みんな一緒にじゃなくて、はい三人グループとか、五人グループとかね。刺激が少ない方が、集団の中の彼らは支援しやすいです。だから‘場の共有で良いよ’って話です。

視覚的情報をなぜ重視するのか、きのう言いましたけれどもね。耳からの情報もジェスチャーも消えていきます。できれば残って、あとから確認できるものが良いです。定点に情報コーナーがあって、情報があるってことが示されています。‘何かあったらここ見てね’って。ご家庭でも冷蔵庫に伝言メモがあったりしますね。そうすると、ここを通じてその子と個別の関係ができる。

枠で囲うとか、色をつけるとか、なるべく見やすい情報を作ってあげる。それもなかなかできない、としても、話し方を構造化することはできます。1回にひとつのことしか言わない。「はい、まずここに座りましょう」。座ってから、「はい、鉛筆を出しましょう」。

枠組みが先で内容があとの原則っていうのがぼくはあるんですけども、三つのことを言いたいときに、皆さんはなんとおっしゃいますか。「一つ目は、二つ目は…」っておっしゃいますかね？ ぼ

くはそうは言いません。「三つのことを言います」ってまず言います。「三つ言うから聞いてね」って言います。それをしないとこっちも話し方がだらだらしちゃうの。

あと、ひと言ズバツという。人によって効果はあつたりなかつたりするんですけども、例えば、雑巾で拭くときに「キュッキュツてやれ」っていったら、キュッキュツて拭いてくれる人がいる。話すときは構造的に端的に言ってほしいです。

でも、基本はあとから確かめられる情報があつて、だけど補助的にやらなければならないことは、はっきりと端的に言うということが大事ですね。

こうやって情報を整理して伝えていくんですけども、情報を取ることは頑張ることではないんですよ。何をすることがわかるためにエネルギーを使うんじゃなくて、何をすることがわかって何をやる。ここが頑張るところで、情報を伝えたら、情報を彼らが整理するためにはどんどん手伝ってあげて良いです。情報が入った後で、頑張るのは彼らです。

人が情報になると、なかなか般化が難しいので、人が使っている情報を信頼してもらおう。

Aさんがこういう紙を見せてくれた。

Bさんもこういう紙を見せてくれた。

じゃあだから人が変わってもオッケーなんです。

その情報がないと“Aさんがいなくなったらどうしよう…”になっちゃうので、引継ぎも楽にならない。それが視覚的情報が大事だということです。

こちらが歩み寄らないと彼らは本当に歩み寄ってこないと昨日も言いました。彼らにとって情報の処理っていうのは困難なことなのでそこは歩み寄ってください。

人と同じことが平等ではありません。

それぞれの違いに応じて適切にかかわることを平等といいます。

みんなが同じというのは、平等でもなんでもありません。

逆に差別だと思います。

違う支援をするのは当たり前。

ですから、‘集団の中でもできることはあるよね’ということを書いたかったんですね。自分でできる情報が少しでもあれば、こちらも彼らもエネルギーを使わないので、もっとエネルギーが大事なところに向いていくんじゃないかなとぼくは思っています。

これで、午前を終わります。

午後は、2時半くらいまでお話をしたいと思います。

午後は療育をどう考えるかということをお話したいと思います。

療育の目的についてお話ししましょう。

ぼくの考える療育の目的は、自分の持っている力が発揮しやすい環境が何か、彼らに知ってほしいということです。

その上で自分ができることを増やしてほしい。

ですから、環境が適切で、教えることも適切であるという2段階が療育には必要なだと思います。言い換えれば、彼らが療育に通うということは彼らが自己実現を感じるということなんです。“俺ってけっこういいぞ”って思ってもらいたい。

自己実現とはいったい何でしょうか？

“自分はけっこういけている”という実感が大事です。すごくじゃなくて、けっこういけるでいいんです。“すごいける”ってなったら、大変ですよ。“世界で自分だけが良い”ってなっちゃうからね。皆さんも“けっこういける”くらいで生きてるはずですよ。

ぼくの論理でいうと、“誰かが認めてくれている”という実感がもの凄く大事です。誰も認めてくれないのは寂しいですよ。一人くらいが認めてくれれば良いので。

“誰かのために何かのために生きてる”っていう実感を持つことが大事。これがないと人は絶対崩れます。

ですから、自立というのはできるとできないの論理だけじゃなくて、ここまでできてるってことを伝えなきゃいけない。「それで良いよ」ってことを伝えてください。

そして、定型発達に近づける支援というのは、自己実現にはつながりません。だって、自分が自分のままでけっこういいというのが自己実現のはずなのに、定型発達にならなきゃならないという支援は、人格否定であり、人間否定になります。

修正や訂正がない完了、つまり任せるよってことは十分に褒めたことになるんです。ですから自立を大事にしてくださいってことです。それに、報酬があったら十二分に褒めたことになります。

本人セッションで、ぼくが良く使うフレーズです。「それが魅力のひとつです」って言うんです。「それが魅力です」って言ったら、ある成人が、それしかないんですねって凄く怒ったんですね、字義通りだから。だから、正しい言い方をしますと、「それが魅力のひとつです」と。皆さんも、「それが魅力のひとつです」と誰かに言ってあげてください。そうすると、楽しくなります、関係が。ご主人でも奥さんでも誰でもけっこうだと思います。

あとは、「少なくとも加藤はそう思います」と言います。ぼくの常識が世間と違ってることばをぼくも気づき始めてるので、多くの人がそう思ってるよなんて無責任に言えないので、「少なくとも加藤はいいと思いますよ」ってことを言います。

子どもなんかだと、キーパーソンの「先生やお母さんが、きっと喜んでくれるでしょうね」なんてことを伝えます。「絶対喜んでくれる」とは言いません。喜ばないかもしれないので。

これは、セッションを重ねるなかで、一人で課題に取り組む姿がどんどん見えるようになった子どもです。一人でやってるってことは、彼は言葉は喋らないけれど、“俺、けっこういけるな”って思ってるんです。

これは、当時小学校一年生の子です。ぼくがセッションの修了証を出したんですよ、渡した瞬間に彼は深々と礼をしたんです。誰も教えていないのに。ぼくら凄く驚きました。誰かが認

めてくれるってことがとっても大事なんだなってことを、あらためてね。ネクタイくらいすべきだったなと反省しました。

これはぼくですね。自閉症実践トレーニングセミナーの打ち上げの様子です。三日間とてもきついセミナーなんですけど、受講生にとってもぼくらにとっても。ぼくはカウントダウンから始まります。あと72時間したら飲めるぞって。何かのために頑張るんです、ぼくは。いつもこんな感じですよ。

育つ人っていうのは自分に誇りを持っています。

誇りのない人は育ちません。誇りのない人は絶対に育ちません。

育たない人は目的がないから人と同じようになろうとします。こういう人は育ちません。

違っていいんですよ。違った方がいいんです。金子みすずのそのままです。みんな違ってみんないいんです。

生きる力は違ってもいいんだ、違うからいいんだということを知ることです。

ぼくはよく言うんですが、「せっかく自閉症に生まれたんだから違っていいんじゃない」って。「せっかく自閉症に生まれたんだから」って思っています。素敵な自閉症にするんですよ。定型発達に近づけるんじゃなくて、自閉症として素敵にしてください。

自閉症で良かったなって、思わないかもしれないけれども、嘘でもなんかそんなせりふが言える人になってくれれば良いなって思っています。つまり、彼らを変えるのではなくて、まず、あなたの考えを変えようというのが療育の基本です。彼らが変わるのは結果変わるのであって、ぼくらが変われば彼らが変わるということですね。

さあ、療育の落とし穴についてお話をしましょう。

療育場面では安定して活動に取り組めることが増えた。そのために療育をしてるんで当たり前です。でも、家や幼稚園や学校でもできるとは限らないんです。

療育をやってる人っていうのはそこに全力を尽くすから成果が出ます。

しかし、それが家や学校でできるとは限らないということもちゃんと知っておかなければならない。

お母さん方もよく言うんですよ。「児童デイに行けばできるんですけど家ではできないんですよ。家でもできるように教えてください」ってね。お母さん方からは、「家で荒れることもあります。児童デイで頑張りすぎてませんか？」って言われるのね。お母さん方にどう答えるかって言うと、「それは家の環境が全く整ってないことを白状してるのと同じなんだよ」って。彼らは犬じゃないんです。犬は調教して戻ってきたら、そこそこになってるんですよ。でも彼らは人間なので、環境を把握して、環境に合わせて行動するという本能があるんです。ですから、良くない環境だと力を発揮しないんです。児童デイで疲れてるのではなくて、家に帰ったらわかりにくい環境なんで荒れてるだけなんです。ぼくに言わせれば。だから親にもそこは言います。良い環境知った人が、良くない環境でやる気にならないのは当たり前のことですよ、

絶対に。5LDK の家を買ったはずだって人が、「はいワンルームですよ明日から」って言われたら、やる気なくなりますよね。

だから、療育をするということは、本人ももちろんできるようになることが増えていくし頑張っ
てほしいんだけど、周囲の環境が合わさってできるっていう公式なんです。本人プラス周囲の
環境が、できるという公式。できるための条件は、本人だけでなく周囲の環境を整えなけれ
ばならないということですね。

さあ、それを踏まえて療育するって話をしたいと思いますが、療育をするということは支援
のベースラインを明らかにすることが療育の目的です。

療育場面ですぐれたスタッフが良い環境の中でやっていること。しかし、その環境が全部に
は通じないかもしれない。お母さんでも、先生方がいたとしても、そこにつなげていくときに、
今やってることを全部やってくださいというのは無理なんですよ。それは般化しないんですよ。
だから、「このくらいならできますね」っていうラインを見つけて、最低限これだけの支援が必要
だとか、こういうことの配慮が必要だということをそれを引き継がなきゃならない。

俺がやったらできるんだと。俺は凄いなんだと。たまにはうぬぼれてもいいんですけども、
“ぼくじゃなくてもできるために何が必要だろうか”ということを考えていかなければ、その子の
生活を24時間見れるわけでないので、“誰がやってもできるラインはどこだろうか”ってことを
考えてほしいわけ。

そのベースラインを関係者が共有しなければならない。どこに行ってもそこそこできること
が増えていけば、彼らの生活はとつても良くなっていくんですね。

自分たちだけが良い支援をすることからステップアップして、どうやって伝えることをするか
ということを療育の現場の人は考えなければならないのだと思います。

つまり、療育をするということは、本人だけが頑張るのでは無く、関係者が何を努力するの
かという視点を持つことなんです。

お母さん方に言うのは「療育をするっていうことは、親にも協働療育者としてのハードルを
課すということだよ」と話します。単にお預かりだけでは療育って言わないので。

できることがあったときに良い環境を知るわけだよ子どもは。

家に帰ったときに良くない環境だったら荒れるに決まってるんですよ。

だから、“できそうなことをお母さんも頑張るんだよ。療育に出すって言うことはそういうこと
なんだよ。やってあげるとか、やってもらうっていうだけの発想だったら療育って言わないよ”
って思っているんです。

それがぼくにとっての療育なんですね。

ぼくがコンサルテーションに入っている児童デイの写真をいくつか見せたいと思います。
支援のベースラインを明らかにするときに、この児童デイではこんなシステムを作りました。

「片付けなさい」と言えば、手取り足取りすれば片付けるんだけど、“どこでもできるためにどうしたらいいんだろう”と考えたときに、とにかく1個ずつ分けたんです。片付けるものを。そうすると、家でもその通り置いてあるとできるんだと。職人技の支援者がいて、目線だけで動かして満足してはいけなくて、目線なんて一般化しないんだから、‘かごを三段階にしたら良いんだよ’ってことを教えてあげた方がいいんです。

こういうパーテーションがある。

家でパーテーションは難しいかもしれないけれども、‘壁に向かったらけっこう集中するよ’っていうベースラインがあったら、この子の机は窓じゃなくて壁に向かうかもしれないじゃないですか。‘家には壁があるんだから、ドアを閉めてあげたら良いよ’って。こういうベースラインでちゃんと明らかにする。

こんなふうのひとつの部屋でも、食べる場所と勉強する場所をちょっとコーナーを作って分けてあげると、できる人がいるかもしれない。

そういうことを療育の現場だけじゃなくて、どうやってそれを伝えていくのかということがとても大事になります。

おもちゃもこうやって片付けたら、片付けも上手になるんだってわかるんならカラーボックスを買ってもらえば良いじゃないですか。

ソファの向きを変えれば、仕切り感もあって出てきませんよってなるかもしれない。

スケジュールもこういうふうにやりましょうってね。なかには、横が有効な人もありますから、視線が縦にいかない人ね。

ぼくのかかわっている児童デイは三つあるんですけれども、関係者が支援のあり方を共有するために、個別の支援プログラムっていうのを作っています。

フェイスシートっていうのは基本的な情報ですね。生育歴だったり。インテークシートっていうのはお母さんの聴き取り調査、アセスメントシートっていうのがあって、職員が把握する特性等、目標評価シート、療育の記録、構造化メモをまとめたりします。

ぼくがかかわっている児童デイは療育の記録っていうのは二回に一回くらい出すようにしています。文字はあまり入れないで、「写真で記録しなさい」と言っています。それをお母さん達が自分の判断でコピーをとって、幼稚園や学校の先生に見せて協議をはかっていきます。

これは特性シートです。ご家庭だとか検査場でわかること、実際の生活の場でわかること。構造化シートっていうのはどういう支援があったらいいかってことを一覧にしたもの。

こういうのを作っています。

ですから、ぼくがかかわっているスタッフ達は、療育をしながらデジカメを撮っています。だけど、自立する場面が多いようなプログラムを組むので、とりあえず、バチバチやっているの。

支援のベースラインを関係者が共有するためには何が必要か。

ぼくがコンサルテーションに入っているところは、家庭訪問サービスをやっています。実際にやっている療育をいきなり家庭でやれというのは難しいので、こういうふうにやりますよ

ということを教えに行くんですよ。幼児さんであれば児童デイは家庭連携加算がつくんですけど、加算が付かない場合は三十分くらいで、私的契約をしてくださいということになります。これはある子のご家庭で療育現場と全く同じシステムで家にスケジュールが導入されたというシーンです。

そういう環境があって、この子達に幼児さんであればコミュニケーションを教えていく。

スタッフに渡す。離れたところに持っていく。持っていくことを教えれば本当にパニックにならない。

その他にもですね。高校生が来ている児童デイですね。

マジックテープを切る仕事をしています。療育の現場で良く使うので、彼が切ったものをスタッフが使っています。下請けの仕事をやっています。

これはですね。このふたはしいたけの菌が入っているやつで、ブラシでこするんですよ。これができる人っていうのは、‘これくらいきれいにするんだ’って見本通りできる人は大丈夫。できない人もいたんだけど、その場合にはですね。食紅をぬって「これが消えるまでやれ」ってやったんですが、消えきれなかったので辞めたんです。この仕事は依頼されている仕事なので、やったら工賃が入ります。

高校生です。これはさつき見せたね。お給料をもらうためのシール。こんな風に十円玉のシールでしてる人もいます。これは、百円になったので、これを百円に替えて両替を教えたりもします。

これはお給料をもらっているところです。今日のお給料は五十円ですって。お金は、親から出してもらっています。工賃が入る人は工賃から払っています。

やっぱり給料は現金が良いですね。もらったって感じがしますよね。

それから家事のスキルを教える人もいます。ニーズがあればやっています。これは、干す仕事、入れる仕事、たたむ仕事。この子は中学生です。

ぼくがかかっている児童デイは三つとも保護者学習会というのを定期で組んでいます。ぼくも喋りますし、スタッフも喋ります。それから親御さんとも一緒に勉強をしていくという発想を持っているんですよ。

これは、幼児だけを対象にしている児童デイがあって、身支度も大事な練習なんですよ。身支度ゾーンを決めてあげる。この子は足の裏過敏なので靴下を脱ぐんですね。“そんなことは戦わなくてもいいじゃん”って思うので、「帰るときは履きなさい」って。履いてるんですね。

幼児さんね、スケジュールの形も違います。この子は、好きなバスをもらったらスケジュールです。スケジュールをバスが動きます。となりの子がうらやましそうに見ています。スケジュールは一人一人違います。逆に同じだったらスケジュールいらないの。“あいつ、おやつ食うのか、いいな。俺はなんだ？これか”って見てるのね。こういうのをやっぱり育てなきゃなんないのね。色で分けるケースはあります。もちろんカードでない子もたくさんいますよ。現物っていう子もいるしね。

この子は「今スケジュールにいきましょう」って。この子はカードで見きれないため現物なの

でカラーボックスを使っています。その子によって違うのは当たり前。

一人で勉強しています。

特性から配慮しなきゃいけないで、片付けボックスが下になるとね、この子はね乱雑になるんだけど、横にスライド式だと上手くやれるんですね。高さも特性に合わせています。

離れたところに。幼児さんですよ。取りに行ってもまた戻すと、立派な社会人ですよ。

これは余暇ですね。みんなで過ごす余暇もあるし、一人で寛ぐ余暇も教えなきゃなんないので、ちゃんとブースにわけてあげます。

余暇選択メニューがあって、共謀できない子には共謀させない余暇を選択します。

もし、社会性を教えるんなら順番にやるとか交代でやるとかいうことを別の場面で教えます。

これも一人で遊んでるんですよ。太鼓が好きですね。この子去年4歳で最年少で自閉症トレーニングセミナーに協力してくれたんです。よく頑張りましたよね。

コミュニケーションを教えるときには基本的に、最初渡すのを二人がかりで教えたりします。頂戴っていうのが、先行プロンプトって言って、刺激になってしまう人がいるんですよ。“これがないとやらない”って覚えちゃうんですよ。渡しにいくときには後から神の見えざる手がヒュって渡しにいくんです。“あんたこれを渡しなさい”って。それを1対1でやってると、頂戴って示すことで、手のひらに頂戴しないとやらなくなっちゃうケースがあるので、最初はわりと二人で教えますね。

ですから、療育は卒業を目指すものなんですよ。ぼくの定義では。

ずっと療育するんじゃなくて、“違う場面でもできるように頑張ろう”っていうのがぼくの療育なんです。生活の中につなげてこそその療育だということです。お母さん方にも言います。「ずっと療育をしてくださいっていうのはずっと卒業できないってことだからね」って。

さあ、皆さんは専門家なんですね。

仕事でお金貰ってるから専門家なんですよ。

学び続けることができる人が、ぼくのいう専門家の定義です。偉い人とか凄い人を専門家というのではなくて、学び続けられる人を専門家と言います。

特に発達障がいの世界では障がいの特性理解は基礎基本です。いつも基礎基本に立ち返るんです。同じ話を何度も聞く。何度も聞きながら、“5年前のぼくとはやっぱり違うな”と、自分の成長を確かめる。優れた専門家ほど、基礎基本をとっても大事にします。基礎基本を学ぶことにお金と時間を惜しまない。

専門家っていうのは、本人を真ん中における人を専門家っていうんだと思っています。

いろんな組織の事情があるでしょうけれど、組織が動かなくても自分で動けるところは動けるんじゃないかなとぼくは思っていて、誰かのせいにしてもしかたがないんだろうと思います。

クビにならない程度に動けば良いんじゃないかと思えます。

もうひとつ専門家というのは自分の弱点を知っています。

自分が完璧じゃないことを知っています。

だから、苦手な分野はネットワークを作ろうとします。チームでジェネラリストになろうとします。ぼくも苦手な分野がたくさんあるので、それはもうその方の意見を聞こうと思っています。自分の限界を知りつつも本人のために今できる最高の支援を準備展開しようとする人、それを専門家といいます。

それから、どの人にも応じるのも支援の専門性です。

“こいつ嫌だな”とかありますよね。でもしゃあないもんね。応じなければなんないので、これができる人は十分専門家です。

だから皆さん大丈夫。専門家でしょ？頑張りましょう。

支援者魂という言葉があるんですけど、ぼくが作ってるんですけども。

本人や誰かのせいにするんじゃなくて、支援者魂というのがあある人は自分のふがいなさをいつも嘆いてます。

“なんで俺はこんな支援しかできないんだろう。申し訳ないな”ということを嘆く。これが支援者魂です。そして誰かに支援を丸投げするのではなく、自分が支えるのだという気概を持っている。「この人難しいのであっちでお願いします」じゃなくて、「難しいので聞きながらぼくやりませう」ってならないと、支援者魂がないってことになっちゃう。

それから、必要以上に高い目標を与えるんじゃなくて、ご本人が達成感を持てる目標をいつも用意している、それが支援者魂です。

準備に最善を尽くす誠意をいつも持っていたい。これも支援者魂です。来てからじゃなくて、来る前にほぼ終わっている。一番いい支援は本人が勝手に動いていて支援者は寝ているという。寝てたけど全部やって帰っちゃったよってというのが、一番いい支援だとぼくは思っています。

失敗はしたくないけどあるんです。あって良いです。

ぼくの哲学は二十分の一です。二十回に一回上手くいけばいいだろう。

のた打ち回った人にだけ見える光があります。のた打ち回らないとこの光は見えないんですよ。たまに、見えるんです。だけどまた消えますから、この光は。“なんか見えてきたぞ”って思うんだけど、すぐ消えちゃう。

支援って無様です。凄い無様です。のた打ち回らなければわからないことがたくさんあって、ずっとのた打ち回るんですよ。それがぼくの支援者魂です。

上手いかない事があっても大丈夫です。そこから逃げて丸投げすると支援者魂ないけれども、のた打ち回っている人は十分立派な支援者です。

ぼくは偉そうに言ってますが、皆さんが抱えている難しいケースはぼくがやっても難しいですから。誰がやっても難しいんです、支援なんて。そんな気持ちでこれからも頑張っていたければと思います。

次のワークの説明をしてから休憩に入りたいと思います。講義偏はこのへんで終わるので質問があればどうぞ。ありませんか？（講義はここまで）

STAGE3:気づき・自覚

二日間のセミナーで学んだことを、ブログ『虹っ子広場』を通して発信しました。

地域を超えて [2009年10月10日(土)]



日本財団さんから助成をいただいて「実践から学ぶ 発達障害支援団体エンバワメントセミナー」が始まりました。

遠くは愛媛県からご参加頂き、30名程の方がお集まり下さいました。

明日の夜まで、しっかり学び、しっかりと繋がり、ゆったり日頃の疲れを癒やし…

素敵な体験となるでしょう。

ワークが進んでいます [2009年10月10日(土)]

午後からは各団体の「ミッション」の確認を個別にしながら、互いの団体像を共有しています。



初めての宿泊型研修が終わりました。
とてもとても深い「学び合い」となりました。

「親の会」や小規模のNPOレベルの「発達障害支援団体」が連携して、私たちの子供に「未来を創る」ためのネットワーク構築が今回の大きな目標です。

専門家として支援する立場の人たちが一同に会し、熱心に・真剣に組織作りの基本や、自閉症支援の基本を学びました。

札幌の加藤先生が最後にまとめてくださったことを、参加できなかったスタッフのためにも紹介します。

1. 専門家とは学び続けることができる人
 - ・基礎基本に立ち返る(障害特性の理解)
 - ・学ぶことにお金を惜しまない
2. 専門家とはご本人を真中における人
 - ・組織が動かなかつたら自分で動く→誰かのせいにしていても仕方がない
 - ・自分の弱点を補えるネットワークを持つ→チームでジェネラリストになれば良い

自分の限界を知りつつ、本人のために今できる最高の支援を準備・展開しようとしている人を専門家と言います。

<支援者魂>

- ・ご本人や誰かのせいにするのではなく、自分のふがいなさをいつも嘆いていた。
- ・誰かに支援を丸投げするのではなく、自分が支えていく気持ちをいつも持っていた。
- ・必要以上に高い目標を与えるのではなく、達成感のある目標をいつも用意している。
- ・準備に最善をつくす誠意をいつも持っていた。

のたうちまわった人だけに見える光があります。

本物の支援者になりたいと思います。

そのために、この企画を通して出会えた皆様とともに『気付き・自覚・改善・波及』しながら、これからもネットワークとして力を付けていきたいと願っています。

学んでまいりました [2009年10月11日(日)]

昨日、りんごさんと同じく日帰りでエンパワメントセミナーに参加してきました。

第1部は加藤哲夫先生による組織マネジメントの研修。

組織が信用を得るためには何が必要か？NPOならではの不平不満はどうして起きる？組織が伸びてくるときにしなければならないこととは？戦力不足になってくる訳は？など団体として活動しているときに出てくる問題点と解決法をわかりやすく説明してくださいました。

日頃不安に感じていることがお話の中にでてきて、(あるある…！)と思って聞いていると「そういうことは必ずどの団体にも起きるんです」と、きっぱり言っていただいたりして、なんだかちよっと安心…。

午後はワークショップも行われたのですが、団体のミッションや事業内容などを書き出したり、組織図を書き出したりの作業に、あらためて、自分たちの目指すところ、団体の中での自分の役割等を再認識することができました。

第2部は加藤潔先生による自閉症の方を支援するための特性理解の研修。

何度聞いても心にしみてくる加藤先生のお話。

「彼らの特性とは配慮しなければならないところ。そこを変えようとするのは“自閉症を治そう”ということ。それは傲慢です。彼らは少数派なのだから、多数派の私たちが配慮しなければならない。彼らは“劣っている”のではなく、理解の仕方が違うだけなんです。近づく努力をしてください。」

セミナーが終わって、主人と息子が駐車場で待っていてくれました。

作並のもう少し先で釣りをして温泉につかてきたふたり。

車に乗り込むと、

「お母さん、俺、今日疲れた～」

と言いつつも、たくさん釣れたとご機嫌の息子。

少数派の息子。でも良かったね。たくさんの人たちが君たちに近づこうと努力してくれているんだよ。

ありがたいね。

私ももっともっと近づく努力を続けるね…。

みかん🍊

今日も楽しみ [2009年10月11日(日)]



「エンバワメントセミナー」の二日目が始まりました。
昨夜は遅くまで、素敵にネットワーク創りが進展していました。

今日は徹底して「学ぶ」日です。
ここに集ってくださった方々に感謝します。
そして…
ここから「何か」が変わる予感がしています。

学び続けて整理して [2009年10月11日(日)]

昨日、「実践から学ぶ 発達障害支援団体エンバワメントセミナー」に参加してきました。

秋休みの初日に、秋晴れの中のセミナー参加。宿泊型の2日間の研修ですが、小学生の子供がいるので、日帰りで初日だけの参加とさせていただきました。

留守番はできるし、特に一緒に何をすることはないのですが、私が居ないのは嫌なのだそうです。

実はこんな時、いつも少し苦しくなります。私が抱えている葛藤のひとつです。

主催側のスタッフであり、一受講者でもある自分。仕事とも割り切れないし、今は世間が思う完全なボランティアでもない。

もちろん強制参加ではなく、できる範囲でというのがサポートネットの合言葉です。

おそらく、親の会から発足した多くの団体が、分野や規模に関わらず抱えている現状だと思えます。こちらは完全なボランティアですがPTAの役員なども、地域の子供達のために頑張っている

のに、自分の子供は夜の会議でも一人でお留守番という現状も多いのではないのでしょうか。

第1部の加藤哲夫先生の組織マネジメントセミナーでは、仕組み作りをしっかりと行い、事務を効率化していく具体的な手立てを教えてくださいました。

そんなことを言ってもいいんですか(目からウロコ)といった、多くの人が抱えているけれど、口にしてもいいのだろうかというような基本の課題にも答えを頂いて帰ってきました。

基本をおさえて、自分のスタイルで活動を続けていく方向を確認することができたので、さらにこれを報告書にまとめて(汗)、仲間に伝え、自分達の方向を確認しあいたいと思います。

加藤哲夫先生の講座には何度か参加させていただいており、以前にも書きましたが、深い内容をわかりやすく、軽やかに教えていただけます。

団体に所属していなくても家族も1つの社会ですから、やはり、人生の必修科目です🍎。

きちんと整理していけば、シンプルなことなんだよって、背中を押していただける感じが大好きです。そんな中で少しずつ、上に書いた葛藤も落としどころが見つかっていく感じです。

第2部は、札幌の加藤潔先生の発達障害支援講座。

昨日は2時間ほど、特性理解、支援の方法などを学びました。

こちらも今日も参加できて本当に良かったです。

講座の中に有名人シリーズがあるのですが(私が勝手に命名。歴史上の人物に目隠しをしてエピソード等を紹介)、今回は彼らにはどんな支援が考えられますか?という投げかけで、3つの例が紹介されましたが、心の理論あり、ほめ殺し作戦あり、ソーシャルストーリーありと温かな笑いの中で脳にインプットしていただきました。

「学び続けてください。人は忘れるから。彼らを理解することはできなくても、近づくことはできる。」

加藤潔先生は、毎年数回ご自分でも受講し、基本を学びなおし、確認されているそうです。ぶれないために。

夕食会では、参加団体の実践報告が行われました。

今日の学びをこれからの活動に活かしていきたいとの感想もいただきましたので、そちらの実践報告会も今後行っていかれたら素敵だなと思いました。

日本財団の沢渡さんからは、助成についてのお話を頂き、どんどん活用して下さい、聞きたい事があつたらぜひ声をかけて下さいとおっしゃっていただきました。

やっぱり、出かけて行ってよかったと思える素敵な一日でした😊。
講師の先生方、日本財団さん、参加者のみなさまに感謝です。

今頃は、朝風呂から朝食会場へ移動中でしょうか…。
みなさま今日もよい学びを。

りんご

STAGE4 改善・波及

参加して下さった団体からの感想コメントです。

エンパワメントセミナー

特定非営利活動法人アフタースクールぱるけ

伊豆原 永子

宮城県作並温泉「ゆづくしの宿」で宿泊での発達障害の研修がある。法人からは慰安旅行の意味も含めて参加費をもらえるというので、ヘルプサービス事業の管理者と一緒に参加を決めました。

当法人は特定非営利活動法人です。平成17年に法人格の認証を受け、現在に至っています。目的や設立の思いは変わりませんが、一年一年事業が拡大してきていることで、組織として変革期・過渡期なのだと感じています。そこで、組織マネジメントを学び、今後の法人運営に生かせればと思いました。

当法人の児童デイサービスでは、発達障害のお子さんの利用が増えてきています。また、今後はヘルプ事業においても利用者が増えてくると考えます。そこで、スタッフのスキルアップ・障害理解は必須課題となってきています。まずは管理職から「発達障害とは」「療育とは」を再度勉強しなければと思いました。そこで、このセミナーに参加することにしました。

組織マネジメント力向上・協働

団体の発生にはいろいろなケースがあり、類型から、当法人はタイプCと知りました。設立メンバーは当事者ではないが、障害児の余暇を何とかしたいとの思いから仙台市の補助金事業で放課後ケアを始めました。事業を行っていく上で法人格が必要になりNPOの認証を受けました。

仕組み作りの話は大変勉強になりました。私たちも話し合いや密なコミュニケーションで問題を解決しようとしていた気がします。組織が大きくなり、スタッフの人数も増え、採用時期がバラバラな人材で成り立っているということを再確認しました。そこで必要なのはシステム化をし、事務で問題を解決するということ。マニュアルを作成するだけでは無く、可視化し、全員が理解できるシステムの構築が必要だと学びました。また、「運動は事務である」という言葉から情報の共有・開示が非常に大切であると学びました。私自身、事務の考え方が偏っていたのではないかと思いました。法人内の業務だけになりがちですが対外的な事務が重要なのだということを強く意識し、今後の業務を行おうと思います。現在は、減災・防災関係のマニュアル（利用者配布文含む）に取り入れ、検討・修正している最中です。

NPOの会員について、本当の会員とはお金を出してその団体を通して、社会を変えたり、何かに貢献するために会員になる人のことで、受益者ばかりになると運営が厳しくなるということを知り、当法人の会員についても、議決権の有無のところは参考にしながら、法人内で

話し合いをしていかなければならない問題だと思いました。

講演の中で、「青い芝の会」のお話と、「障害の考え方」のお話が心に残りました。1つの分野で活動していると見えなくなっていること、気づかずに過ごしてしまうことがなんて多いのだろうと思いました。フラットな状態で広い視野を持ち、専門職の自覚を持って活動しなければいけないと思います。

発達障害支援力向上・協働

「障害とはなんだろう」障害とは、恒久的に活動への参加に制限が生じている状態。また、障害とは本人の問題ではなく、周囲との関係性の中に生じている。

障害特性についての話の中に、支援者に必要な事は「障害特性を学ぶ」ことだと話されました。これは障害の特性なのか、本人の特性なのかの両方を見ないといけないというのは、本当にその通りだと思います。また、必要なのは配慮だということ。視覚支援をする、自立課題を用意するなどまさに配慮だと思います。個別なのか集団なのかでも共通していることです。毎日の支援の中に「配慮」を意識していきます。

意味の関連を教えるでは、将来に向けて、報酬の仕組みを取り入れる事が大切、特に学齢期にほうしゅうのために頑張ることを教えることが大切と学びました。児童デイサービスでは、年末に大掃除を集団活動で企画し、給与袋を用意し、ジュース券を報酬として渡しました。これは、非常に好感触でした。ぱるけの目的の1つに「働く大人になる」というのがあります。そこで今後は、集団活動の企画だけではなく、個別支援計画にも取り入れていきたいと考えています。

集団の考え方ですが、同じ事が出来る事が大切なのではなく、集団の中にも自立していることが大切だということ。これは、支援者が間違いやすいとおもうので、振り返り、修正しながら支援計画・実践していきます。また、社会性と社交性についても学びました。今までは漠然としていましたが、この講演ではっきりしました。この子は今どの段階なのか、今どちらが必要なのか判断し支援していかなければならないと思いました。

「療育とは支援のベースラインを明らかにすること」つまり、誰がやってもできるラインはどこか考えること。これは、個別支援計画作成時の強く意識していることです。しかし、家庭との連携は全家庭とできているかといえば、出来ていないと思います。個別面談をし、保護者の方と計画について共有し同意があってから支援を行っていますが、ここが今後の課題になってくるのだと思います。

本人と支援者が頑張る割合は、ケースバイケースとの話に非常に共感出来ました。他にも、「好かれたいけど嫌われない社会性」「幼児期の表出ができるようにする」「療育は卒業するもの」などたくさんのキーワードを学びました。これらをスタッフと共有し、実践していけるようにしていくことが管理者としての私の役割だと思います。支援者魂である「自分のふがいなさを嘆く」ことが出来、嘆き続けられる自分でありたいと思います。

両日とも、貴重な学びと経験をさせていただきました。また、とても気持ちの良い温泉でした。本当にありがとうございました。

エンパワメントセミナーに参加して

NPO法人みやぎ・せんだい子どもの丘

仙台市岩切児童館 館長 羽賀 崇子

このままでいいのだろうか？何かもっとできるのではないだろうか？

活動をしていく上で、私たちに本当になにができるのか？というような漠然とした想いと見えな
いなにかを見つめたいとおもい、参加したセミナーでした。

結果、とても大切なものをいただくことができた感謝しています。

宿泊型セミナーという濃密な時間の中で学んだことは、「ああ・・・こうやって様々なところで頑
張っている人がいる」というつながりを感じたことです。

「ひとりじゃない」その安心感。これがものすごく大きかったです。

両加藤先生のお話から『ぶれない』ことの大切さを教えていただきました。

切り口は違っても話をしている本質は同じ。面白いな～と。自分の弱いところ。弱さをどう補っ
ていくか。「あなたはどうする？」決して向き合って話をされたわけではないのですが、先生方
の言葉が発せられるたびに、「私」にむけて様々な矢が放たれた感じがしていました。

日々現場で頑張っていると、様々な情報が入ってきて「あれもこれも」と、根が欲張りなもの
で手をだしてしまい、ごてごてと飾りをつけてしまう。

某作家が「昔はいいものを(こどもに)与えるだけでよかった。情報があふれている今は、本
物をそのなかから見つけて与えなければならず大人の本物を見る目が大切」と話していたの
をふと思い出しました。

自分の中に「本物」のどっしりとした幹があったら、たとえ、左右に大きくぶれたとしても、戻っ
てこられる指針があったら・・・

役者が「私」が付きすぎってしまった役を、もっと本質に近づけるためにブラッシュアップするよ
うに、私たちの仕事も、時々ブラッシュアップする必要があるのだと、あらためて気づかされま
した。

セミナー後、まだまだですが、たちどまる自分に気づくことが多くなりました。

その支援は必要？本当に大切？他のやり方はなかったか？ややこしさを感じている子どもに
とって今の気持ちは？大人側の自分チャンネルだけでなく、彼らのチャンネルが今どう感じて
いるのか・・・なぜそんな言動や行動を取ってしまうか。

支援を行う大人が、周囲の人々が彼らの特性やもういちど基本を学ぶということの大切さ。
わかったつもりにしない。勉強することの大切さ。なぜそうするのか？自分たちがやってきた
ことを振り返る。そしてふたたび確認し歩く。それがいかに大切で難しいか。

2日間という本当に濃密な時間の中で、ぶわ～～といろいろな矢を浴びせられて・・・実はこ
うして感想を書いている今も自分の中で消化できないでいます。

研修のメモを時間がたってから読み返すと、「あら・・・ここに答えがあったじゃない！！」と悩
んでいることが単純なことだったと気づかされたり・・・まだまだ自分の中に埋めなくてはならな

い部分があるなど。幹がしっかりと立ってられるように、ぶれないように・・・基本をしっかりと自分の中に落としていこうと、思っています。

「わからなくなったら、聞きに行こう。」「話をしよう」そんな仲間が宮城にたくさんいることも確認できたし。

セミナーの時間そのものもとても勉強になりましたが、同じ釜の飯をたべた・・・じゃないですが、その同じ空間で学んだ仲間。それぞれの場所でやり方は違いますが、頑張っている仲間がたくさんいること。それを確認できただけでも大きな収穫でした。

いろいろと忙しい中での企画。そしてそれを支援して下さった財団のみなさんにお礼を申し上げるとともに、またこの濃くて素晴らしい密な時間を体験したいなと思っています。小さな一歩ではありましたが、確実に歩き出せたかな？と思っています。

支援者魂を大切に、日々頑張っていきたいとおもっています。ありがとうございました。

エンパワメントセミナーに参加して

NPO法人発達支援研究センター

代表 高橋 信子

当センターは山形市にあり、「生涯発達支援」と「コラボレーション」をミッションとしている。活動内容は「1ー相談・研修事業」「2ー不登校・ひきこもり、発達障害等青少年支援事業」「3ーワクワク指定児童ディサービス事業」を3本柱にしている。

1では年齢を制限せず、子どもから大人までのあらゆる相談に心理職が有料で対応している。2ではフリースペース「雨やどり」で当事者の居場所作りを行い、家族会を支援している。3では月～金曜日まで発達障害の幼児に対して早期療育を行い、土曜日に児童に対してSS Tを行っている。

今回、スタッフの一人がサポートネットに参加していた関係で、ちらしを見ることができ、センターからは私を含め4人が参加させて頂いた。参加の動機はNPOと発達障害の両方の学びが同時にでき、講師の方々との初めての出会いに期待し、宿泊してゆっくりできることと安かったことも大きい。

では、このセミナーで自分は何を学び、どんな内なる力が引き出され、何が変わり、何を共有したかをまとめてみる。

1. 加藤哲夫先生からの学び

NPO法人の代表をしているので、NPOのなんたるかは知っているつもりであった。しかし、基本的なことから学び直したことは自分の力になったと思う。

「市民活動とは問題をかかえ、それを仲間と共に解決しようとする集まりである」

当センターの場合はひきこもりの青年が身近におり、心理臨床、福祉、障害児保育に長く関わったスタッフが集まったことから、初めに述べた三つのことに取り組むことになった。与えられた仕事ではなく、自分たちでやろうとするのがNPOである。人数が多くなり、年数が経ち、常勤が雇えるようになると、初期の熱き思いが薄れ、経営として軌道に乗せることにあくせくしていた時だったので、講義を聴くことにより自己を振り返ることができ、気づき、これでは駄目だと自覚した。スタッフのみんなのエンパワメントを生かし、一人ひとりが自分のやりたいことを面白がってやれるように、22年度からはプロジェクトチームを組んでNPOのそれぞれの活動のあり方を検討することにした。

「会費を集めるのに全員自動振替がよい」

当センターは正会員(5000円)約30名、支援会員個人(5000円)約110名、団体(10000円)13団体で、総額約86万円である。会員の継続率は良い方だと思うが、手渡しあるいは郵便振替で入金して貰っているのが、払ったかどうかを忘れる人が多い。

「自分のためのお金を貰うのに頭は下げたくないが、NPOのためならいくらでも頭をさげる」をモットーにがんばっているが、納金に時間と労力がかかる。自動振替を会員に頼むのは抵

抗があるが、今後、検討したいと思っている。

2. 加藤潔先生からの学び

発達障害についての講義を聞く機会が多いが、潔先生の講義は独特のものがあつた。自己の体験を踏まえ、当事者の視点にたった見方、考え方であり、説得力があつた。時に過激な発言もあつたが、心に残つた言葉は

「障害は本人の問題ではなく、周囲との関係性の中に生じている。本人の力を発揮しやすい状況を作る」

「発達障害は得意と不得意の差が大きい。質的な違いは劣っているのではなく、少数派としての理解が必要」

「失敗させない、がんばったらいいことがあるって生活が基本」

「好かれるスキルでなく、嫌われないスキル」

「定型発達に近づける支援は自己実現にはならない。自分が自分のままでよいというのが自己実現なのに、定型発達にならなければならない支援は、人格否定であり、人間否定になる」

特に最後の言葉は、普通に目立たないように改善するスキルを身につけようとする傾向にある最近の風潮に警告を発していると思う。

講義を聞いて、知的好奇心が満たされ、明日からの発達障害児の療育へのエネルギーが沸いてきた。今後も機会があれば、また、講義を聞きたい講師の魅力があつた。

3. 交流会、ワークショップなど

夜の交流会では、参加した6団体の活動報告がなされた。児童館など日頃、当センターとはあまり交流のない団体の参加もあり、いろんな情報が入り、楽しかった。

人数制限もあると思うが、参加団体はどのようにして募集したのであろうか。もっと沢山の支援団体の人と交流したかったと思う。このセミナーが波及し、繋がるためには、全国に発信する努力も必要であろう。

ワークショップはいろいろな人の様々な意見が聞けて面白かった。やはり、講義だけでなく自分たちが参加するワークショップは、時間的余裕があれば、緊張感があつて必要だと思う。

10月のワークショップから4ヵ月近く過ぎ、記憶も薄れてきた感が否めないが、あのときの感動と高揚感は忘れることができない。

まずは、これを機会にこれからも参加した6団体とは、情報交換や学びを通して、エンパワメントしていきたいと思うので、また、声をかけて下さい。

数ある研修会の中でも心に残っているのは、主催者のNPO法人「みやぎ発達障害サポートネット」のみなさんの暖かいお心使いがあつたからこそと感謝いたします。

実践から学ぶ 発達障害支援団体エンパワメントセミナー報告書
「気付き・自覚・改善・波及…繋がりがあつた発達障害支援団体」
～内なる力を引き出すために～

2010(H22)年3月31日
2009年度日本財団助成事業

特定非営利活動法人 みやぎ発達障害サポートネット
〒980-0013
宮城県仙台市青葉区花京院1-4-1
TEL:022-265-5581
FAX:022-352-7088
E-MAIL:mddsnet@yahoo.co.jp
<http://blog.canpan.info/mddsnet/>
